
銀と青 ~ The Story Edition ~

桜月九朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀と青〜The Story Edition〜

【Nコード】

N5916R

【作者名】

桜月九朗

【あらすじ】

自称普通の女子高生である【秋月小夜】は、高校一年の春にある事件に巻き込まれる。

自称吸血鬼を名乗る探偵【浅見屋双司】は、ある依頼で自称普通の女子高生と出会った。

春から始まり春で終わる現代神話。

これは現実と幻想とが交わり、前へ向かう物語である。

この小説はTINAMI様にも同内容の投稿をさせて頂いており

ます。

Episode 01【幽霊学校】

／＊幽霊学校＊／

さて、まずは私の話をしようか。

私の名前は秋月小夜。私立南ヶ丘学園に通う今年で十七歳の女子高生だ。つまり、経済ヒエラルキーの最下層に位置しています学生な訳です。特にバイトとかをするのでもなく、学校に通いながら一人暮らしを満喫している今日この頃でございます。一人暮らしの女子高生って、なにかエロティックな響きがありますよね。本人がこんなこと言うのもなんですが。

さて、これから語るのは新学期が始まってから直ぐのお話。私の通う学校にある『咲かない桜』にまつわるお話。いや、てゆーか私の今後の生活方針を決めてしまった事件についての話だ。

そう、屋上の『咲かない桜』で、真っ赤に染まった花びらに包まれた世界で私はあの人と出会った。自称吸血鬼の蒼い瞳の男性――

――浅見屋双司と。

ヒラリ、ヒラリと周囲を包む桜の花びら。その姿は既に幻想。その花弁は一枚一枚が人々を虜にする。

だが、その桜は血色の桜。それは一人の女の怨念の塊。この怪奇を目にした人間は、彼女の悲しみに満ちた悲鳴を聞かされながら桜の木に取り込まれてしまう――。

「――ってな話し知ってる？」

と、いきなりこんな話をしてきたコイツは『秋山香織』。我らが南ヶ丘学園の問題児と言われる人間の一人で、自称『華麗なるミステリー女』。つまり変人その一。ちなみに他称は『紙一重のアホの相方』である。その相方は決して私ではないことをここで言っておこう。アイツとセットに扱われるのだけは勘弁してください。

そのくせ、コイツは頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群ということだから世の中間違っていると思います。胸の大きさとか、貴様は本当に国産か。それ、絶対Fはあるでしょう？

そんな彼女だが、まあ性格があまりにアレなのでどうにもモデなかつたり。だって、基本私以外にはとんでもなくセメントだし。特に、男にはこっちがゾツとするくらい容赦ないし。

しかし香織さん、アナタは今の状況はかってますか？現在、四月十五日の午後十二時三十分。はい、四時間目の授業の真っ最中です。授業は古文です。アーユアンダスタン？

「あれ、小夜ちゃん聞いている？面白いと思わないこの怪談。普通桜っていえば、怨念うんむんの前に無意識で生気吸い取られちゃうものなのね」

「……香織、今授業中です。お願いですからこれ以上私の内申点を下げないで下さい」

「えっ？ 小夜ちゃん内申点悪かったの！？ なんで？ サボる時、事前宣言するくらいだから結構いいと思ってたのに……」

ええ、どつかのアホがこうやって授業中平然と喋りかけてくるせいで。ほら香織、あなたの後ろで古文担当様がお怒りですよ？ いつものことだけど。

私は思わず頭を抱えなくなる。本当にコイツは学習して欲しい。

「やつほー、昨日遅くまでラジオ聞いてたら寝過ごしちゃいましたー……」

そんなやりとりをしていると、ガラツと突然教室の扉が音を立てて開かれる。ああ、今日はいないなと思っていたもう一人の問題児が来ちゃいましたか……。

声を上げながら扉をくぐってきたのは、長い金髪を後ろでポニテールにして纏めた少女。全体的にスラッとしていて出るとこは出て引つ込むところはほっ込んでいる外国人よりのモデル体型、赤いデザインフレームのメガネ越しに見える力強いスカイブルーの瞳、そして十人が十人声をそろえていいそうな綺麗な人形のような顔立ち。

彼女こそ問題児の一人であり秋山香織とセットに数えられる存在。他称『紙一重のアホ』と呼ばれる『ネオン・夏木』サマーウィンド』である。ネオンいわく、日本人とアメリカ人とのハーフ。でも、英語は苦手というアンバランスな少女だ。見た目だけならお姫様。そんな彼女が問題児として呼称されている理由、それは新学期が始まったばかりのことだった――！！



「はい、今年このクラスの担任をすることになった加藤です。新学期、新学年ということで、今日のホームルームは皆さんに自己紹介をして頂きます」

新学年ならではの恒例行事みたいなものである自己紹介。どこの学校でもありそうなこのお約束な行事、私はとりあえず周りの自己紹介が終わる度に拍手だけして休みボケで気だるい気分を誤魔化していた。ん、私の番ですか。

「えー、秋月小夜です。趣味は特にありませんが、しいて言うなら食べ歩きです。和菓子なんか結構好きなので、私に買ってきてくれたら友好度プラス1です。よろしくお願いします」

あれ？なんか拍手が遠慮がちなのは何故でしょうか。私になにか変なこと言いましたっけ？小首を傾げて考えてみるが、問題点は思い当たらない。うーん、なんででしょう？

そんなことを考えていると、私の後ろの席の人が自己紹介を終えて戻ってくる。あ、考え事してたせいで聞いてなかったです……。

「あなた……」

「はい？」

急に声を掛けられ、若干ドキつとする。声のした方を見てみるとたった今席に戻ろうとしていた人が目の前に立っている。淡い桜色のロングジヘアーに明らかに美少女的な顔立ちの女の子。あー、スタイルいいなあ。特に胸。

「——いいわね」

「——はっ？」

「えっと、何がですか？」

「その性格よ。あきらかな本心むき出しで、平然と思った言葉を口に出来るその胆力。普通、その後の反応とか考慮して無難な所を攻めるのがベストじゃないかしら？」

「私的には、結構無難な所を攻めたつもりなんですけどね。何かへんな所ありました？」

私は眼前の少女へ問いかける。だって、私自身では可笑しいところなんて無いですもん。

「つまり完全に素って訳ね。うん、まさに絶滅危惧種だわ。例えるなら、今時食パン啜えて遅刻するとか叫びながら朝の通学路を爆走する女子高生並みに貴重だわ」

や、どんだけですか私。てゆうか。

「むしろ、初対面の人間にそこまで言える貴女が凄いですけど。いや、それより食パン啜えて遅刻するとか叫びながら朝の通学路を爆走する女子高生並んで私どんだけですか!？」

「そうね、人間の染色体に毛が一本生えた位かな？」

「既に人間ですらないじゃないですか!？ 出来れば人類に留まらせてくださいよ!！」

「——ヤバいわね、ここまで綺麗に返答してきたのは貴女が初めてよ。ちよつと惚れちゃいそう。それに、よい目をしてる。周りの人とは大違いね」

「や、私ノーマルですから。百合は勘弁です。あと、なんですかい目って」

ところで、さっきから周りの視線が痛いんですけど。次の自己紹介の人、どうすればいいか分からず固まってるんですけど。

「ねえ、貴女名前は？」

自己紹介聞いてたんじゃなかったのかコイツ。まあ、私も人のこと言えませんが。

「小夜です。秋月小夜」

とりあえず机に頬杖つきながら答える。いきなり人のこと面白いとか言って笑いだすヤツにとる礼儀なんて私は持ち合わせていません。

「小夜ちゃんね、私は秋山香織。これからヨロシクね」

これが私と香織の慣れ始め。何故か私だけには柔らかい口調の香織が未だによくわからない。や、まだ十日くらいしか付き合いは無いが。

さておき、そうこうしている内に自己紹介も後半部分くらいまで進んでいったのだが、ここでアイツが現れたのだ。

「はい、私はネオン・夏木〓サマーウインドです。ネオンが名前で、夏木〓サマーウインドが名字よ。見た目で分かると思うけど、私は米国人とのハーフだからよろしくねー。あ、そうそうさっき何か揉めてた二人は既に私お友達になる気まんまんだから、そのところもよろしくー」

なんか宣言されましたけどー！？

私は思わず後ろに座っているであろう秋山香織さんの方へ振り替える。だが、彼女も私と同じような困惑気味の表情をしているだけ

だ。いや、プラスアルファでめんどくさそうにしている感じはするが。

「ふっふっふ、さっきの会話聞いててなんか、大和魂にピンときたのよねえアタシ。アナタたちなら、私と一緒にS U R 27背負っていつてくれるって!!」

なにが楽しくてヨーロッパの戦闘機背負わにやなんのだ。あと、アンタアメリカ人とのハーフじゃなかったのか。

「巨乳美人に、なんか小動物っぽいのに妙にハッキリとしている少女!!こんな二人と友人にならずして、何が日本人か!？」

「や、だからアナタ半分しか日本人じゃないでしょうに」

思わず声に出してツッコミ入れてしまったが、仕方ないと思う。そう、脊髄反射的に。そして貴様も十分巨乳だろうが。しかも金髪。

「その冷めたようなツッコミがGood!!もうアタシと学校生活を楽しめるしかないわ!!ってあぁっ!後ろの巨乳ちゃんも他人のふり決め込もうとしないで——!?!」

といったように、私は香織とネオンの二人に知り合った。ちなみにこの後の光景はこんな感じ。

「ねえ、小夜ちゃんこの記事どう思う？ ホントかな？」

「秋山さん、先生がなにか話してるのに平然と話しかけてくるのはどうかと思います。あと、その『ウー』とかいう怪しげな雑誌はなんですか」

「コレ？ 見ての通りオカルト雑誌だよ。この河童のミイラとか明らかに注意書きでサル腕ですってネタバレしているのがウリな。あと、私のことは香織でいいよ」

普通に現在授業中ですよ？ ホラ、先生だってどうしていいか困ってるじゃないですか。

「カオりんお目が高いね！！ それ、アタシも読んでる！！ もちろん定期購読ね」

そして夏木「サマーウインド、アンタは席立ってまでこっちに意見しに来るんじゃない。」

「ふふふ、夏木「サマーウインド。私はアナタにそんな名前はおろかそんな愛称で呼んでいいなんて許可した覚えはないけど？」

「いいじゃん、カオりんで。アタシのことネオンでいいからさー。あ、小夜にゃん？ 頭抱えてどうしたの？」

「いや、なんというか……。初日からフリーダムすぎませんかアナタ達」

そこ、二人そろってキョトンと小首を傾げるな。両方容姿は半端なくいいんだから。女の私から見ても、ちよっとドキツとしましたよ。あと、小夜にゃんってなにさ。

「秋月小夜だから小夜にゃんだよー。あ、この『ウー』先月のだね。カオりん今月のはもう読んだ？」

「もうカオりんでもいいわよ……。今月号はまだ読んでないのよねえ、私定期購読してる訳じゃないし。一人暮らしだから、あんまり懐に余裕無いのよ今月は」

じゃあ、今月の貸してあげる。と、微妙な談笑をするお二方。だから……。

「今授業中だつて、言ってるでしょうが——！！」

■ ■ ■

と、このような具合である。ちなみに、現在もこの二人はフリーダムさを失わず、新学年開始三日目にして教師達のブラックリスト登録決定したのは余談だ。私まで巻き添いくらって、ブラックリスト

に登録されているらしいけど。……悲しくなんてないですよ？多分。そんなこんなで、平然と遅刻してきたネオンは古文担当からのお説教中。あの顔絶対まともに聞いてないですね。

「あ、カオリん、それ今月号の『ウー』の桜の怪談？ それ本当にあるのかな！？」

訂正、まともではなく微塵も聞いてなかったようですね。

「なに？ネオンはこの話信じるほう？私としては、あまりに的外れな怪談だから、小夜ちゃんの意見を求めてただけだよ」

「的外れかなあ？ 桜の怪談としてはポピュラーだと思うんだけどなー」

「どちらが親で子かって話よ。怪談が先なのか、それとも桜が人の血を吸うっていう現実が先なのかのね。だって、これは真っ赤に見えた桜が原因で作られた怪談なのか、血を吸う性質がある桜に後付けされた怪談なのかはつきりしないじゃない」

「あー、妄想が先か現実が先かって話ね。そういえば、この学校にも桜の怪談話があるって知ってる？ 屋上の『咲かない桜』あるでしょう。なんかアレって、数十年に一回真っ赤な血色の花びらを咲かせるらしいよ？ 勿論怪談話にありがちな、見たら死ぬって噂付き。アレはどっちが先なんだろうなー」

この二人は何の話をしているのでしょうか？てゆーかそんな話題だったんですかさっきの問いかけて。あとネオン、先生なんか泣き出しそうですよ？

いつの間にかこちらに移動してきたネオンを眺めながら私は心の中で呟く。すると、キンコーンカーンコーンと、授業の終了を告げる合図。……先生、ご愁傷様です。

私は窓の外——校庭で咲き誇る桜の木を眺めながら、改めて心で呟くのだった。

さて、俺の話をしようか。名前は浅見屋双司^{あさみや そうじ}、探偵なんてヤクザな職業を営んでいる。

まあ、このご時世探偵なんて職業で日々の食いぶちを稼ぐなんてことは出来ず、普段は本の翻訳なんかをやって生活中である。……売れない探偵なんて言うな。

此処はとある商店街を露地裏へ曲がったところにある俺の自宅兼仕事場、浅見屋探偵事務所の一室。俺は書斎と呼んでいる書物の貯蔵室だ。八角形を組むように壁沿いに並べた本棚。部屋の中には、小さなスタンドランプを置いた正方形の机。おそらく、上から見下ろすと、中心の机を囲むように本棚は正八角形を描いているだろう。俺は此処で、とある学園のパンフレットを手にとっていた。

「……私立南ヶ丘学園。創立年月日は昭和34年の4月か」

何故こんなものを見ているのかといえば、この学校が今回引き受けた依頼に関係しているからである。

なんでも、学校の屋上にある桜の木に昔から奇妙な噂があるらしい。数十年に一度、人を呪い殺すとか何とか。噂くらいで依頼してくるなど言いたいが、直接の依頼人はその学園の理事長本人。さらに付け加えると、実際噂の類ではなく実際に学園の人間が数十年に一度命を落としているとか。そして、そろそろ前回死者がでたら数十年の周期が経つので念のために調べて欲しいと今回依頼があったのだ。

——まあ、今の世の中、学校で死人が出たらマスコミが煩いだろうしな。

世知辛い世の中になったものだ。

しかし、桜が人を呪い殺す……ね。いまいち釈然としないが、桜という植物は古来より、人の生気を吸い取るという伝承がある。桜が血を吸うのは有名だろう。桜の花びらがあんな色なのは、人間の血を吸っているからだと伝える地域もあるほどに。

まあ、学園の桜の噂がもし本当のことだったとしたら——
——。

「死人の怨念でも宿っているか、桜自体が何か変質を起こしているかのどちらかだろうな。だが、どちらにせよ直接調べてみないことには分からないか」

読んでいたパンフレットを机の上に放り投げ、胸元のポケットの中からタバコを取り出し火を点ける。そして、ふーっと紫煙を吐き出しながら、俺は『これを吸い終わったら学園に行ってみるか』と一人思考する。紫煙がゆっくりと立ち昇っていく様を眺めながら、

今後の予定を組みはじめた。

食事後の睡魔と戦う五限目を乗り切り、あーようやく終わったと椅子の上で背伸びをしていた放課後。はい、あの二人が騒ぎだしました。

「と、いうわけで屋上の『咲かない桜』の話、本当か確かめてみない？」

「どういう訳ですかネオン。あと、お願いですからその頭に刺した蠟燭を何とかして下さい。その容姿でそのい出立ちはアンバランスすぎます」

「たしかに、外国人じみたネオンの容姿に蠟燭は似合わないわね。貴方の容姿なら蠟燭より、まだ十字架刺してるほうが似合ってるわ」

香織、別にそういう意味で言った訳じゃありません。

「屋上の『咲かない桜』の怪談、アレの死人が出るって話の周期が計算してみたら明日なんだよね。これは確かめてみるべきだと思わない小夜にゃん？」

「思いません。普通そういうのは危うきに近寄るべからずでしょう。香織だってそうでしょ？」

と、ごくごく普通の一般論を述べながら私は隣の香織へ問いかける。てゆーか計算したってネオン。貴女その活力をもっと別の方に向けなさい。

「えっ、別に大丈夫だと思うよ小夜ちゃん。だって、本当に死人が出るならいつまでも桜の木自体をほっとく筈無いし」

左手の人差し指を顎にあてながら、うーんと答える香織。

ああ、そうだった。どっちかっていうと香織の思考はネオン寄りなのを忘れていましたよ。そういったオカルトスポットに行くのはあまり積極的じゃない香織がこんな返答をしてくれば、ネオンが同参加者を得たも同然である。

「んじゃけってーい」 ふふふっ、夜の学校に潜入作戦……燃えるわね」

「って夜やるんですか！？ しかも学校に忍び込むって……」

思わずネオンの言葉に叫び返す。夜の学校に不法侵入って、下手すれば停学物じゃないですか。

そんな困惑した表情をしていると、香織が私の肩に手を置き口を開く。

「大丈夫だよ小夜ちゃん。私もいるから見つかるなんてヘマはしない。いざとなったら、ネオンを犠牲にしても小夜ちゃんだけは助けてあげるから」

「あ、カオりんひどい！！ その小夜にゃんに回してる優しさを私にも——！！」

「ネオン、貴女に回す優しさがあるなら私は残らず小夜ちゃんにあげるわ。だから————貴女は何かあっても自分でなんとかしなさい」

忍び込むのには賛成なんですネ香織。

ああ、どうして二人ともまっとうな一般的な思考回路してないんですか——！！？

私はそんな会話をする二人を観察しながら頭を抱える。とりあえず、誰かに見つからないように頑張ろう……。

「んじゃ、今日のところは解散ってことで。私はこれから屋上の下見してくるけど、小夜にゃんとカオりんはどうする？」

そんな私の内心を知らないネオンは、何故かその場でクルクル回転しながら言う。ホント、普通にしていればこの子もかなりの美人なのになあ。

「私はネオンが何かミスした時の逃走ルートを調べてくるわ。安心してね小夜ちゃん。貴女を逃がすための準備は怠らないから」

「いや、そう思うならまず忍び込むところから修正しましょう香織。私はもう帰りますね。明日のお弁当の買い出しもしないといけませんか」

今までの会話の内容を忘れるように、自宅の冷蔵庫の中身を思い浮かべる。たしか朝食食べる予定のハムと牛乳しか入ってなかった気が。うん、今日の買い出しはいつもより少し多めに買っていこう。

今日は近所のスーパーがタイムセールしてた筈ですし。

私は鞆を手に取り二人に別れを告げると、一階の昇降口へ向かって歩き出す。昇降口に着いたら靴を履き替え校門へ。

「——春ですねえ」

校門までの桜並木を見上げながら、思わず私は言葉を漏らす。一面に広がるピンク色の桜の花びら達。それらは空気が動くたびに、ダンスのステップを踏んでいるかの様な動きを見せる。

ヒラリ、ヒラリ、ヒラリ。

香織が、桜とは昔から無意識の内に生気を吸い取られるものだと言っていたが、この光景を見ていると不思議なことに納得してしまう——そんな光景だった。

「って、いつまでも見とれている場合じゃないですね」

時間は有限なのだ。それに早く行かないと、スーパーのタイムセールが終わってしまう。

そう思い、いつの間にか止まっていた歩みを再び進める。いや、進めようとしたら私の桜で埋まっていた視界に見慣れないものが映った。そう、スーツを身にまとった人影のようなものが。

「——？」

ふと、そちらに視線を向ける。

舞い散る桜の花びらを背景にこちらへ歩く、一人のスーツ姿の男性の姿。背丈は百八十センチくらいだろうか。全体的に細身なのに、芯がしっかりしている様な体格。顔立ちは結構整っていて、少し長めの黒髪をオールバックにして固めている。だが、私が一番最初に印象に残ったのはその瞳。遠目から分かるくらいの光沢と美しさを

持った、透き通る様なマリンプールの瞳。ネオンのそれとは違い、彼のモノは透き通るような青色をしている。まず、日本人にはありえない瞳の色だ。だが、その色合いはカラーコンタクトのような人工物では決して出すことのできない深みを携えている。

———綺麗な色。

まるで、その一部だけが宝石で出来ているかのような輝きだ。つて、あんまりジロジロ見ているのは失礼ですね。

そうこうしている間に、男性は私の横を通り過ぎて校舎の中へと入って行く。すれ違いざまに一瞬、私の方へ視線を向けたのは気のせいだろう。

「———あ、時間!？」

やばい、うかうかしているとタイムセールに間に合わない。

仕方ないので私はその場から校門へ向けて走り出す。走りながら

私は、もう一度あの綺麗な瞳を見たいな——と考えていた。

俺は南ヶ丘学園の校舎を歩く。既に理事長の許可は取ってあるの
で、一応の部外者である自分がうるついても何の問題もない。
まあ、まだ校舎に残っている学生達に疑惑の目線で見られているが。

「……ざっと見る限り、今のところ校舎自体には何の問題はないよ
うだな」

現在、現地調査中である。念入りに調査してくれとの依頼だったし、調査料金もそれなりにはずんでもらってるので、わざわざ一所づつ校舎を見て回っているが――。

――これはシロの可能性が高いな。

実際、呪いの類で死人が出ているのなら、その桜に隣接する校舎本体にも何かしらの残り香が残るものだ。だが、今のところはそのようなものは感じ取れない。現在校舎の四階、残りは上の階と『咲かない桜』とやらが植えてある屋上のみだ。

「さて、何も異常がなかった場合はどうやって説明するかな……」

異常があろうが無かろうが、一応数十年に一度の日――桜の開花日には張り込んでみるつもりだが、何も無いのも説明に困るのだ。依頼人さんは中々納得してくれないのである。よし、五階も異常なし。後は屋上だな。

俺は軽く周囲を見渡しながら、屋上へ続く階段を上る。やはりここまでくると、辺りに生徒の姿はない。それも当然、屋上は現在はいち入り禁止になっていて、屋上へ出入りする扉にも鍵がかかっているらしいので来ても意味がない。屋上へ上がる人間もいないので完全に放置状態になっていると理事長は言っていた。俺は鍵借りてきたがね。

そうして、階段を登り切り屋上へドアノブへ手を掛け鍵を差し込もうとするが――。

「なんだ、鍵開いてるじゃないか」

借りた鍵の役目はなかったようだ。不用心な。
俺はそのままノブを回し、扉を掛け放つ。

——中々いい場所じゃないか。

一面赤いレンガで敷き詰められ、中世の庭園でも見ているかのような光景。屋上の周囲はフェンスで囲ってあるが、周囲にはベンチもあり、今の季節だと昼寝なんかしたら気持ちよさそうだ。ちょうど屋上の中心部分に、大きめの枯れ木が鎮座しているが、アレが恐らく『咲かない桜』だろう。その枯れ木の周囲だけは土がむき出しの状態を確認できる。

だがな理事長。俺は一つ言いたい。

「……人はいないんじゃないのか？」

枯れ木の根元の部分、そこに人影が見える。制服からして女だろうが、なんか金髪のポニーテールの物体が土をほじくり返している。ああ、これ声を掛けておいたほうがいいんだろうなあ。

「とりあえずだ、その金髪ポニーの娘っ子。ここは立ち入り禁止じゃないのか？」

そう俺が声を掛けると、今まで後ろ姿だけを見せていた人影は立ち上がりこちらを振り返る。ほう、ハーフかこの子？

「えーっと、たしかそうだった気もするけどお兄さんはどうなのかな————って目え青っ!？」

「俺はちゃんと理事長の許可を貰ってるから問題ない。だが、初対面でその反応はどうかと思うぞ。あと目なら金髪ポニーにメガネと美少女が追加された娘っ子である君も青い」

「あ、それもそうか。っていやいや、お兄さんのソレとアタシのこれは違うって。お兄さんの宝石みたいに綺麗な色ですもん!!」

まあ、一応それなりの魔眼でもあるしな俺の目って。それでも最高位の存在の証だぞコレ。
ではなく。

「君は此处で何をしてるんだ？ さっきも言ったが、ここは立ち入り禁止になっていると聞いているが？」

「うーん、下調べかな？ お兄さんこの桜の木の怪談話って知ってます？」

「一応小耳には挟んだことはあるな。桜の花びらを見たら死ぬとかそういうのだろう？」

「それで間違いなけどよく知ってるなー、この学校の人には見えないのに。まあ、その桜が咲く周期って言うのが明日みたいだから、噂が本当か調べてたって訳」

後で理事長に聞こうと思ってた桜の開花の周期をここで知ってしまった。いや、それより明日って急すぎやしないだろうか。そして娘っ子、何故話しながらクルクル回る。

「まあ、つまりは興味本位か。どうでもいいが俺はともかく、学園の人間に見つかったら不味いんじゃないのか？ 理事長には俺が屋

上に行くと言ってあるしな、誰か上がってくるかもしれないぞ?」

そういうと少女は「それはマズいなー」と、回転するのを止めて俺の方へ向き直る。そして、おそらく始めから地面に転がしてあったであろう鞆を手に取り。

「では、アタシはここでサヨナラです!! くれぐれもアタシのこととは内密にお願いしますねー!!」

そう言いながら俺が入ってきた扉へ走り去っていった。どうでもいいが、屋上の鍵が開いてたのは彼女の仕業だったのだろうか? その後、屋上も色々調べてみたが特に異常がなかったのをおこつ。念のために、桜の開花日を理事長に確かめてから帰るとするか。

翌日、末端の不安を抱えつついつも通りに登校した私だが、朝、教室に入ると視界に奇妙な光景が映った。てゆーかネオン、なんですかその格好。

「なにつて、今日の夜に備えての服だけど?」

灰色の迷彩服を不思議なほどに着こなしたネオンが答える。これ

で背景がジャングルなら突っ込まなくてすむのになー。だが残念、ここは教室である。

「あー、まだ朝のホームルームもまだなのに気が早すぎです!! それより、まさか今日一日その格好で授業受ける気ですか!？」

「えっ、そんな訳ないじゃん。小夜にゃんボケた？」

呆れ顔で言うな馬鹿ネオン。あれか？ 私が悪いのだろうかこれ。

「ボケてるのは貴女の頭じゃないかしらネオン？ 小夜ちゃんはどう言いたいよ。——どうせなら私も着たかった——って」

「いやいや、それはありえませんかね!! てゆーか香織、あなた何処から湧いて出ましたか!? そしてなんか香織まで迷彩服着てる——!？」

ふと、いつのまにやら隣に香織の姿がある。しかも、何故かネオンとお揃いの灰色迷彩服姿で。ああ、香織はもうちょっと常識あると思ってたのに……。

「うん、カオりん似合ってるね!! そして小夜にゃんは心配しなくても大丈夫!! ちゃんと小夜にゃんの分も用意してるよー」

いらないから。いりませんから。

「貴女にしては中々のチョイスよネオン。そして小夜ちゃんも着てみてよ」結構楽しいよ?」

「香織、私には何が楽しいのかわかりません。そしてもしかしてそ

の服、結構気に入ってるんですか？」

とりあえず私は、目の前で自分の着た迷彩服の裾を握りながら見ている香織に言葉を掛ける。だって、すごい笑顔なんだもんこの子。私が男だったら、一目ぼれしそうなくらい眩しい笑顔なんだもん。

「——もちろん、私昔からこういうの好きなんだー。あ、でも和服は着飽きてるからいいけど」

服が好きってことなのか、そういう脱線気味の格好が好きだっていうことなのかを詳しく聞きたい私である。そして和服は着飽きてるって、お前はどこぞのお嬢様か。

「ああ、小夜ちゃん。私の実家って古い神社だから和服とか小さい時に着飽きてるの。普段着がほとんど着物だったし」

あんまり実家のことは思い出したくないんだけど、と香織は言葉を続ける。ん？実家が神社ってことは……。

「香織って、巫女さん？」

「うん、一応ね。私としてはご免こうむりたいんだけど」

「カオリン、巨乳でツンデレ入った巫女さんなんて、どんだけ私を嬉しくさせる属性を持ってるのさ。是非、カオリンの巫女姿を——

「——！！」

ネオン、笑顔でコメントするのはいいけど、とりあえずその鼻血を拭きなさい。ビジュアル的に綺麗な顔がまるつきり変態だから。

気持ちわかりますけどね。

「嫌よ。百万歩譲っても小夜ちゃんくらいにしか見せないわ。もうこの話は終わりよ。早く着替えないとホームルーム始まっちゃうじゃない」

珍しく香織が一般的に会話を打ち切り、着替えの制服が入っているだろうカバンを持って教室から出ていく。そんなに実家が嫌いなのかなあとか思いながらその姿を見送る私
まあ、母親限定で実家が嫌いな自分も人のこと言えませんがね。

「そしてネオン、あなたも早く着替えてきなさい」

そんなことを考えながら、目の前で自分の出した血液を始末する少女に声を掛けるのだった。

「昨日の今日では準備もまともに出来なかったんだがな。どうしたものか」

俺は独り、事務所のソファーに寝転がり紫煙を吹かしながら呟く。
現在日時は四月十六日の午後四時十三分。いまごろ、南ヶ丘学園では一日の授業を終えた学生達が下校中だろう。

今日は桜の開花日予定の当日。正直何も準備など出来ていないが、まあどうせデマの怪談だろうから心配は無用か。念のために、厄払いの札くらいは持っていくつもりだがね。

学園に見張りに行くまで、まだ後四時間程の余裕がある。ふと、窓の外へ目線を向けると、風に乗って来たのか、どこかの桜の花びらがフワリと宙を舞っている。ただ、宙を舞うだけのソレは、何故か人々に幻想を幻視させるだけの魅力を持っているものだ。そこにあるだけで、まるで魅了の魔術を掛けられた様に見惚れてしまう。

「まあ、植物——特に桜は自然と人間の幻想力なんかを溜め込みやすかったりするから……。案外、自然の魔術と解釈しても可笑しくはないか」

魔術とは、本来は宗教などと同じ信仰により発生する現象だ。それを考えると、日本の春には桜という季節的概念が、一つの儀式魔術となっていて意外ではない。柳の下の幽霊と同じように、桜もまた怪談が付きものな植物なのだから。

「——やれやれ、こういったことを考えるのは魔術師達の領分なんだが。どうも最近人の世に帰化しすぎているな」

あらゆる現象を現実、幻想として捉え、己の身体をもってそれを再現する人間を表す名称、それが魔術師だ。森羅万象の命として解釈される魔力という物質を元に、エンジンの役割をする術式を通し、己で編んだ現象を再現する存在。

今となつてはその数は昔の半数以上に現象してしまったが、それでも裏で表の社会に多大な影響を及ぼしている人間達。所詮は物語の中のものだと一般世間に認識させ、実在する自分達の存在を完全に隠してしまうシステム。それらを構築した現代の魔術師達は、正直俺から見ても感嘆せざるえない。

「霊長たる人間が人間を支配する時代……か」

いかな、本当に最近では思考が年寄り臭くなっている。だが、古の時代から世の中を見ている身としては、こういった呟きも言いたくなるのだ。

俺は余計な思考をしていた頭を左右に振り、出来るだけ脳内をクリアにする。

さて、学園に行くまであと約三時間。その間に、今日の夕飯の下ごしらえでもしておくと思いますか。

時間とは、自分が思っているより流れるのが早いものだ。さつき朝のホームルームが始まったと思ったら、気がつけば既に今日の授業終了な放課後である。

「高校に入って思ったのが、人間っていうのは周囲の環境にとってもなく依存しやすいってこと。ほら、よく聞くじゃない？ 高校に入ってから、劇的に変化した友人がいる人の話。例えば非行に走ったり、例えば引きこもりになったり。あれって、周りの空気を支配している人に、その人の人格が引っ張られているからじゃないかと思うの。不登校になったりするのは、ただその空気に適応出来なかったから。つまり、動物の生態環境と同じってこと。小夜ちゃんも

そう思わない？」

「香織、私からしてみればその意見自体がナンセンスです。空気に適応うんぬんの前に、その人はただ自分を見失っただけでしょう。自分以外の世界の人間を見ていくにつれて、自分自身の在り方が分からなくなっていく。だから、私はそういったことになると思いますよ？」

「そうきたかー。うん、やっぱり小夜ちゃんは面白いなあ。独自の世界観というか、考え方というか。小夜ちゃんみたいに世の中考えられる人って、私今までみたことないよ？」

「それはただ香織が会ったことないだけだと思いますよ。だって、私って別にごく普通の何処にでもいる女子高生を自称してますし」

「それは小夜にゃんだけだと思うなー。だって、アタシやカオリんとかこういう風に会話が成立してる時点で、何処にでもいる女子高生じゃないでしょ」

つまり、ネオンと香織はマトモな女子高生じゃないってことは自覚はあるのか。うん、私は少し安心しましたよ？ 自覚しているだけ。

只今学校より下校中の道下がり。私は何故かネオン、香織の二人とこんな会話をしている。その理由というのが、今日の六限目の授業がただ不登校をテーマとした道德だっただけの理由だ。

「ネオン、会話くらい普通誰でも成立するでしょう？ でないとどうやってコミュニケーションとってるんですかあなた達」

「小夜ちゃん、意外とそうでもないんだよ？ 会話っていうのはお

互いの意思が成立して初めて成り立つものだから、会話をする人間にその気がないなら、それは会話とは呼べないの」

「お、まさしくその通り！！ カオりんはどうかは知らないけど、アタシの場合は昔っから『普通』っていう基準が解らないだよー。だって、『普通』って何から見てそうなのかって人それぞれじゃない？ だからアタシは面白おかしく高らかに物事を考えるの。自由な思考万歳だよー」

「つまり、普段の奇行全てがあなたにとって普通な訳ですかネオン。その結果、オカルト雑誌の定期購読なんかにつながらている辺りがなんとも言えませんが」

「面白いからいいじゃん。ねーカオりん？」

「確かに『ウー』は面白いわ。貴女の普段の奇行はわからないけど」

香織の場合は奇行っていうより、他人への興味が破滅的に薄いせいだと私は思う。だって、私とネオン以外で香織とまともに喋っている人を未だに見たこと無いですもん。

「カオりんって、興味があること以外はとことん無頓着だよー。ほら、一昨日のホームルームの時なんて、担任の話すら「興味ないからいい」の一言で無視してたし」

「——驚いた。小夜ちゃんとはかく、ネオンにそう言われるとは思ってなかったわ」

「ネオンって、意外と人間見てますよねえ。なんていうか、その人の本質を見抜いてるというか。馬鹿なのに」

「小夜にゃん、アタシを一体どんな目で見ているのさ。アタシは力
oirんみたいに他人に興味無い訳じゃないんだよ？」

ジト眼で見てくるネオンの視線を顔を反らすことでかわしつつ、
私は夕暮れに染まった空を見上げる。

昼間は澄み渡っていた青空も、今となっては夕日に照らされる茜
色。夕焼けって、なんとなく心がセンチメンタルな気分になります
よね？

「あ、此处でお別れね」

私は香織の言葉に、空を見上げていた視線を地上へと戻す。

いつの間にか、私達の自宅への経路を分ける交差点に差し掛かっ
ていた。私命名『いつもの別れ道』。学校からの道筋で正面に見て、
真っ直ぐ行くと私の自宅への道。右へ曲がると香織の自宅。そして、
左へ曲がるとネオンの自宅へと見事に分かれて続いている。

「やっぱり、話しながら帰っていると時間経つのがあつという間です
ね。と、言う訳で香織、ネオン、また明日会いましょう」

そう言つて、私はそそくさとその場から立ち去るのを試みる。素
っ気ないとは自分でも思うが、これにはちゃんとした理由があるの
だ。だが。

「ふっふっふ、小夜にゃん。逃げようつたってそうは問屋が卸さな
いよー」

ぐわっし、と言葉と共にネオンに後ろ肩を掴まれる。ああ、このま
ま何事もなく帰れると思ったのに。そしてネオン、アンタの外見で

そのセリフは似合いません。

「そうだね、小夜ちゃん。今日の夜の事まだ話し合っていないですよ？」

香織、なんでそんなウキウキした声で言っんですか。あなたもしかして、結構楽しみにしています？ 私には香織が興味を持つ基準が全くわかりません。

「今日の学園潜入作戦！！ 結構時間は夜の九時に正門集合でOK？ 時間的にも、それなりに夜の時間だから丁度いいとおもっけど」

「ええ、ネオン問題ないわ。若干怪奇の時間には早い様な気もするけど、多分大丈夫でしょ」

何が大丈夫なのか。そしてこの二人、一度思考回路が一致すると人の話を聞かないのなんのって。

「一応確認しておきたいんですけど……、拒否権ってあります？」

ダメもとで私はそんなことを口にする。言うだけならタダだからいいじゃない。

「小夜ちゃん……、来てくれないのっ!？」

「小夜にゃん……、一緒に行かないのっ!？」

「わかりました。わかりましたから、二人揃って涙目でこっちを見ないでください!! ああもう!! 私絶対悪くないのに、何か罪悪感が——!？」

女の武器は涙である。それは女性相手にも通用するものだと、私は本日悟ったのだった。

だって、胸の前に手を添えて、前かがみでウルウル見つめてくるんですよ？ しかも只でさえ容姿のいいこの二人が。私にはこの攻撃を回避するだけの精神力と技術は持ち合わせておりません。

私は、思わず改めて空を見上げ、ため息をつくのだった。あー、カラスが鳴いているー！。

とりあえず時間通りに待ち合わせ場所へとやってきた私だが、そこには既に私服に着替えたネオンと香織の二名が到着していた。香織は白い軽くフリルの着いたキャミソールにカーディガンをはおい、ピンク色のミニスカートという格好。ネオンは胸元に英語で何かプリントしてあるＴシャツに、デニム生地の子ミニスカートという服装。うん、二人の服装を見ていると、朝の迷彩服は一体なんだったのかと言いたくなる。

「校門閉まってるのに、どうやって忍び込むつもりですか二人とも？ 多分校舎も鍵閉まってると思いますけど」

午後九時三分南ヶ丘学園正門前にて、私は思った疑問を目の前の二人組に問いかける。ああ、なんで来ちゃったかな私。いつもならおせんべい齧りながらぐうたらテレビ見てる時間なのに。

「小夜ちゃん、門なんて乗り越えればいいものなんだよ?」

香織、少なくとも私に言わせれば門は乗り越えるものじゃなくて歩いて通るものです。

「校舎の鍵はアタシがもってるよ。事前に型とって複製していたのでした」

ジャラジャラと、何処から取り出したのか、輪っかのキーホルダーに束ねられた鍵束を取り出すネオン。それ、ぶつちぎりで犯罪じゃないですか?

そんな私の葛藤を無視するかの様に、ネオンと香織は校門を乗り越え始める。あー、二人ともスカートなんだからそんなに足上げちゃマズイですよ。本日の私の服装は、襟の部分に若干フリルの付いたブラウスと七分丈のジーパンという無難な格好なので問題ないですが。

「小夜ちゃん、早く小夜ちゃんも乗り越えてきなよー」

いつも間にやら、二人の姿は門の反対側へと移動している。……仕方ない、早く乗り越えるとしますか。そう、一瞬行動の早い二人の事を思いながらため息をつく、私は校門の鉄骨に足を掛ける。少し身体をジャンプ気味に浮かせながら、その反動を利用して一気に校門の向こう側へと身を投げ出し、着地。

「お、小夜にゃん、惚れ惚れするほどいい飛び越え方だったねー。普段の体育の時はいつも疲れた顔してるのに。実は以外に運動神経いい?」

「私、持久力が破滅的に無いんですよ。それ以外なら人並みには運動は得意です」

そんな会話をしている内に、いつの間にやら校舎の昇降口近くまでやってきていた。すると、ネオンは先ほどの鍵束を取り出し、カチヤリとガラス張りのドアを開ける。

「これ、普通に堂々として入ってますけど、忍び込むっていうより押し入りっぱいですね」

「うーん、なら、カチコミきたでえ！！　とか掛け声だしながら入った方がいいのかな？」

「ネオン、貴女警備員に見つかりたいのならどうぞ？　その時は私も小夜ちゃんも助けられないから」

「あ、それなら大丈夫。都合のいいことに、今日って学園もぬけの殻なんだよねー。職員室の警備担当表見た時に、何故か誰も担当がいなかったの。当直の先生もいないから安心していいよー」

むしろ、そんなこと調べてるあなたが安心出来ませんよネオン。それと、職員室で見たじゃなくて、盗み見たの間違いだと思う。

夜の校舎は、一言でいえば暗かった。いつもは昼間の明るい太陽の光が照らしている校舎内は、自分の足音が廊下の隅から反響しているのが分かるくらいに静寂を保っている。これなら、学校に怪談話が出来てしまうのも納得出来るものだ。

ネオンは、本当にどこから取り出したのか、掌サイズの懐中電灯を取り出しスイッチを入れると、私達を誘導するように声もなく歩き出す。その度、懐中電灯の光が窓ガラスに反射して、カメラのフ

ラッシュをたいした様な光景を私の視界に映し出す。

「ネオン、これ何処に向かってるんですか？」

校舎を上階へと登り始めるネオンに、私は問いかける。私って、怪談がどうかこうとかの話しか聞いてないから、何処で何をするのかとか全く分からないんですよ。

「うーんとね、屋上だよ小夜にゃん。『咲かない桜』があるのって、何故か屋上なんだよねー。昨日の昼間に下見で見て来たんだけど、本当に枯れ木が一本立ってるだけだったの」

「屋上に枯れ木って……、なんかこの学校のセンス疑いますね」

「でもそれ以外は凄かったよ？ 屋上の地面なんて全部レンガで敷き詰められて、ちゃんとベンチとかも備え付けられてたし」

それは何と言う費用の無駄遣いだろうか。屋上を出禁にする理由ってなんなんでしょうね。勿体無い勿体無い。

カッン、カッン、カッン。階段を登る度に響く不協和音の足音。自分の足音なんて、普段じゃきにしないようなところなのに、なんでもこっちはつきりと耳に届くと気になるのだろうか。人間の感覚って不思議です。

「小夜ちゃんどうしたの難しい顔して。アメ食べる？」

と、そんなことを考えていた私に、香織はポケットから少し小さなドロップ缶を取り出す。

「香織、なんですかそのドロップ？ 商品名が『きゃんでいどろっ

ぷる真夏の搾りたて焼肉汁抹茶風味　』って。完全に地雷でしょう？」

「そうかな？　私個人としては結構イケるよ？　口に入れた後の、フレッシュ且つエキサイティブなジューシーさがなんとも。キャッチフレーズは――脳にほとばしる劇汁」

「――劇汁ってなんですか！　なんか飴玉として色々間違っているような気がするのは私だけですかね！？」

とりあえず、美味しそうに口の中で飴玉を転がす香織はほおっておこう。私にゲテモノ趣味はないのだ。ところで、それは焼肉味の飴なのか抹茶味の飴なのかは、少しばかり知りたいところではあるが。

「二人とも、着いたよ――」

ネオンの声に、私は香織へ向けていた視線を反らし正面へと向ける。そこには、今まで登って来たような階段への通路は無く、目の前には鉄製の扉がある行き止まり。ああ、初めて来たけど、これが屋上の扉ですか。

「私も此処には初めて来たなあ。ネオン、ここの鍵もちゃんとあるんでしょうね？」

コロコロと、口の中で飴玉を転がしながら香織はシオンに問いかける。うん、香織はその口の中の飴玉をなんとかしましょうね？　何かさっきの商品タイトル見たせいか、こっちまでその未知の味が伝わってきそうですから。

「残念ながら力オりん、屋上の鍵は職員室に無かったから持ってないんだよねー」

ネオン、あなた今此処まで来た意味を全否定するようなこと言いませんでしたか？

「ちよっ！？ ネオン、それ意味ないじゃない！！ どうするのよ？」

「心配しなくても大丈夫なのだ。鍵が無いと扉は開かないって、誰が決めたのかな？」

そう言うのと、ネオンは自分の髪の中に手を伸ばし、そこから二本の細長いピンの様な物を取り出す。……アレって、ヘアピンですよ。どうしてだろう、何かロクな予感がしない。

「鍵っていうのはね、こうやって鍵の外枠を作る物と、奥の留め金を押す物があれば――」

――カチン、と何かが外れるような音。やっぱりですか。そうですか。言い子は真似しちやいけないピッキングですか。って。

「ネオン、あなた何でそんな無駄技術持つてるんですか！？ むしろこれって、完全にバレたら停学どころか退学物のような気が――」

――！？ まあ今更ですが」

というより、なんかもう突っ込むのも疲れてきました。はい。

きい、と扉が開かれた先には赤黒いレンガで敷き詰められた床板。校舎の中と違い、人間の出入りする場所特有の空気を感ぜさせない

空間。空には満天の星空がライトを彩り、屋上という此処を照らしている。そしてその中心には、何の木かは分らないが葉っぱ一枚付いていない枯れ木が鎮座していた。

「なんか、思っていた屋上と全然違いますね。何と言いますか、オシヤレ？」

うん、これが私の屋上の第一印象。ネオンの言った通り、中心の枯れ木以外は普通の学校の屋上のイメージとはかけ離れた場所だ。使わないのが勿体無い。

「ふーん、アレがネオンの言っていた枯れ木？ 完全に枯れてるじゃない」

「そうだよー。アレが此処で咲いたらカオリんの髪みたいに綺麗だと思わない？ あの木は根元の土壌調べてみたんだけど、全く問題なかったのに何故か咲かない桜ちゃんです」

「確かに香織の髪って桜色してるし綺麗ですよ。ふふふつ、スタイルだけじゃなくてそんなとこまで反則領域な香織が恨めしいです」

「さ、小夜ちゃん？ 何かわからないけど私が悪かったからソノ暗黒領域に目覚めそうな視線はやめてー！？」

「小夜にゃんの黒髪もアタシは好きだけどなー。髪金色なアタシにとっては」

黙れ金髪巨乳娘。黒髪貧乳の気持ちは、あなたには理解出来ないのだ。

そんなやり取りをしながら、私達は屋上へと足を踏み入れる。フワリと、頬を撫でる春のそよ風が気持ちいい。これがもう少し真つ当な理由で此処に来ていたら、まだ気持ちよかっただろう。むしろ昼間に来られなかったことが残念だ。

「うーん、桜咲いてないね。夜で時間的にも怪談真つ盛りな時間なのに」

「所詮デマだったってことでしょうネオン？ まあ、現代に怪談なんてものがあれば吸血鬼だって実在しますよ」

この二十一世紀の世の中、オカルトなんて実在する訳ない。もし、そんなのがあれば神様だっている筈だ。

「結局は後付けの噂だったって事ね。記念にあの木の力ケラでも削って持って帰る？」

香織は既に飽きたように、枯れ木へと歩み寄る。実際ホントに怪談なんてものに出くわしたら、私的にはトラウマものですね。

「って、アレ？ この枯れ木、何か凄く肌触りが硬いんだけど……。まるで鉄みたい」

「カオリん、その木ね、昨日私も削ってみようと思ったんだよ。でもカッターとか使ってみても、全く削れなかったんだよねー。むしろ逆にカッターの刃が折れちゃった」

……あー、なんかネオンの一言で雲行き怪しくなってきましたよ。何ですかカッターで削れない木って。物理的にそれって、木じゃないでしょう。

「なにそれ……実は超合金で出来てるとか？」

何処の超戦士メカですか。むしろそんな木は存在してはいけないと思います。

「カオりん、発想が古臭いのはアタシの気のせい？　せめて、もうちょっと現代的な物質でいこうよ」

「……ネオンに言われるとムカつくわね」

「ごめんなさい香織。私もネオンと同じこと思っていました。」

そんなやり取りをしている内に、現在午後十時五十八分。あんまり遅くなると、明日起きるの辛いだろうなあ。なので。

「香織、ネオン、そろそろ帰りませんか？　何も起きませんし、明日も学校ありますし」

刃物の通らない木っていうのも疑問が残るが、明日の事を考えると翌日に保留にしておいた方がいいだろう。

「ちえっ、残念だなー。何かあるかと若干期待していたアタシだったんだけど」

「普通何も無い方がいいわよネオン？　好奇心は猫を殺すってね」

香織、あなたがそのことわざ使っても全然説得力ですよ。うなだれるネオンの襟首を引きずりながら、私達は元来た扉を目指す。本当に何も無かったですね。ネオンじゃないけど、何か無駄

足踏んだ気分だ。

「小夜ちゃん、少し残念そう？」

「違いますよ。ただ、無駄足だったなーとか思っただけです。そしてネオン、さつさと復活して歩いてください」

さて、今の時間だと、帰るのは十二時前くらいになりそうだ。来る前に洗濯物片付けておいてよかったです。あー月が綺麗だ。

そんなことを考えながら、私は出口のドアノブへと手を掛ける。
瞬間。

「——っ！？」

空が、歪んだ。

現象が起こったのは一瞬だった。屋上に敷き詰められたレンガの隙間から桜色の光が漏れた。それは炎のように屋上を不規則に走り抜け、次第にあの枯れ木を中心として円形と思わしき形状をとる。また、円となった桜の炎はその円線上に合計五つ点のような塊を作りだし、そこから対角線上にある点から点へ向けて、さらに桜の炎が走る。そう、まるで香織たちがよく読んでいたオカルト雑誌にあ

るような星型を描く。ああ、まるでこれは御伽話に出てくる魔方陣というものにそっくりではないか。だが。

「——なんですか、コレ」

私の口から洩れるのはそんな呟き。ネオンの仕込み？ 香織のイタズラ？ 目の前で起こっている現象が、自分には理解出来ない。陣を描いた桜の炎は中心にある枯れ木に吸い込まれる様に集まる。そして——真っ赤な、血色の花びらが咲き誇った。

「……綺麗」

それは誰の言葉だったか。いや、誰でもいい。だって、私達は皆間違いない目の前の幻想的な光景に眼を目を奪われていたのだから。花びらの放流は止まない。ゆつくりと、それでいて宙を埋め尽くす様に舞うそれは、一時も立たない内に夜空をも埋め尽くす。

空を引き裂くように散る桜の花弁は、大気と擦れ合い、まるで金属が弾かれた時の様な不協和音を奏でる。それはまるで——

「女の人の……泣き声？」

空は鳴く。空は泣く。空は啼く。

音は何かを訴えるかの如く、周囲に木霊する。いわく。

それは一人の女の怨念の塊。この怪奇を目にした人間は、彼女の悲しみに満ちた悲鳴を聞かされながら桜の木に取り込まれてしまう——

「——っ！？ 小夜ちゃん！！」「小夜にゃん！？」

「えっ？」

と、二人の声が聞こえたと思ったら、ドンッと身体を襲うよくわからない浮遊感。視界には、こちらへ向かって腕を伸ばしている香織の姿。ああ私、香織に突き飛ばされたんですか……。

はつきりとは確認出来ないが、恐らくそうなのだろう。フワリ、と空飛ぶ私の頬を真っ赤な花びらが撫でつける。その一瞬。

「——あ」

グシャリ。何かトマトが潰れるような音が耳に届いた。眼に映るのは先ほどと変わらぬ『赤』。そしてその音は、先ほど香織が視界に映っていた辺りから響く。

「——香織!？」

声を上げると共に、ドスンと身体に衝撃が走る。痛い。肺の中の空気が、無理やり外に押し出される感覚。だが、そんなもの今はどうでもいい。私は痛む身体を引き起こして、香織達がいたであろう方向へ視線を向ける。

ドクン。心臓が脈を打つ。ドクン。頭の中が真っ白になる。ドクン。私という世界から感覚というものが無くなる。眼前には奇妙な形をした恐らく人型だったもの。地面を構築しているレンガに広がる、真っ赤な色彩。そして、金と淡い桜色の絹糸の様な髪が空を舞う。

「……香織？ ネオン？」

呟くも答える声は無い。聞こえてくるのは、先ほどから耳障りな悲鳴の様な音だけだ。

私は、この状況を作った原因である桜の木へ視線を向ける。木の幹は膨張し、根はレンガを突き破って空を目指し、伸びきった根は一本一本捻じめるように一つに集まり、何かの頭蓋と思わしき形をとる。深紅の花びらは幹に寄り添うように付着し、まるで爬虫類の鱗を思わせる鎧となる。

枝が左右上方にそれぞれ伸び、骨格のような物を造りあげる。

木の幹は膨張し、内側から枝のような物を吐き出す。

それは全部で四本の束となり、巨大な蹄を持つ極強の足となる。

木の根は土より持ち上がり、束となって鋭い、鋭利な尾となる。

紅き血色の花びらは出来上がった骨格へと降り注ぎ、鱗となり、竜頭となる。

そこにいたのは、紅き血色の竜だった。

「……そうですか。アナタがやったんですね？」

虚ろな思考で私は言葉を紡ぐ。頭の中が弾けそうだ。身体の細胞一つ一つが熱を持ち、目の前の化け物に殴りかかりたい衝動を与える。もちろん、それでどうにかなるなどと思っていない。私にはそんな力はないことも十重承知している。———だけだ。

「———私の友達に、何してくれるんですか!———!」

痛む身体に鞭を打って立ち上がり、叫ぶ。目の前の真っ赤な竜はそれに応えるかのように吠え、こちらに向かってそのアギトを開く。あ、私の人生此处までですか……。そう、思った瞬間。

「五月蠅い。もう少し静かにしてくれ、駄竜」

——誰のものとも知れない、第三者の声がその場に響いた。

「五月蠅い。もう少し静かにしてくれ、駄竜」

俺は目の前の赤い竜へ向けて言い放つ。

学校にやってきたのはいいが、何故か屋上から奇妙な魔力反応感じるわ明らかに人間の気配もあるわけで急いで屋上へ向かってみたらこの現状。確認できるのは手足が変な方向に折れ曲がっている少女が二人。その身体からは真っ赤な鮮血が流れている。そして、その傍に目の前の異形をにらみつけている黒髪の少女。とりあえず。

「今日の夜は学校への立ち入りは禁止にしてあった筈なんだけどな。そこの黒髪美少女、なんで此处に居る？」

「……えつと」

ふむ、言葉には反応出来るか。大した胆力だな。そう思いながら、地面に座り込む少女へ視線をやる。全く、本当になんているんだか。

「まあ、今はいいか。君はそこでおとなしくしていてくれ。さつさとこの状況をなんとかしないとイケないからね」

そう言つて、俺は視線を少女から異形の根源へ移し替える。しかしながら、またとんでもないものが出てきたものだ。

異形が襟首をこちらに向ける。その様はまるで、獲物を見つけた血色の竜だ。

「さて、駄竜——正確な名前が分からないから駄竜でいいな？ なに、心配はいらない。自分が消えた事も気がつかない程度に消滅させてやろう」

そう言葉を口にし、俺は血染めの竜へ向き直る。さあ、仕事を始めようか。

私は目の前の光景に唾然としている。表現的にあまりに乏しく、なんの捻りもないがそうとしか表現できないのだ。

ごうつ、と旋風が巻き起こる。振られる男性の拳、その度に大気は軋み、風は暴れる。風圧で敷き板であるレンガには無数の破砕痕が刻まれ、時には小規模のクレーターのようない凹みが出る。つて、これ本当に人間技ですか――！？ さっきの桜のお化け、あの巨体がダンボールみたいに軽々吹き飛んでますし。

「ははは、駄竜がゴミのようだ――！」

男性は笑いながら殴ってますし。ホントにあの人間？

龍頭の女性のようなシルエットが悲鳴を上げる。そりやそうだ。あんなに殴られたら誰だって泣きたくもなる。それを見た男性は殴っていた拳を止め、地に伏している血色の竜を見上げると。

「ふむ、おもったより手ごたえがないな。これならわざわざ霊符を用意する必要もなかったか。正直、拍子抜けだ」

ため息を吐くように、男性はそう呟く。

「どこその者としれぬ異形の存在よ。恨みは無いが、俺の仕事の為に消えてくれ」

瞬間、空気が変わった。何か、不思議な得体のしれない物に包まれる感覚。生ぬるい風に抱きしめられているような、そんな空気の質感。そして、最初の目に取れる変化は空だった。

「――月が」

空に浮かぶ月が、蒼海のような青に染まる。その光景はまるで幻想。通常では考えられないもの。まさに、宝石のようなものが夜空に浮かんでいる景色だ。

私は思わず、男性へと視線を戻す。彼は、先ほどと同じように怪物を見据えて悠然とそこに立っている。だが、その瞳だけは違った。燦然と輝き光を放つ青の瞳。暗がりなのでよく視認できるが、本当に、本当に美しいくらいに彼の眼球は光沢を放っている。

「とりあえず、隔離世へ逝ったら閻魔にでもよろしく言っておいてくれ。では、御機嫌ようだ」

彼は右手を振り上げる。そこに集うのは青き風。尾を引くように蒼海の光を纏う大気は彼の拳に集い、螺旋を描いて収縮する。ああ、それはまるで魔法のような、そんな現象だ。そして彼は、その拳を振りおろした。

異形の者が、光の様な魔力の粒子を散らしながら消滅していく。さて、今回の仕事は終了。まあ、少しばかり屋上は壊しすぎたような気がしないでもないが、後で理事長に連絡でも入れておこう。とりあえず、今すべきことは。

「——ひっ!？」

俺が少女の方へと歩み寄ると同時に、彼女はか細い悲鳴の様な声

を上げる。こつも露骨に怯えられると、我ながらショックだな。
そんなことを考えながら、俺は少女から少し横に視線をずらす。
そこには、彼女の友人であろう女の子二人の肉体。――
――うん、まだ辛うじて息はあるな。死んでいなければどうとでもなる。

「そつだな……。概念は逆行、固定範囲時間操作、後は記憶の置換くらいか？」

俺は右手を広げ、倒れた少女達へと向ける。黒髪の子が疑心の視線でこちらを見ているが無視だ。大気を撫でる様に腕を動かし、青の残光で円陣を作る。円陣から線を伸ばし、倒れた少女達を包むように広げる。そこから彼女達の情報を読み取り、掛けている肉体のパーツを補修、復元させる。そこから記憶のデータを逆行、改竄、修正をかける。

「よし、復元完了」

眼前には、傷一つない少女達。アフターケアとして、地面に広がった血の海も消しておいたから問題は無いだろう。残るのは――
――。

「――あ――」

この黒髪美少女をどうするか――――――だな。

私は目の前の光景に啞然としていた。だって、男性がさっきの化け物を倒してしまったかと思うと、こっちに来てネオン達の怪我を一瞬で直してしまったんですよ？ これで啞然とせずどうしろというのでしょうか？ そう、まさしくこの男性は得体のしれない人物だ。

ごくりと、喉がなる。緊張感のせいか、喉のおくがカラカラと乾いているような感覚。吐き出す息には嗚咽の様な束縛感が混じり、私の精神を犯していく。ああ、これが恐怖というものなのか。

「さて、君にはいくつか選択肢がある。一つ目は、ここで俺に記憶を消させること。俺個人としては後々面倒なので、こちらをお勧めしたい。まあ、気が付いたら少しばかり頭がパーになって、猫耳が生えている可能性があるが。二つ目は今日、此処で見た光景を誰にも喋らず、君の心の中で封印しておくこと。勿論、誰かに公言したりした場合は、それなりの処置をすることを。例えばいつの間にか自宅に、メイド服とキツネパーツのセットが送られているといったことだ。三つ目は、君の存在を無かった事にすること。簡単に言えば、この怪異の犠牲者になるってことだ。そうなると、恐らく三人ともこの屋上からノーロープバンジーだな。———さあ、どれがいい？」

いつの間にか此方を見据えていた男性は、私に向かって問いかける。や、てゆーか。

「真つ当なのが一つもないじゃないですか！？ むしろなんですかその色物選択肢っ！ 最後の以外は全部コスプレじみたことになっ

ているのは何故——！？」

「趣味だ」

「——言い切りやがりましたよこの人！？」

しかし、こんな状況でここまで喋れる自分が素晴らしい。

「それより、一体何なんですか貴方！！ さっきの怪物は！？ 香織達は大丈夫なんですか！？」

私は心の中の疑問を爆発させ、雪崩のように言葉を発する。

「そんなに一気に質問するな。俺は聖徳太子じゃないんだ。とりあえず、君が今一番知りたいであろう彼女達は無事だよ。肉体と精神の時間概念を逆行させたからね、傷一つ残っちゃいないさ」

「ほんと……ですか？」

「ああ、本当だ。不安なら、彼女達を見てみるといい」

そう言われ、私はネオン達の傍によってその肌に触れる。ジワリと、自分の掌に伝わる生温かい命の温もり。すう、すう、と耳に届く呼吸の音。ああ、生きている。二人ともちゃんと生きている。

私は思わず安堵の息を漏らす。理屈とかそんなのはどうでもいい、ただ二人が無事で本当に良かった。それだけで十分だ。

「無事は確認出来ただろう。さて、最初の質問に戻ろうか——
——どれがいい？」

「じゃあ、とりあえずコスプレ概念を捨てて下さい。むしろもう少しまともな案を出して下さい」

「中々に肝が据わっているな君は。普通、ここは怯えながら思案する場面だろう？」

「私って、友人に言わせればドライな性格らしいですから。まずは貴方が何者なのかはつきりしない限り、話は進みませんよ？」

まあ、男性が問答無用で何かしてきた場合は、間違いなく私にはどうすることもできないのだが。

「ほう、俺に交渉を持ちかけるつもりか？ 名も知らぬ黒髪美少女よ」

「交渉かどうかは貴方の受け取り方次第ですね。だって、私は只の非力な女子高生に過ぎませんから」

「只の女子高生は普通こんな会話をしないと思うがね。だが、面白い。そうだな、君の希望通り、俺が何者か応えてやろう。……そうだな、神は—— 廃業したし魔術師ではないな。ああ、これが一番近い」

男性は一旦言葉を途切り、一息吸うと。

「俺は、吸血鬼だよ」

はっ？

吸血鬼。実在するかどうかも定かではない、人の生

き血を吸う鬼の名称。有名どころで言えば、ルーマニアの串刺し公、ブラド・ツェペシュが妥当だろう。

日の光を浴びれば灰になり、ニンニクや十字架、さらには銀に弱いと伝えられている夜の眷属。それが吸血鬼。

そして、目の前の男性はまさに自分がそうであると言っているのだ。だが。

「——それって、おかしくないですか？ 私、確か貴方みたいな人を昼間に見たことある気がするんですけど……」

ついこの間の下校途中の話である。

「ふむ、まあ伝承では色々言われているが、實際力の強い吸血種は平然と昼間に出歩いているぞ？ ニンニクや十字架に弱いなんてものも迷信だ。ただ、銀に限っては魔除けの概念があるから一概にも言えないがね」

わりと人間の偏見が多いんだよ、伝承っていうのは。と、自称吸血鬼な男性は皮肉げな笑みを浮かべながら言う。

「さて、俺の正体は分かったな？ じゃあ、改めて質問に答えてもらおうか。でないと、強制的に記憶を飛ばすことになる」

「それは困ります。私って結構現実主義なんで、自分がちゃんと記憶した映像を消されるのなんて勘弁なんですよ。どんなことでも、覚えていた方がいいに決まってますしね」

「ほう、ではどうする？ 残る選択肢は誰にも公言せずに心の中に留めておくか、屋上からノーロープバンジーだぞ？」

恐らく、前者はお互いにある程度の信頼関係がなければ成り立たない取引。後者の場合はこの世とおさらばだ。もちろん、それは勘弁願いたい。そして彼は自称吸血鬼。伝承ではその類の存在は、約束ごとに関しては絶対的な強制力があると前に香織に聞いたことがある。ならば――。

「それなら、契約しましょう。自称吸血鬼のお兄さん？」

私は、口元に余裕ともしれない笑みを浮かべながら、そう言葉を口にした。

「それなら、契約しましょう。自称吸血鬼のお兄さん？」

この少女は今何と言ったか。契約？

「正気か？ 俺にその言葉を持ちかけるということは、その意味も理解しているのだろうか？」

「勿論です。だけど、私は現状ではこれが一番ベストな選択と判断しただけですよ」

「それが契約を持ちかけることか？ だが、そもそも契約とは結果

があり、前提条件があり、等価交換出来るものが無ければ成立しない。契約の内容にもよるが、それを君は用意できると？」

「契約の内容を聞く前からそれはないんじゃないですか？ 吸血鬼というからには、もうすこしゆとりを持ってもいいと思いますけど」

どこから自信が湧いてくるのかは知らないが、少女は俺の目を見据えながら言う。自分にここまで対等な立場に立とうとしながら交渉を持ちかけてくる人間を見るのは、いつ以来だろうか。全く、これだから人の世は面白い。

「では、聞かせて貰おうか。その契約の内容とやらを」

俺は腕を組みながら、少女へと問いかける。

「簡単ですよ。内容はネオン、香織、二人の少女の安全の確実な確保。そして、私の記憶の維持。対価は、私自信でどうですか？」

少女は鎖骨を見せるように、身にまとうブラウスのボタンをはずす。まさに、胸元まで露わになり、少女の白いみずみずしい肌やそれを覆う小さめのブラを大気へと晒す。

「——ほう。自分自身を対価に持つてくるか。だが、二人の安否に関しては君も確認した通り、傷なんかは既に治療したよって、契約ないようには含まれないと思うが？」

「私は貴方を信用していませんよ。絶対的に大丈夫だって、私自信では判断できませんからね。だったら、確実性を取るまでです。そうすれば、間違いなく私の友達は間違いなく助かりますし。さあ、どうですか？ それとも私では対価としては不満でしょうか？ 後、

記憶に関してはさつき説明した理由です」

ふむ、ある意味愚者のやるような提案だが、筋自体は通っているが。

「その二人は、君にとってそんなに価値のある人間なのか？ その二人の為に自分自身を差し出すなど、真つ当な考えではないと思うが」

「あたりまえです。だって、友達を助ける——これ以上の理由なんてあります？ 私って、意外に情にもろい人間だったらしくて、友人の為ならなんでも出来ちゃうみたいなんですよ」

友の為ならなんでも出来る——か。まったく。

「——面白い、面白いぞ人間！！ その契約、我が真名に賭けて受けるでしょう……と、言いたいところだが」

えっ、と少女は息をのむ。まあ、そうだろう。自分自身を差し出した契約、それ以上の対価が彼女にあると思えないしな。だがね。

「今回、俺は正式な仕事の依頼で来ていてね。怪異の解決は勿論、万が一犠牲者が出た場合はそのケアも依頼されている。つまりだ、君がどうこうするまでもなく彼女達は確実に助けたので、契約自体が成立しないんだよ。君には、少しばかり興味が湧いたのが残念だがね。だが、記憶に関してはそうもいかないな。君の記憶と君自身はたして等価交換と言えるのかな？」

契約は原則として等価交換。記憶と彼女の身柄では、あきらかにつり合いがとれないのが一般的に見た方式だ。

「——でも、私は忘れたくありませんっ!!」

少女は瞳を潤ませながら叫ぶ。何がこの少女をそこまで駆り立てるのかは理解出来ないが、その心意気は嫌いではないな。それに、恐らくこの少女は妥協案でも提示しなければひたすら喰い下がってくるだろう。無理やり記憶を消すのもあまり趣味ではないしな。それならば。

「妥協案だ。俺は普段は探偵稼業をやっている。今回もその依頼で此処に来たんだが、暇な時間で構わないから何か依頼を持ってきてくれ。それが、君の記憶の対価だ。俺の生活もかかっているから十分だろう?」

吸血鬼でも腹は減る。探偵稼業は中々に大変なのだ。俺がそう呟くと、少女はピンっとなにか思いついたようにこちらを見上げ。

「なら、私を助手にしてください!!」

そう、声を上げるのだった。どうでもいいが、はやくブラウスのボタン閉めないと、風邪ひくぞ少女よ。

あれから、三日程たったとある休日の昼下がり。

「あれ？ こっちで合ってますよね？」

私は迷子になっていた。

何故、そんな状況に陥っているかというと、三日前のあの夜の出来事の後、あの男性から渡された一枚のメモが原因だった。

「俺の事務所の住所だ。三日後、君がその意思を曲げておらず、心の準備が出来たら来るといい。その時、俺は君を助手として迎えよう。来なかった場合は、君の記憶を消すだけだな」

そう言い残し、あの後男性は屋上から姿を消した。本当に幽霊みたいにすうーっと。

そして香織とネオン、この二人はというと。

「あれ？ 小夜にゃんどこ何処！？ もしかしてUMAに拉致された！？ まさか、私の頭の中には既に謎のメモリチップが——
——っ！？」

「ん、って何でこんなとこに居るの私！？ そして小夜ちゃん、何その格好！？ 惜しげもなく平坦な胸を見せている小夜ちゃん……
抱きついて——っ！？」

という感じである。ちなみに二人とも言葉が途中で途切れているのは、私が思わず殴ったせいなのであしからず。

とりあえず、二人には粉々になった屋上に居た時の説明を「二人が屋上に呼び出して、やってきてみたら粉々になった屋上で二人が気絶してた」と適当に誤魔化していた。何故かこの矛盾だらけの説

明で納得していたのが気になったが、まああの男性のせいだということに納得しよう。

「えっと、ここの角を曲がって、三本目の電信柱を路地裏へ真っ直ぐ」と

地図に従って、人がやってくるとは思えないほど薄暗い路地裏をテクテクと進む。本当に、こんな所に事務所なんてあるんですねえ。

そんなことを考えていると、いつの間にか行き止まり。目の前にはスチール製の簡素な扉。あー、もしかしてコレですか？

念のため、息を一息。

「――っよし」

一声出し、ドアノブへ手を掛け、一気に回し開く。

目の前に広がるのは、わりと急な階段。大体十五段くらいだろうか？ その位の階段が、どこぞの非常口のように急な段差を構築している。

恐らく、私の目的地はこの先にあるのだろう。だから、私は段差へと足を踏みしめる。一步、一步、カッン、カッンと無機質な音を立てながら私はソレを登っていく。そして、そのゴールには最初開けた扉のようなものが一つ。ただ、一つだけ違うのはその扉に真っ白い張り紙の様な物が張られていることだろう。何も書かれていないが、何か意味があるのでしょいか？

そんな疑問を浮かべながら、今度は迷わず扉を引き開く。そこには。

「――っ」

扉の向こうには、真つ赤な絨毯が敷かれ、いかにも日本とは思えないようなおしゃれな部屋。来客用と思われる黒塗りの高そうな長椅子型のソファアが二つ、茶塗りのアンティーク調のテーブルに向かい合って鎮座している。だが。

「広すぎませんか？」

明らかにあの細い路地裏を抜けた先にあるとは思えないくらいの広さ。ざっと二十畳以上はあるんじゃないですかコレ。

私は思わず、その光景を茫然と眺める。

「お、来たか黒髪美少女」

と、部屋の奥から声がしたと同時に、例の自称吸血鬼な男性が以前見たスーツ姿で出てきた。

「まさか、本当に来るとは思わなかったよ。ふむ、黒髪美少女。君、名前は？」

男性は、私を正面から見据え問いかけてくる。それは、ただの素っ気ないやりとりのように思えるのに、何か神聖な儀式のようにも感じる。だから、私は答える。

「小夜です。秋月小夜！！」

秋月小夜……。下で転がすように、男性は小さく私の名前を呟く。そして。

「浅見屋双司だ。ようこそ、浅見屋探偵事務所へ。そしてようこそ、現実と幻想が入り混じる異端の世界へ」

こうして私の常識という日常は終わりの鐘を告げ、新たな日常の鐘を響かせた。

あとがき

はい。皆さんお久しぶりの方はお久しぶり、はじめましての方ははじめまして、桜月九朗です。

今回のお話は、第一話にあたる出会いのお話。双司と小夜の慣れ始めですね。むしろ初夜。初夜って書く響きがエロいです。エロさ満載です。いつかエロさ満載のシーンを描いてみたいです。誰かネタリリース（笑）

これは以前ホームページで連載していた【銀と青】という作品のリメイク版になります。全体を見直し、修正、加筆を喰えたものです。ホームページには携帯、PCからアクセス可能となっておりますので、よかったです。掲載作品は銀と青＋アルファです。

しかし、これを執筆するにあたって、過去のネタ帳を見直していたのですが・・・

キツネ耳と巫女服

何がしたかったんですかワタシハ——！？

そんなこんなで、今日もなんとか生きています。
では、また次回お会いしましょう。

2011年 03月 13日

執筆 桜月九朗

Episode 02【夢幻回廊】

／＊夢幻回廊＊／

．．．．．Side／／ Sayo Akizuki

八月十一日（晴れ）の昼下がり、ちなみに今朝の運勢占いの一位は牡羊座。

その日、私は双司さんに頼まれて、遙々事務所から二駅先にある大型百貨店を訪れていた。その理由^{わけ}だが、なんでも「今回の仕事に必要な物があるから買ってきてくれ。あ、ついでにお茶も」だそうだ。

今回の仕事は、依頼人の娘さんがとある日を境に眠ったまま起きなくなっただけらしい。

もちろん、医者にも診てもらったが全くの原因不明。打つ手なしでサイを投げているそうなの……。

――、医者がそれでいいのでしょうか？

まあ、双司さんなら呆れ顔で「そんなもんだ。医者っていうのは、現実的に不可解な事柄に対しては直ぐに諦めたがる。そもそも現代科学に沿っている医者が診察出来るのは外面的傷害だけだし、第三

要素である魂魄体——つまり魂だな——に対しては認
知すらしようとしないありさまだ。第一、第二、第三の要素全てを
掛け合わせてこそその生命。それすら理解していない奴らを俺は医者
と呼びたくない」と、このくらいは言うだろう。
いや、てゆーか最初にこの依頼の話しを聞いたとき、一字一句違わ
ないセリフを口にしていた。うん、まちがいない。

さておき。

その現在大絶賛睡眠中の娘さんのご実家はかなり裕福………という
より普通にお屋敷に住んでいるくらいのお金持ちだそうで、なんと
か娘さんを目覚めさせようと金銭いとめをつけずに疾走しまつた
結果、最終的にオカルト関係の情報にまで手を出して、回りに廻
って双司さんのところへと依頼がやって来たらしい。

ちなみに、私はそういうオカルトっぽい事に関しては全く役に立
たない。

そう、微塵も役に立たないのでこんな風にお使いみたいなことを
しているのである。

それにしても……………。

「宝石に塩って……、一体何に使うんでしょうか？」

完全に謎のチョイスだ。

宝石は以前、魔力の伝導率が高いので魔術式の触媒には最適だ、
みたいなことを言っていたような気がします。が何故に塩？宝石に塩
振りかけて使うのだろうか？こう、ゆで卵の如く。

深く考えれば考えるほど謎は深まるばかり。先人はなんて的を得た
言葉をのこしたのだ。私は思わず腕を組み、うんうんと頷きながら

感動です。

てゆーか高校生に宝石なんて買いに行かせないでくださいよ双司さん。

だが、私は忘れていた。ここは大型百貨店の内部。ひとりそんなことをしていれば、もちろん周囲からの視線はこちらへ向かう。あ、なんでしょう、なんかすごく白くて冷ややかな視線が……。

本日の教訓、いくら考え事をしてもいきなり頷き始めたりするのはやめましょう。

「——お使い、早く済ませてしまいませんか」

そして一刻もはやくこの場を立ち去ろう。花の現役女子高生である私にとって、この視線は耐えられるものではないのです。そう、羞恥心的に。

…………… ああ、恥ずかしい。

こうなったらお釣りで帰りに団子でも買ってやろう。そして私の胃袋行き決定。

しかし、後にこの団子が食べられない事態に陥るとは、私はこの時思いもしなかった。

S

S

S

．．．．．Side / Soji Asamiya

さて、今回の依頼は奇妙なものだった。

依頼人の娘がある日を境に死んだように眠り続け、起きる気配が無いというのだ。医者モドキにも診せたが原因不明、理解不能。まあ、そんなこんなで「科学で原因が解らないなら、オカルトに頼ろう」と、今度はそっちの路線で原因捜査。だが、世の中そんなに甘くはない。それよりも真つ当な魔術師や心霊術師、洗礼代行者などが簡単に見つかるような存在の仕方をしている訳がないのだ。世間に一般的にとりあげられていたりする輩は大抵パチモノ、テレビなんかに出ているヤツなんかは問題外。つまり、普通は居場所の特定など不可能な存在なのだ。

だというのに……。

「なんで俺は、この依頼を引き受けてしまったのだろうか？」

仕方無いじゃないですか、最近唯でさえ依頼が全くこなかったわけですし。ここらで収入入れておかないと、来月の事務所の家賃危ないですよ？好き嫌い言ってる場合じゃありません――

と頭に思い浮かぶのは、最初この話をした名目上助手の女子高生、秋月小夜の言葉。

ああ、確かにそうだ。好き嫌い言っていられるほど、現在の我が事務所の財政状況はよろしくない。それに依頼人は「あの」崎守だ。ここらで一つコネでも作っておいたら後々役に立つだろう。ぶちゃけ報酬が良かったのが一番の理由だがね。

さておき、とりあえず小夜には今回の仕事で必要な物の買出しを頼むことにしたのだった。ちなみにコレが今から約二時間前のこと。そろそろ帰って来てもいい時間なんだが……。

「早く帰って来ないと、晩飯が冷めてしまう。今日の献立は自信作なのにな——主に竜田揚げの衣のカリカリ具合が」

小夜、せっかく作った料理達を冷ましてしまっ前に帰ってきてくれないよ?。

S S S

．．．．Side// Sayo Akizuki

「宝石って……、高いんですねやっぱり」

百貨店で買い物を終えた私は事務所への帰路に着きながら呟く。だって一個。十万の宝石を五つもですよ? たしか来月の家賃がピンチなくらい財政難だったような気がするんですけど、あの吸血鬼の人。どこにこんなお金があったんでしょうかねー?

でも、なぜかお団子一パック分のお釣りが見事に余りましたが。私の思考回路読まれてます?

ふと、空を見上げてみると茜色の夕日。もうすぐ晩御飯の時間、自分の影法師を眺めながら今日の献立について考える。

——双司さんと出会ってからというもの、晩御飯代がいい感じに節約できますね。

うん、現在の学園に通うために一人暮らしをしている私にとっては、食費が浮くというのはとてもなく重要な事柄なのだ。その分好きなことに経費を回せますしね。

ガチャガチャと、手にぶら提げた買い物袋内の宝石箱が音を鳴らす。さて、はやく帰って双司さんの作った晩御飯に舌鼓を打って、デザ

ートにお団子でも食べましょう」

テクテクと、若干歩く歩みを速くする。後は道路脇道にある公園を抜ければ、事務所のある通りまではすぐだ。静かで、一昔前なら小さな子どもたちがこぞって集まり、遊んでいた小さな錆びれた公園。

「でもこの公園、取り壊されるんですよね……」

たしか、近隣の都市開発が進んで新しく大きな公園が作られたので、人が集まらなくなったのが理由だったでしょうか？確かに利用されないのなら残しておくのもアレなんだろうが……。

私的には、静かで落ち着けるから気に入っていたんですけどね。

学校帰り、途中で買ったジュースやお菓子を片手に、香織やネオンと共に青春の憂いについて語り合ったりなどしていたものだ。いや、現在も結構しているが。

「出来れば残しておいて欲しいものですね……」

ここは私が唯一気に入った公園。遊具が目的じゃない、私がここにいたという思い出を刻んだ場所。もともとあまり公園というものが好きではなかった私が、また此処に來たいと思わせてくれた場所。

——キイ、キイ。

正直、私は公園にはあまりいい思い出がない。だって、これまでの人生十六年の中で一番印象深い記憶が、幼少のころ実家の近所で出会った白衣の変態な人の記憶ですし。実際、アレがトラウマになっていない自分にある意味感動すらしているような光景でしたしねー。

—— キイ、キイ。

そんなことを思いながら、私は小さな公園の風景をながめる。うーん、やっぱりいい感じに錆びれてますねえ此処。

—— キイ、キイ。

ほら、入口から全体を見渡せる程度の広さなのに、人影はさつきから一つしかないブランコを漕いでいる病院なんかでよく見かける患者服を着た、幽霊みたいな黒髪の女性だけ——。

「——、はっ？」

キイ、キイ、キイ。ゆつくりと、まるで風の流れに身をまかせるようにブランコを漕ぐ一人の女性。俯いている為表情までは確認出来ないが、あの柳の下の幽霊みたいに垂れている豊満な黒髪からして女性だろう。

うん、ホラーです。無茶苦茶ホラーな状況です。だって今、夕暮れ時ですよ？双司さん風に言つと黄昏時ですよ？逢魔ヶ刻ですよ？詳しく言つと薄明な時間帯ですよ？さらに言つと交通事故が一番多いといわれる時間帯です。や、私車の免許なんて持っていないですがね。

—— キイ、キイ。

ブランコを漕ぐ音は止まない。それは規則的に秒針を刻む時計の針の様に、一定のリズムで台座を支える鎖の軋む音を奏でている。えー、私は声でもかけたほうがいいのでしょうか？双司さんのせいである程度奇妙なシュチュエーションにはなれたつもりだが、どうや

らまだまだのようです。少なくとも今現在、この状況下でどんな行動をとっていいのか判断が全くつきません。でも……、ネオン辺りなら迷わず声を掛けるんだろうな」。

「そう思ってるなら、声を掛けてくれてもいいんじゃないかしら？ せつかくこんなところで会ったのだから、雑談くらいはしても良いんじゃないかと思うの」

びくつ、と背筋が震える。私、今声にだしていましたっけ？ そんなことを考えていると、黒髪の女性は言う。

「声にだしているとかは関係ないの。重要なのはヒトそのものが纏っている空気——不機嫌ならピリピリした、嬉しそうならほんわかした……そんなヒトの気質なのよ。あなたの気質は特にわかりやすい。汚れというものを知りながら、森林に流れる小川のように透き通っている。汚れに触れているのに、汚れることのない……そんな空気。知ってる？ それはもう大昔では、知性を持った存在っていうのは声や音ではなく、空気の質で意思のやりとりをしていたらしいわ。すごいと思わない？」

……や、そんなこと言われましても私は一割も理解出来ないと申し上げます。てゆーかソレ日本語？

「まあ簡単に言えば、あなたは顔に出やすいってことよ」

「率直に言っ、いきなり失礼な人ですねあなた！！」

「あらあら、気を悪くした？ まあ、そんな訳だから少しばかり暇つぶしの雑談に付き合ってくれないかしら？」

どんな訳ですか。

私は理解した、この人はどっちかっていうと人の思考のナナメ四五度くらいを地で行く双司さんと同類の人だ。つまり、まともな言葉のキャッチボールが成立しません。はい。

「多分、今は『このヒトの思考回路はナナメ四五度くらいを地で行っているんだろうなあ』くらいかな？」

「だから何で考えてることが分かるんですか！！」

—— さっきも言ったじゃない、あなたは顔に出やすいって
—— と、黒髪の女性は言う。もうそんなレベルじゃないと思いますマジメに。

「うーん、あなた学生さん？ 感じ的にと十六、七くらいに見えるけど。この付近に住んでるなら、南ヶ丘学園の子かな」

「え、はいそうです。南ヶ丘学園の学生ですけど……」

問いかけてきた女性に私はそう答える。
すると、彼女は微笑を洩らしながら。

「やっぱり、私も南ヶ丘に通ってたのよ。だから、一応あなたの先輩ってことになるかしら」

なつかしいなー、と呟きながら女性はジリジリと日の光が降り注ぐ空を仰ぎ見る。さらっ、と顔を上げた瞬間吹いたそよ風で、豊満な長髪で隠れた素顔があらわになるが——。

——とんでもなく美人なんですけど!？。

すらっと伸びた鼻のライン、綺麗にほっそりと整った顔の輪郭、皆既日食を思わせるかのような黒曜石の瞳、長く上向きに伸びたまつ毛、そして、病的なまでに白い素肌。それは生まれてこのかた、太陽の光など浴びたことのないのではないかと思わせる程に透き通っていた。しかしそれを差し引いてもなお、彼女の素顔は美しかった。や、だってあんな長髪で俯き加減で夜な夜な柳の下に出てきそうなオーラを纏いながら一人でブランコ漕いでるところを観てると、どうしても目の下に隈が張っているような辛気な女性を思い浮かべませんか? ああ、ここにネオンがいたら絶対ネタになるとか言ってるんだらうな!。

「——あら、どうかしたかしら?」

いいえ、なんでもありません。あなたの素顔の想像とのギャップに葛藤しているなんて、本人の前じゃ口が裂けても言えません。

「そ、それよりその格好……どこか入院でもしているんですか?」

「ああ、コレ? うん、入院……そうね入院しているわね。入院している私は鳥籠の中の鳥なの。一向に変化のない真っ白い病院の風景、そとの景色も流れていく四季を多少感じる程度の変化しかない。だから、私は此处にいるのよ」

——鳥籠の鳥、変化のない風景。だから此处にいる?

「えーっと、入院しているなら病室にいたほうがいいんじゃないんですか? 身体悪くしますよ。今日は真夏の快晴ですし」

まあ一般論だろう。病人ならば病室でおとなしくしておくのが一番だ。

ただ、入院しているから此处にいるっていうのが私にはいまいち理解出来ないが……。

「そうね、たしかにその通りね。でも、病室の中は永遠に変化のない風景、回廊と同じなの。前に進んでも、後ろに戻ってもそこにあるのは真っ白い病室の壁。そんなところにずっといたら、たまには別の回廊……景色も見てみたいと思わない？そう、たとえ夢でもいいから代わり映えのない回廊から私は抜け出してみたい、そう思ったのよ」

哲学的です。すごく哲学的です。

「それにね……」

「それに？」

「部屋に籠ってるより、外に出たほうが楽しいじゃない」

「なんか妙に難しいこと言ってた割に、最終的にはソレですか!!」

病人なりに苦労があるのだろうか、結局そうきましたか。

「ふふふつ、そうやってツツこみを入れてくれる人って私好きよ。できるなら、ずっとこうやってお話してたいくらいにね」

出来れば勘弁願いたいです。私、頭ふつとび気味の人は双司さんだけで手一杯なんです真剣に。

「でも、この楽しい時間もそろそろおしまい。日が傾いてきちゃったし、あなたもそろそろ帰った方がいいんじゃないかしら。その荷物を見ると、買い物物の帰りでしょ？」

「あつ!？」

双司さんのお使いの途中だったのをすっかり忘れてました――

――!!

「じゃあね、縁があればまた会いましょう、可愛らしいお嬢さん」

――キィ。

ブランコを軋ませながら女性は私に背を向け、私が入ってきた公園の入り口へと歩き出す。

うーん、なんとも不思議な人でした。なんか双司さんと知り合ってから、平穏な日常ってものを忘れかけているような気がします。真面目に。

「あ、はやく戻らないと双司さん待ってますね」

急ごうと。そうして、私は少し小走りで女性の向かった入口とは反対側へ向かって歩きだすのだった。ん？そういえば、事務所のお茶が切れてた筈だったから、寄り道して買って行きますか。

「人間というのは凄いな、小夜。見てみるんだ、このサランラップという道具を。こんなビニール一枚被せるだけで、大抵の食品の保存のサポートをしてくれる。まずだ、普通は食事にビニールを被せて保存するなんて荒業を思いつくか？いや、答えは否だ！世界で初めてこれを作った人間は一体何を考えてこのようなことを思いついたのか！？うん、人間というのは時たま凄まじく恐ろしい……。ところで、クレラップとサランラップって、何が違うんだろうか。材質？」

「はい、私が戻るのが遅くなったせいで折角双司さんが作ってくれた晩御飯が冷めてしまったのは本気であやまりますから、その妙な疑問をつかった現実逃避は止めてください。正直、脳の神経疑います」

仕方ないじゃないか、せつかくの竜田揚げが……。

「私も不慮の出会いのせいで遅くなったんですから、少しは多めに見てください」

不慮の出会いって事故みたいなものか？

「うん、不慮の出会いなら仕方ない。だが！！冷めてしまった竜田揚げに罪はないのだよ小夜。そもそも、罪とはなんなのか？人間の欲である業、ヒトがヒトであるかぎり未来永劫付きまとうてくるオマケ。ああ、人間とはなんて不思議なんだろうか」

「だから、私が悪かったですからその三文芝居は止めてください！私って、なんでこんな人の助手なんてやってるかな——！！」

いや、小夜よ。それはお前から言い出した事だぞ？

「双司さんって、時たま真面目な思考になるから私ついていけせん……」

「ははは、何を言う。俺はいつだって真面目な思考をしているじゃないか。主に冷めてしまった晩御飯に対する愛とか」

俺がそんな素晴らしい一般論を告げると、「もう……いいです」など頂垂れながら小夜は呟く。失敬な、俺はいつだって真面目なんだがなあ。

「そういえば今日買ってきた宝石、あれとんでもなく高かったんですけど何処にそんなお金があったんですか？確か事務所の家賃も厳しいのが現状でしたよね？この事務所、双司さんが魔改造しちゃってるから、検閲入るだけでも危ないのに」

「ああ、それはこれでも長生きしてるからな。あの程度出せるだけの貯蓄はあるし、アレの代金は魔術関連専用の資金から出したものだ。よって、なにも問題は無い」

「————つて、貯蓄あったんですか!？」

「当たり前だ。これでも齡千近くいつてるんだぞ？資金を作る暇くらい腐るほどあったさ」

じゃあ、別に切羽詰まらなくてもよかったんじゃない……。そう小夜は呟く。やれやれ、わかってないな。

「いいか小夜、俺は今人間が確立した文明の社会で生きているんだ。

ならば、それにともなつた生活するのが道義。かつての資金を日常生活で使用しては、その道に反する。解るか？つまりは、今現在の収入で生活しなければ人の世で暮らしているとは言えないんだよ。まあ、物好きなかつての旧友は、人の世を避けてヨーロッパの山奥に城建てて暮らしていたりするが」

ちなみに城の名前はブラッディローゼンクロイツ。どこの格闘ゲームの必殺技だ。

「えーっと、つまり昔から溜めていたお金は使えないと？」

「そついうことだ。だからこそ、今回の依頼を引き受けた訳だしな」

宝石使った浄化は金がかかるんだけどな。今回購入したものの全部使い捨てだし。さらば。百二十万円。しかし効率がいいから仕方ない。

「あ、双司さん今日泊めてもらえます？今日の終電まで、もう時間ないんですよ」

我が事務所の黒革のソファに足を投げ出しながら小夜は言う。だらしないぞ女子高生、それでいいのか女子高生。もう少し慎みをもて。

「双司さんは、女子高生というものに夢を持ちすぎなんです」

現実はこのなものですよー、と間延びした声で答える小夜。別にいいじゃないか、女子高生に夢くらい持ったって。うん、随分俗世にまみれてきたな俺。

「まあ泊まるのは構わないが、君は翌日は学校じゃなかったか？平

日だぞ明日」

部屋とかは、たまにこういうことがあるので小夜用の部屋を用意してあるが。」

「ここから直接行くから問題ないです。最近コンビニとかでお金も下ろせるようになったから便利ですよー」

世間帯からみる限り、なんとも言えない状況だ。

「と、言うわけで今日は泊めてもらいますね。……お風呂とか覗かないでくださいよ?」

なにを言う。

「ははは、そういうのはもう少し凹凸のあるホモサピエンスになつてから言った方が自分の心の為だぞ小夜。第一、俺からしてみれば『覗く』という行為は何が楽しいのかが理解出来ん。どうせなら……やっぱりナマが一番だろう」

あ、小夜。そのなんとも言えない可哀想な物体を見るような眼は止めてくれ。いくら俺でも心に何かが突き刺さる。

「双司さん、ソレ右斜め下ストレートばりのセクハラです。はあ、私シャワー借りてもう寝ますね。双司さんもあんまり夜更かしは身体に毒ですよ」

パタパタと、スリッパの音を響かせながら小夜は部屋を出ていく。うーん。

「小夜、俺は一応夜行性の吸血鬼なんだが……。――しかし、右斜め下ストリートっていうのは、俺の評価が右斜め下がりってことなんだろうか？」

．．．．．Side / Sayo Akizuki

夢を見る。ヒラリ、ヒラリと風に乗り空を舞い上がる飛行機のような感覚。自分の肉体の感覚は無。だが、私の視点は風にあおられる様にゆっくりと上下左右へ移動する。

ヒラリ、ヒラリ、ヒラリ。

虚ろな思考。なにも考えられないくらいぼーっとしている私の思考。

ヒラリ、ヒラリ、ヒラリ。

目に映るのは白い壁のような景色。右へ映っても白い壁、左へ映っても白い壁。真っ白い空間に囲まれたここは何処なのだろう？ ああ、なんかこんなことも考えるのが億劫になってきました。

「私は、色んな世界が見てみたい。人によって、違う感じ方をする世界というものを見てみたい……」

誰だろうか？ そんな声が虚ろな思考の中で、私の耳に届く。

「たとえば、ここから出られなくてもいいから……。それでもいいから見てみたいの、外の世界っていうものを私は――」

ザザッ、と声と声の合間合間に壊れたラジオ見たいなノイズが走る。時たま、何かを祈願するような声が聞こえ、ノイズでかき消され、それをただただ繰り返す。

これは、私の夢なのだろうか？

肯定も出来ない、否定も出来ないだってコレは、私には確かめようのないことだから。

—— そんな、夢を見続ける。

．．．．．Side / / Soji Asamiya

「小夜ー、起きろー、朝だぞー、学校行く時間だぞー、遅刻するぞー。まあ別に小夜が遅刻しても俺は困るわけではないのだがな」

朝のお約束とも言うべきか、俺は彼女の眠る寢室の扉の前で中にいるで情眼を貪っているであろう少女へ呼びかける。どうも小夜が泊まっている時は、これをやらないと朝が来た感じがしない。不思議だ。千年以上生きた俺でも分からない不思議である。そして小夜、早く起きてくれないと、今日の朝餉が先日の晩飯の二の舞になるだろうが。

「さっさと起きないか。でないといくらペタンコなお前でも朝から襲っぞ」

俺としては、やはりしっかりと凹凸があつたほうが嬉しいのだが。
彼女の胸に罪はない、きつと。

しかし、いつもならこれで出てくる筈だが……。

「……………」

しーんと、静寂が周囲を支配する。ふむ、人の動く気配すらないな。
だが、そろそろ朝餉の保温時間がピンチなので起きてくれ。でない
と、折角の鯖の塩焼きが――

っ!?

「――これは」

扉から漏れる空気に混じつた甘く、それでいて苦みを感じさせるよ
うな匂い。そう、まるで食虫華がかもしだすような、この爛れた香
りは……。

「……っ、魔力の残り香だと？」

ばかな、昨日はそんな気配は微塵もなかった。こんな遅延性の残り
香など、少なくとも俺は聞いたことがない。いや、それより今は――
――。

「小夜、入るぞ!」

叫びながら目の前の扉を蹴りあける。む、やはり鍵がしてあつたせ
いか扉が碎けてしまったが、今はそんなことは気にしていられない。
そう、今は彼女の安否のほうが重要だ。

十畳ほどの、それなりに広い空間を有する小夜にあてがつた寝室。
備えてある洋服棚などのアンティークの家具はそれなりに歴史があ
るもの。ときたま視界に映るぬいぐるみなどは小夜の趣味だ。決し

て俺の趣味ではないのであしからず。そして視界の一番左端、そこに彼女が眠るであろうベットが備えられているが――。

「……小夜を包み込むように流体が漂っている?」

近づいてそつと彼女の寝顔に触れる。スヤスヤと、安心しきつた子供のように眠る彼女は、特に苦しんでいる風には見えない。寝言でなにか呟いているみたいだが、俺には何も聞こえない。ああ、聞こえていないとも。なにがバームクーヘンだ。

しかし、問題は彼女を包むこの魔力流。本当に微弱で分かりにくい、これは恐らく一種の呪いの類だろう。何故呪いなど……?

「はあ、依頼どころじゃなくなりそうだな……まったく」

とりあえずは、こいつをどうにか出来ないか試してみるか。この呪い…解呪したら爆発とかしないかな?

．．．．．Side / ？？ ？？？

カチリ、カチリ、カチリ。古い映画のフィルムを回すような音。視界には私の見たことのない風景や人影、そして背景音が目の前のスクリーンに流れている。B級映画の様にすり減った画質だが、私にはこれで十分。

だって、私はただ自分の見たことが無いものを見たいだけ。それがたとえ虚像や偽りの視界で見えるものでも、私はそれで満足なのだか

ら――。

．．．．．Side / Soji Asamiya

「解呪してもすぐに張りなおされる…、常時展開型の呪みたいだな」

さつきから呪いの流体をいくら消し飛ばしても、また直ぐに流体が展開する。クソッ、施されている概念が解析出来れば簡単に完全解呪出来るんだが、それにはまず大本の術の本体を直接視認する必要がある。無理やり別の概念で上書きなんて力技をやったら、小夜本人に反動が逃げる可能性もあるしなあ。

「厄介な術を使われたな。いや、むしろこれは能力の類か？」

それならばこの魔力流の気薄さも納得出来る。本来ならば、このような術を使えば濃いめの魔力の残滓が残る。だが、この呪にはその傾向が全く確認出来ないのだ。ならば術式から動作している術ではなく、そのプロセスを省いた結果を先出ししている『何か』から呪を飛ばしていると考えた方が辻褄が合う。

まあ、『赤』と違って俺はそこまで魔術には精通していないので断言は出来ないがね。

「しかし、これは何の呪いだ？一般的な陰陽の凡庸解呪で解けるにしては、直ぐに展開される……。しかも小夜本人には何かこれとい

って異常がある訳でもない」

被害者本人さまは、至って幸せそうに睡眠中である。外傷系でないなら、内面——精神系の呪いだとは思うが。眠っている……？

「確か、似たような症状を起こす術について書いてあった本があったな」

俺は踵を返し、書斎へと向かう。

そう、以前暇つぶしに読んでいた書物に関係のありそうな記載があった筈だ。せめて、何か手掛かりになる記述くらいはあるだろう。

．．．．．Side / Minamigaoka School

「もう二限目始まるのに、小夜ちゃん来ないなあ」

私、秋山香織は教室の窓から次の授業の為グラウンドへ移動する生徒をアンニュイな気持ちで眺める。時刻は約十一時前、次の授業は英語、私は英語は嫌いだ。だって担当暑苦しいし、男だし。

ああ、小夜たんという心のオアシスもないんじゃないじゃ、私のテンション鬱になる一方だわ。

「おやつ、カオりんどしたの??」

ひょこつと、細いデザインフレームのメガネを掛け、胴体に縄のロープを巻いた少女が逆さまで私の視界に現れる。なんだ。

「小夜たんがなくて次の授業のこと考えてたら鬱になったのよネオン。てゆーかアンタはどこから出てきてるのっ！？ここ三階でアナタがいるところ私を挟んで窓の向こう側よ！？しかも上下逆さまだし！！」

ちなみにこの学校は五階建てである。

「ん？ああ、コレはさっきまで屋上にいたからね。ほら、春先の屋上崩壊事件あったじゃない？私、カオリんと同じで現場にいたのに記憶ないから、改めて原因調べてみていたのさー。ちなみに、そんなことしてたら授業まで五分切りましたので、ロープ使って下りてきました」

ぶらーんと、宙づりになりながら彼女はのたまう。普通に階段で下りてきたらどうなのよ。あ、風でネオンが振り込みみたいに揺れ始めた。このままロープを切ったらどうなるのだろう。普通に考えて落ちるかしら？

とか考えていると、「よつと」と掛け声を出しながら、ロープをそのままに彼女は教室内に侵入してきた。平然と縄抜けをするな。私も人のこと言え無いけど、行動がぶつとんでるなー。そして、いつものことの様に知らんふりを決め込むクラスメイト達。

「ネオン、私ね常々思うんだけど、アナタその妙な行動技術どこで覚えてくるのよ？」

普通の人間なら、まず屋上からロープ使って下りようと思わない。

「それはアタシもカオリんに聞きたいことなんだけどなあ。だってカオリん、普段運動とかするとき絶対手抜いてるでしょ？走り方

とかアタシが見る限りじゃ、絶対わざとやってるもん。ほら、素人が慣れないのにプロの真似をやるみたいに。カオリンのはその逆かな？プロが素人の真似をして動いてる」

たまにこの子の洞察力には恐れ入るわね…、絶対ばれてないと思っただのに。

「まあ、理由聞いても教えてくれないんでしょう？ならアタシも同じ。ふっふっふ、いい女には謎が多いのだ」

キラーン、と一瞬メガネのレンズが光ったのは幻覚だろうか。うん、幻覚だろう。そんなマンガみたいなエフェクトが、リアルにあったらたまったものじゃない。実際力ミナリとか落ちたらどうよ？

「そういえば、小夜にゃんまだ来てないの？アタシ達の心のオアシス」

「うん、まだ来てないの……。携帯にメールしても返事がないし、電話しても出てくれないし……」

「小夜にゃんが学校サボるなんて珍しいよねえ。いつもは前日とか前の日に宣言してからサボるし」

今回は事前宣言はなかったしなあ。小夜たんどうしたんだろ。

「でも小夜にゃんなら心配いらないでしょ。あの子あんな小動物みたいなナリして色々とハードだし。アタシたちはいつも通りイケナイオカルト雑誌でも読みながら次の授業をのりきればいいさー」

そういえば『ウー』の新刊まだ読んでなかったわね。ネオンが持

つてきてるだろうから、後で貸してもらおう。珍妙道中抹茶味の続きも気になるし。

たしか、前回は行方不明の恋人を追って、鍾乳洞の奥にある地下帝国に侵入したところまでだったかしら。アレは空飛ぶピラミッド編が一番面白かったんだけどなあ。空中に浮かぶピラミッドで恋人と肩を寄せ合いながら感傷に浸る主人公の描写には思わず涙した。夕焼けをバックに手の指と指をからませ、お互いに愛を語らう。うん、女の子なら誰しも一度は夢見るシュチュエーションよね。その後の風に煽られて、主人公が外壁からノーロープバンジーをして、ついでにテンパツたのが浮気していたことをバラしていた個所は頂けないうが。私なら間違いなく刺してる。こう、心臓をナイフで五回くらい抉った後、跡形もなく炎で消し炭にするように。

ちなみにその物語のヒロインは、命からがら外壁を這い上ってきた主人公を改めて蹴り落としていた。げしっ、てな感じで。

「カオりん？眉間に皺寄せてどしたよ。その豊満すぎるバストのせいで肩でも凝った？」

「それはいつものことよ。ただ、ちょっと普通の物語ってなんなのかなあって考えてただけ」

ちなみに小夜ちゃんに胸の話をするとうり出す。それはもう烈火の如く。「胸のある人には……無い人の苦しみがわからないんです！なんですか肩が凝るって……、貴様の胸には鉛でも入ってんのかー!?」と、こんな感じで捨てられた子犬の様な、プリティな目をしながら、がーっと襲いかかってくるのだ。胸に向かって。そんなにいいものじゃないと思うんだけど……。肩凝るし、周りの視線は気になるし、売ってある下着とかも可愛いもの少ないし。

「そろそろチャームが鳴るわね。ネオン、あなたこのロープちゃ

んと片付けなさいよ？なにかあったら真っ先に疑われるのは私かあなたなんだから」

縄抜けして教室に入ってきたせいで、窓の外にはロープだけぱらーんと揺れている。それは、まるで今の私の気持ちを代弁しているかのように、シニールな光景だった。

．．．．．Side / / ？？ ？？？

真っ白い、映画のようなスクリーンだけのある真っ白い私の世界。私は此处でいつものように、私の知らない景色を見る。あ、これ懐かしい。南ヶ丘学園の校舎だ。そういえば、あの子は南ヶ丘学園の生徒だって言ってたから、スクリーンに出ても不思議じゃないわね。カチリ、カチリと移り変わる風景。……なんでこの金髪の女の子は頭に蠟燭なんて刺してるのかしら？

「でも、面白いわねこの子の映像」

本当に面白い。今まで見てきた映像のなかでも間違いなくTOP5には入るのではないか。

なにせ、まだ学校の日常しか見てないが、普通とは程遠いイベントにあふれた記録だ。少なくとも私の学生時代の友人は、授業中に粉塵爆破をやつてのける猛者などいなかった。何人が吹き飛んでたよね、アレ。

「さて、次は……っと」

ザザッと、ノイズ混じりの音を掻きだしながらスクリーンが切り替わる。

——真っ暗？いや、凄く小さいがなにか唸り声のようなものが聞こえてくるので、既に映像は始まっているようだ。

「何の記録かしらこれ？」

黒い暗幕のような映像。いや、ところどころ真っ赤な花卉のようなものは見える。

だが、ソレが何なのかがはっきりしない。音声も、先ほどの唸り声のようなもの以外はノイズの入った雑音だけ。これは——
|。

「——そこまでだよ、崎守ミサキ。そこから先の映像は君が見るべきものじゃない」

「——っ！？」

人の声？なんで？ここは私の世界。私以外の人間がいるはずがないのに……！！？

私は声の聞こえた方を、おもいつき振り向く。そこには黒いスーツを身にまとい、この世界に存在する筈のない椅子に腰かけている、黒髪オールバックの男が悠然と足を組みながら存在した。周囲の床には、彼を中心に真っ赤な宝石の様な石がばらまかれている。彼は眼を瞑りながら。

「やれやれ、他人の思考を取り込み、それを映像として閲覧する……。いや、性格には『他人の思考を抜き取る』と言ったほうが正しいか。こんな術が使えるのは才モイカネを祖に持つ崎守の血く

らしいかないっていうのに……、俺はなんで直ぐに気がつかなかったんだろうな」

やはり平和ボケしているかと、いきなり私の視界に現れた彼は呟く。

あの男は誰だ。私の世界に当たり前のように入り込んできて、意味のわからない言葉を呟くあの男は誰だ。どんな方法を使ったかは知らないが、既にスクリーンの映像は停止している。つまり、あの男は私の世界に干渉してきたということ。

「自分が無理だからって、他人の思考を集めるのは勝手だが……あの子に目を付けたのだけは間違いだっただな。あんなのでも俺の助手なんでね、勝手に行動不能にされたら困るんだよ」

そう、男は言葉を紡ぐとゆっくりとその瞳を開く。

「崎守ミサキ、次に目が覚めたら今度は自分の瞳で世界を見てみるといい。君の病は、君自身で引き起こしている副産物に過ぎないのだから」

———なんのこと。そんな疑問を投げかける暇もなく、私の視界は黒に満ちていく。最後に見えたのは、燦然と蒼海のように輝く、男の瞳の色だった。

.....// Epilogue for Dream Illusion Spiral

「——んっ」

何か、変な夢を見たような気がした。真っ白い誰もいない空間に一人たたずむ、悲しそうな女性の夢。睽越しに、白い暖かな光のようなものを感じる。この部屋は冷房が効いているので、身体を包む毛布のぬくもりが心地いい。ああ、もう朝か。

今日は月曜日、学校に行かなければならないのでそろそろ起きないと。

「小夜ー、朝だぞー、学校遅刻するぞー」

耳に、ここ三カ月ほどで聞きなれた男性の声が聞こえる。そうだが、たしか昨日は双司さんの事務所に泊まったんでしたね……。また作ってくれたご飯を冷ましてしまうのも可哀想ですし、起きるとしましょう。

そう決断し、私は虚ろだった瞼を開く。が。

「おはよう小夜、朝だぞ」

目の前に、ドアップの双司さんの顔が映っていたので反射的に殴ってしまった私に罪はないだろう。

「で、なんで今日の携帯の日付が火曜日になってるのか双司さん理由わかります？」

「そりゃ小夜、お前が日曜からぶっ通しで惰眠を貪っていたせいだろうな」

俺はちゃんと起こしたぞ。と、彼は朝食をテーブルに並べながら言う。私ともあるうものが丸一日以上寝続けるなんて……、学校行ったら香織とかが煩そうですね。

「って双司さん、なんか今日の朝食豪華じゃないですか？」

テーブルに並ぶのは正月に見るようなタイの塩焼きやその味噌汁、出し巻き卵なんか光沢が違う。

「ああ、依頼の報酬がよかったからな。それなりに奮発してみたのさ。出し巻きの出しなんか、蟹味噌からとってるぞ？」

「依頼の報酬って……、いつの間に終わらせたんですか！？しかもそれでこの食事って」

とてつもなく食欲をそそる香り——、朝から太らないだろうか私。でも、ご飯に罪はないのでちゃんと全部頂きます。

「そういえば双司さん、私変な夢みたんですよええ」

食事をとりながら、私は双司さんに声を掛ける。

「変な夢？」

双司さんのオウム返しのように、私は話す。先ほどまで見ていた一人の女性の夢。真っ白い世界で、自分がみることの出来ない景色をスクリーン越しで見ることで満足していた、悲しい

女性の夢を。

「どう思います？私的には、さっさと自分で見たいもの見に行け
って言いたいんですけど」

それが私の率直の感想。その場の映像より、リアルでみたほうが
絶対にいいと思うのだが。その意見に双司さんは。

「そうだな、夢だからなんとも言えないが……、彼女は囚われて
いたんじゃないか？夢幻——自分の空想で全てを得られる
と理解してしまった回廊にな」

そう、窓の外を眺めながら呟くのであった。

．．．．．Side / Misaki Sakimori

「——っ!？」

焼けつくような胸の痛みで目が覚めた。此处は……病院？私は何
故こんなところにいるのだろう。疑問に思い、自分の記憶を掘り起
こす。私は最後は自宅の寝室で睡眠をとった筈だ。そう、確か前々
から悩んでいた世の中のしがらみについて考えながら。なのに何故？
周囲へと視線を向けてみる。真っ白な壁、その一角にデジタル式
のカレンダーのようなもの。日付を見ると、2007年の八月

十三日——！？おかしい、今は2005年の三月ではなかったか。

「……だめ、思い出せない」

やはり私の最後の記憶は、2005年の三月。いや、まずそれ以前にこんなところにいる経緯すら思い出せない。

そう、私がこの不可解な事態に頭を悩ませていると、ガラツと病室のドアらしきものが開く音がする。なにかと思い、そちらに視線を飛ばしてみると——。

「お母さん……？」

花瓶を持った妙齡の女性。私の記憶より、若干やつれたその女性
は間違いなく私の母親だった。母親は私の呟きを聞くと一瞬硬直し。

「……………」

「お母さん——！？」

そのまま横向きに倒れてしまった。

さて、その後私は手元にあったナースコールらしきボタンを押し

て人を呼び、現状の説明を受けた。

なんでも、私は2005年の三月から眠りっぱなしだったらしい。原因も不明のまま、今まで過ごしてきたがいきなり目の覚めた私をみて倒れた母親は仕方ないそう。ほとんど植物状態みたいなものだったそうだし。ダメもとで最近お祝いしてみたこととしてみたそうだし。でも、いきなり倒れるのは私としては傷つくわ。

そして現在、私は病室で母親と仕事中的なのに急いで駆け付けてきた記憶よりもやはり若干老けた父親と話しをしていた。

「……からだ中が痛い。関節固まってるんじゃないかしらコレ」

「仕方なかるうミサキ、今までずっと眠っていた訳なんだからな」

私の呟きに父親は呆れ声で答える。だが、その表情は笑みを浮かべていた。あの厳格な父親のこんな顔が見れるとは……、予想外だね。

「ミサキ、なにかしてみたいことない？ずっと眠ってた訳だし、色々したいことあるでしょう」

「おいおい母さん、眠ってたのだからいきなりそんなこと言われてもミサキも困るだろう。まあ、何かやってやりたいのは私も同じだな」

はっはっは、と笑いながら話している両親。やりたいこと……か。

「お父さん、お母さん、私ね、世界を見てみたいわ——」

——何故か、私はそう思ったのだった。

廊 END

夢幻回

あとがき

中学生の時に、机の椅子にノリを塗られていて大惨事になったことのある桜月九朗です。

さて、夢幻回廊書き終えたった今このあとがきを書いています。この話って、結構個人的にまとめるのが難しかった話なんですよねー。最初のプロットを読み返していると、何故かバームクーヘンやらミートパイなんて単語がチラホラ。……ワタシハナニガシタカッター？

さて、ここからはとある先輩との会話を書いてみたいと思います。まあ、くだらない日常会話での一文です。

俺「なあ、なんかネタある？こつ、ジェットコースターの如くメ

リハリあるヤツ」

先輩「いきなりネタと言われても。……そうだな、さいきん近くのスーパーで、ちょー怖い話っていうガム買ったんだけど」

俺「なんですか？その珍妙なタイトルのガム」

先輩「一個四十円くらいで、ちょー怖い話を書いてあるカードが入っている訳よ。ちなみに二枚買ってみた」

俺「何で二枚も買うかなーそんな地雷物」

先輩「なんの運命か、ちょー怖い話4、5のカードが当たった訳なんだが。その一枚目のカードはこんな話が書かれていたんだ。夜、時速60キロくらいで車で道路を走っていると……」

俺「走っていると？」

先輩「明らかに亡霊臭い老人が、走行中の車の横を並んで走ってる訳だよ。全力で」

俺「怖えっ！、超怖え！？夜とか車運転出来なくなりそうで怖いんですけどっ！？」

以上、あとがきでした。では、次の話でお会いしましょう。
最後に、この話を読んでくれた方々に最上級の感謝を。

筆
桜月九朗

2
0
1
1
年
3
月
1
6
日
執

Episode 3【揺り籠の庭園】（前書き）

PV100突破!! ありがとうございます!!

Episode 3【揺り籠の庭園】

夜の静寂、月光のカーテン、遠いネオンの灯。

幼いころの私にとっては、それが普段の自分の世界を作り出す全ての光景だった。名も知れぬ町はずれの雑木林。夜の顔に切り替わる時に、私はあの光景を思い出す。

昼間の温情な日常。それらを忘れ、一つの目的を達成するための道具をイメージ。人としての感情はいらない。余計な思考もいらない。必要なのは、ただ一つ胸の奥に宿る悲願を達成する為の身体。思考の揺り籠に包まれながら、私は空を見上げる。秋風は頬を撫で、季節の移り変わりを告げる様な冷たい感覚が広がる。

準備は終わった。覚悟も出来た。さあ、今宵も空を紅蓮に染めよう。

私は、神の焰を編む『劫火の庭園』なのだから。

「まあ、あんまり乗り気はしないんだけどね……」

ふう、と軽いため息を吐く。いくら実家の手伝いとはいえ、私個人としてはめんどくさい事この上ない。私は帰りに買った雑誌の続きを読みたいのよ。

右手を振り上げ、私は式を編む。イメージするのはいつも、真つ赤な紅蓮の炎に抱かれた自分。胸の中心から魔術方陣へ魂を接続、マジックサーキット大気より魔力粒子を吸引。それを、ゆつくりと全身に染み渡らせる様に己の魔力とブレンドする。そして、ソレを掌に集中させ、編みこんだ式を通し、発火。いずるは紅蓮の火炎。

さて、狩りの始まりだ。目指すは宝物庫。狙うは神剣『火ノ迦具槌』。

全ては、荒ぶる神を殺す為に――。



／＊揺り籠の庭園＊／

季節は秋、暦は十一月のある日、双司さんがクシャミをした。

「む、鼻が出るな。小夜、ティッシュ取ってくれ」

「はい、どうぞ。風邪ですか双司さん？ もう秋なんですから気を
つけないと」

「一応、俺が風邪を引くなんてことは無い筈だがなあ。不老不死だ
し」

と、こんな会話をしている此処は浅見屋探偵事務所の一室。ちよ
うど入口前の応接間から奥へと進んだところにある、普段執務室と
して利用している場所だ。簡単に言うと、いつも私と双司さんと二
人で仕事している場所にあたります。まあ、仕事といっても探偵事
務所につきものな依頼なんかは全く無く、いつもは本の翻訳のサポ
ートなんかしながら過ごしている。おかげで、英語の成績上がりま
したけど。後は、上がった原稿を出版社に届けたりなど。

「小夜、今年の風邪は吸血鬼にも効くみたいだから気をつけろよ？」

「何バカなこと言ってるんですか」

不老不死で自称吸血鬼な双司さんに効く風邪があるなら、私はと
つくに病院行きである。

「アレじゃないですか？ 誰かが双司さんの噂をしているとか」

「ああ、それは絶対に真つ当な噂じゃないな」

私もそう思います。などと心では思っても、言葉には出さない。
何故かといえば、双司さんってああ見えて結構繊細なのだ。

事の始まりは、私がこの事務所にやって来はじめて数日ほどたったある日。殆ど外出しない双司さんに対して、思わず言ってしまった言葉が原因だった。

—— 双司さんって、傍から見たら引きこもりですよ。

その言葉の後、二日程へこんでいた。時々思う、本当にこの人は吸血鬼なのかと。

「ああ、そういえば冷蔵庫にニラとレバーがあったな。よし、今夜はスタミナの付くれバニラだ」

うん、本当に吸血鬼なんでしょうか？ この男。

「まあ、今更なんですけどねえ」

「何がだ？ 君の胸囲の絶望的未来図がか？」

「五月蠅い黙れ胸の事は言わないでくださいこの変態吸血鬼」

「なかなか毒舌だな君は！？ ちよつとした冗談じゃないか。そこまで本気で返されると悲し—— つ、あー悪かった。俺が悪かったから、その半眼でこっちを睨むのは止めてくれ。中々

に心臓に悪い」

「ふふふ、知ってますか双司さん？ 幼児体型の人間をバカにした
ら、呪いになって還ってくるんですよ？ ———— 主
に背中から刺される呪いで」

「————— やけに物理的な呪いだなオイ！？ そして幼児
体型と自爆しているぞ小夜」

だって、仕方ないじゃないですか。私にとって胸の大きさは死活
問題なんですよ？ 周りが巨乳ばかりだと、気も滅入ってくるん
ですよ。ああ、誰か私におっぱいプリース。

「しかし、女性というものは今も昔も胸の大きさにやけに拘るな。
なにか意味でもあるのか？」

「意味なんかありません。ただ、本能的に女性にとって、胸の悩み
とはつきものなのです。さつきから、よくわからないレポート読ん
でる双司さんはその辺りをもう少し理解して下さい」

難しい話だな。と、双司さんはタバコに火を灯しながら呟く。宙
を漂う紫煙を眺め、タバコって美味しいんですねー。

「そういえば双司さん、さつきから何を調べてるんですか？ 依頼
されてる翻訳は無かったと思いますけど」

「ん、コレか？ 先日来た依頼のレポートだな。とある神社の紛失
物の情報だよ」

ほら、と彼はこちらにコピー用紙の束を差し出して来る。どれど

れ。

火野神宮盗難物詳細

刀剣『火ノ迦具槌』

先日、我が方の神社に奉納されている刀剣『火ノ迦具槌』が何者かの手によって盗難された。

火を司る象徴とされる古刀。約四百年程前に、御神宮へ奉納され、以後宝剣として祭る。

また、この刀剣がかの伝承に記載されている『ヒノカグツチノカミ』との関係の真偽ははっきりしていない。当時の資料には、神の宿りし剣としか記述は無く、また、奉納元の神社の名称は記録が紛失している為不明である。

尚、事後当時の宝物庫の鍵は、何らかの方法で融解され壊されており、おそらくは犯人の手によるものと思われる。

「———なんですかコレ？」

「何って、依頼の盗難物の資料だが？ 全く、宝剣を盗まれるなんて馬鹿だろう。普通鍵だけならまだしも、結界位は張っておくべきだと思うがね」

「結界って……。また普通にオカルト用語が出てきましたけど、それって誰でも出来るものなんですか？」

「霊脈を持つ神職者なら、結界の一つ位展開出来ないただの落ちこぼれだよ。ある意味、基本中の基本な技術だからな」

はい、理解出来ませんつと。つまり、出来る人は出来るって事ですよね。

「つまり、依頼的には盗まれた刀剣の行方を捜せってことなんですかコレ？ 話を聞いてると、無理やり鍵を壊して盗んでいったのなら犯人は確実犯だつてことになりますね」

依頼としてきたのなら、その辺りが妥当だろう。まさか、犯人捕まえてくれっていう事はありませんと思いますし。

「惜しいな、残念ながら惜しいんだよ小夜。非常に悲しい事に、行方探しじゃなくて刀剣の奪還なんだ。ああ、メンドクサイ」

「えっ！ それって普通警察の領分でしょ。なんで双司さんの所にそんな依頼が来るんですか？」

搜索だけならまだしも、奪還とか完全に警察の仕事範囲である。少なくとも、探偵稼業でやる様な事柄じゃないです。素直に警察行けって言いたくなるような依頼だ。

「ああ、実はこの依頼川崎刑事が持ってきた依頼だね。報酬弾むから、そつちでやってくれたとさ。元々、依頼者側の神主も大げさにはしたくないらしい。刀剣自体が、世間に出れば国宝になっても可笑しくない代物とのことだ」

「丸投げですか。そもそも、あの刑事さん何でこんな依頼持ってきて

たんですか？」

「——オカルトはこっちの領分じゃない、だとさ。鍵を壊すだけの熱量持つてくるなら、普通にカナヅチなんかで壊した方がマシだろうだと。だが、この依頼自体があの人間の目に入ったこと自体が奇跡だと思うがな」

宝クジの一等を引き当てるくらいの確率という訳ですね。

「でも、引き受ける必要は無かったと思いますけど？」

「なに、あの人間には借りがあるんでね。借りっぱなしというのは癪に合わないんだ。それにある程度の情報はこちらに流してくれるらしい。まあ、流石に完全に情報が無いのはツライしな」

「——それであの半分くらい人間辞めてるような人の依頼受けちゃったんですか」

思わずため息を吐く。だって、オカルト関係あっても無くてもあの刑事さんなら物理鉄器に解決しそうですね。いや、絶対に何とか出来る。だって扉が開かないなら、扉ごと穴開けて進むような人です。行き先に障害物があれば、それが何であろうと笑いながら踏み潰して進む人だし。

「とりあえずだ。あの絶対に生まれてくる惑星間違えたような新人類の話はどうでもいいから、書庫から日本神話、——ヒノカグツチに関係のありそうな資料をあるだけ持ってきてくれ。後、火野神宮周辺の地形図と静岡の本宮秋波神社、東京の愛宕神社の資料もだ。送られてきた資料を見る限り、宝剣の存在を知っている関係者のいる神社はその辺りだからね。一応、調べてみて損は無いだろう」

「了解です。でもその前に、資料読む時はタバコの火は消してくださいね？ 危ないですから」

そう言つて、私は書庫へと足を向ける。さて、今日も双司さんのお手伝い頑張りますか。

「カオりん、アタシ思うの。どうして高校には給食が無いのかなつて。小学校の時に食べた揚げパンの味が懐かしいなー」

「それは小学校の時に給食のメニューが揚げパンの時に限って学校休まないといけない事態に陥る私に対するあてつけかしら？ もしそうなら、全力で今貴女が食べてる揚げパンを奪い取るけどそこるところどう？」

「揚げパンが出た日って、誰かが学校お休みしていたらあまりモノを狙おうと皆ハイエナみたいに群がるんだよねー。死して屍拾うもの無し」

「——その喧嘩、買った！！」

翌日、昼休みにじゃれ合う友人二人を眺めながら、私は自分の弁当

を突つつく。

結局、昨日は資料の数が膨大すぎて集めたのはいいが中々分類ごとにまとまらずに、後はこちらでやるという双司さんの言葉に甘えさせて貰って帰路についたのだった。

「揚げパンって、そんなに美味しいものですかねえ」

個人的には、自分の肉体力カロリーを無駄に増加させるだけの油の塊なのだが。

「小夜にゃん、揚げパンは素晴らしい食べ物だよ？ 一つ食べればその日一日分の行動カロリーは約束されたような物だし」

「や、それなら私お団子食べた方が燃費がいいです。揚げパンのあの脂っこさが、どうにも好きになれないですよねえ」

「ふふふ、小夜ちゃんまで揚げパン食べたことの無い私の敵に回るのね！ 一度でいいからどんなのか食べてみたいわよ！ ——ただ見ぬ揚げパン——！」

揚げパンって、コンビニにも売ってありませんでしたっけ？

「私が食べたいのは、給食みたいな出来たての揚げパンなの！ 一度でいいから食べてみたいの！ いっそ、こうなったら今から何処かの学校強襲して奪ってこようかしら……」

揚げパンごときで学校強襲するなと言いたい。

「仕方ないなあ。カオりん、ほら、アタシのタコさんウインナーあげるから少し冷静になりなよ。それに、どうせ強襲するなら給食セ

ンターの方じゃないかな？」

「——むしろ強襲から離れましょうよあなた達っ!？」

香織も頷きながらタコさんウインナーもぐもぐするんじゃない。

「あ、そういえば今日の朝にネットの掲示板見てたら、どつかの神社で宝物庫のものが盗まれたらしいよ? ——何が盗まれたかまでは書いてなかったけど」

「また唐突ですね、ネオン。というか、一体何の掲示板なんですかソレ」

ちよつと、先日双司さんの所にきた依頼に似ている気がする話題だ。いや、似ているじゃなくてヘタするとそのままだ。

「アタシの行きつけの心霊掲示板なんだけどねー。なんでも、倉庫の鍵が何かに溶かされたみたいにドロドロだったとか。聞いてるだけでも素晴らしくミステリーじゃない? だって鍵って基本的に鉄で出来てる訳だし、それを溶かそうとしたら最低でも融点である千五百三十五度の高熱を持ってこなくちゃいけない。でも、それだけの高熱を引きだすには、やっぱりそれだけの温度に耐えられるような発火設備が必要になる。ライターとかそんなちやちや物じゃなくて、製鉄とかに使うくらいの道具が必要。でも鉄は熱伝導性が大きいから、溶かすとなると融点温度異常の火力がなくちゃダメ。じゃあ、犯人は一体どんな方法で鍵を溶かしたのか? ——うん、まさしく謎だねー」

「私はそれだけの知識があるネオンが謎なんですけど!？」

鍵が溶かされてたって、ソレもう完全にあの依頼のことでしょう。掲示板恐ろしや。人の噂ってとんでもないですね。

「それって、所詮噂をネタに会話してるだけでしょ？ 私的にはパズな話題ね」

「あれ？ カオリンにしては珍しい意見だねー。普段はもうちょっと喰いついてくるのに」

「べつに、——ただ興味ないだけよ。ええっと、いったーねって？ そんなもの無くても私困らないし」

「そういえば香織って、結構な機械音痴でしたね。——テレビのリモコンの電池を交換するだけでも一苦勞なくらい」

「そういえばそうだったねー。普通、今時ボタン押すだけの操作とかにも苦勞するような人っている？」

「うっ、うるさいわね！ いいじゃない？ はいてく？ なんか使えなくたって！ 私は、文化を大切にする女なのよー！」

ハイテクも、文化だと思うのは私だけではないはずだ。

「とりあえず、二人とも早く食べ終わらないと昼休み終わっちゃういますよ？ 次は鬼禿げの英語ですし、遅れるとまたバケツ持ってグラウンド行軍ですね」

もう、あの自衛隊真っ青な掛け声マラソンは勘弁なのだ。二度と私はやりたくないんです。乙女にあんな掛け声させないでください本気で。

とりあえず、念のためにさっきの掲示板のアドレスをネオンに聞いておこう。そんなことを考えながら、私はお弁当の残りを一気に胃の中へと掻き込むのであった。

それは、古の創生の時代のお話。かつて地上に未だ神々が君臨し、支配していた時代の出来事。イザナギとイザナミの間に生れし炎の落とし子であるヒノカグツチノカミは、誕生した際に負わせた火傷のせいで、生みの母とも言えるイザナミを死亡させた。その後、怒り狂ったイザナギに十拳剣、——またの名を？天ノ羽々斬り？にて殺害される。その亡骸は火の子となり、そこから多くの神々を産み落としたとも言われる。

イザナミを失ったイザナギは、彼女に会いたいが為に覗く事を禁じられている黄泉の国へと足を踏み入れる。だが、そこで見つけたのは腐敗し変わり果てたイザナギの姿。

恐怖を抱いたイザナギは黄泉の国から逃げ出し、異界の穢れを落とすために禊ぎをした。この時、彼自身が望んで生みだした神、三貴子と呼ばれる三柱の神が誕生する。

アマテラスオオミカミ
太陽の神？天照大神？

ツクヨミノミコト
月と夜の神？月読命？

荒ぶる神？ 荒王ノ命？
スサノオノミコト

イザナギの身体の一部から生まれ落ちた三柱の神々は、イザナギに代わり誕生した世界を治めるようになる。これが、神生みと呼ばれた古事記の物語である。

●

「殺されたはずの？ ヒノカグツチ？ の名を冠する宝剣……か。火の無い所に煙は立たないと言うが、煙どころか火炎が立っているような気がするな」

書物を閉じながら呟く。口元に咥えるタバコの煙は、まるでこちらをあざ笑うかのように目の前で霧散し、消える。

今更だが、こんな依頼受けるものではない。だってそうだろう？ なにせ、俺は探偵だ。探偵とは事件に直接関わるものではない。本来は、情報蒐集を行いソレを提供することがスタンスなのである。まあ、俺の場合はその限りではないのだが――。

「――イザナギに殺されたヒノカグツチの灯火は、数多の神が誕生するための種子となった。だが、もしその火種の中にカグツチの魂が含まれていたなら。もし、カグツチの血を浴びた剣にその火種が入り込んでいたなら？」

決してありえない話ではない。魂移しの呪法は、神々にとっては最もなじみ深いモノだ。件の宝剣に、場合によっては神が宿っているもおかしくはない。そうになると。

「恐らく、マトモな事にはならないな。少なくとも、契約や盟約の補助も無しでは人の身に扱える代物ではない」

川崎刑事から提供された資料と、情報蒐集の為に飛ばしておいた式からの情報であらかたの犯人の目星は付いている。あの刀剣の存在を知る人間は、火野神宮の神主とその長女である巫女、本宮秋波神社の神主、そして愛宕神社の神主の四人だ。さらに、正確な安置場所とその侵入経路を正確に把握出来、事件の当時犯行を行動に移すことが可能なアリバイの無い人物。

「火野神宮神主の長女、火野火織」

だが、彼女は現在は実家には住んでおらず、海外へ留学中らしい。その為、正確な裏付けなどはとれなかったとのこと。まあ、常識的に考えて、海外から日本へ戻り、刀剣を盗み出してまた海外へ戻るなど不可能だ。まず、どうやって国外へ持ち出すかを考えなければならぬいしね。

「——だが、万が一の事も考えて探ってみるとするか」

そう呟き、いつの間にかフィルター部分まで吸ってしまったタバコを灰皿に押し込み、次のタバコを取り出そうとするが——。

「……最後の一本だったか」

仕方ない、調査の続きは追加のタバコを買ってきてからにしよう。ニコチンとタールの存在しない世界。人はそれを、——地獄と呼ぶ。

——神など存在しなかった、そんなフレーズが脳内をよぎる。
所詮神様なんて、人の造り出した空想の産物に過ぎなかったのだ。
神頼み、神の情け、お正月の参拝。合格祈願なんて、さようなら。

「あー、小夜にゃん？　いくらなんでも落ち込み過ぎだとアタシ思うなあ。いいじゃん、たかが英語の小テストの結果が悪くても」

「それは私に対する宣戦布告と思っていいんですかねネオン？　ハーフの貴女には分かりますまい！　何故、——人類はあんなミミズみたいな文字を理解出来るんでしょうか！？　それ以前に、なんでも英文って前から直訳させてくれないんですか！　私、地球が滅んでも納得出来ません」

「うーん、デフォとしか言いようがないなー。小夜にゃんつまりね、——全てはデフォなんだよ」

昼休み明けの五時間目に行われた英語の小テストの結果に打ちひしがれながら、放課後の帰路を辿っている現在。ああ、英語なんて嫌いだ。あんなもの、言葉じゃありません。

「そっいえば、カオりんはどうだったの？　小夜にゃんと同じで英語苦手だったと思うけど？」

そうでした。確か、香織も英語はダメだったはず。

「——えっ？ 嗚呼、アレね。……覚えてないわ」

「つまり白紙？ カオリん、いくらなんでもそれはマズいんじゃないかなー。補習で休日の予定が潰れるのは最悪だよー？」

「香織、調子悪いんですか？ なんか、昼間過ぎてからずっと上の空ですし」

どこか本日ばーっとしている香織に私は問う。話しかけてもどこか反応が鈍いし、なんか歩き方もフラフラとしてますし。

「大丈夫だよ小夜ちゃん、ちょっと疲れてるだけだから。ネオン、いくら調子が悪くてもそんなヘマはしないわよ？ ——補習くらい物理的に無かったことにするから」

いや、ダメでしょう。なんか発言が過激になってませんか？

「今日は早めに寝たらどうですか？ 明日は土曜ですし、ゆっくり休めるでしょう」

「そうだねー。無理は禁物だよ、カオリん？ 小夜にゃんの言うとおり、今日は早く休んで、次回の？チキチキ地下帝国お宝大発見？に備えるべきー！」

うん、私には理解出来ない単語が出てきたので、ネオンの発言はスルーしておこう。何だ地下帝国って。

「生憎と私は？地下帝国シリーズ？より？学校のトイレ。開けたら

先はパラダイスシリーズ？のほうが好きだからどうでもいいわ。でも、一応小夜ちゃんの言うとおり、今夜は早めに休もうかな」

「もう訳のわからないタイトルに突っ込む気はないですが、そうして下さい。心配しますからね」

うーん、疲れてる時って何が効くんでしょう？ 事務所に行ったときに、双司さんに聞いてみるとしますか。

「そうだな、疲れた時にはタンパク質とビタミンを取るのが一般的だ。だが、食欲なんかが無いなら、野菜をすり潰した雑炊なんかがいいな。市販の栄養ドリンクなどは一時的なドーピングみたいなモノなのでオススメはしないぞ？」

「そして双司さん、質問してから殆ど間も無く返答出来るボキャブラリーの秘密はなんなんですか？」

この料理好きの吸血鬼はなんなのだろうか。

「小夜、食は大事な文化だ。そしてそれは神々の時代から変わらないう文化。食を疎かにしてしまうと、その分一日の活力が低下してしまう。それに病は食から直せと言うだろう？ 健全な肉体には健全

な精神が宿り、健全な食事からは健全な肉体が生まれる。つまり、

—— 食事は大事だということだ」

「双司さん、絶対前に夕食放置したことを根に持ってますよね！？
あ、あれは仕方なかったじゃないですか！ 私完全に爆睡していた訳ですし！！」

「ははは、—— だが認めない」

あー、ほっぺ引つ張らないでください。伸びますう。伸びちゃいます。

「そ、そういえば依頼のほうは調査進んだんですか？ 昨日はあまり進展なかったですかど」

「あつたと言えはあつたし、無かつたと言えは無かつたな。いかんせん、情報が少なすぎて道筋が立たない。分かっていることといえは、犯人は真つ当な一般人じゃないってことくらいだ。恐らく、確証は持てないが魔術師だろうな」

「まじゅつし？ あの映画とか御伽話に出てくる？」

「そうだな、その魔術師だ。ちなみに映画やら御伽話なら俺も出てくるぞ？」

吸血鬼ですものね双司さん。

「魔術師というのは、小夜に言わせればオカルト染みた人間だな。人の身でかつて神々の残した神秘を行使し、また現代に残ったそれを管理する人間達だ。最も、その数は年々減って行っているみたい

だがね。現代は、魔術なんて代物を世の中が必要としていないのが一番の原因か」

つまりは、双司さんみたいな規格外な人たちですか。平然とビルからビルに飛び移ったり、蹴りで部屋の壁を崩壊させたり。

「念の為に言っておくが、魔術師というのはどこまでやっても所詮は人だ。神の力でも行使しないかぎり、小夜の考えてるようなビツクリ人間にはならないぞ？　——こら、何故そこで信じられないといった顔をする？」

「や、だって私の身近でそういった人の基準って双司さんや川崎刑事ですし」

「俺はともかく、川崎刑事は確かに異常だな。アレ、絶対に人間辞めてやがる」

「それには同意します。人外的な双司さんが言うと言得力ありますねえ」

「俺に言わせれば、その人外と平然と会話している君の方が不思議なんだがな」

失敬な。私はどこにでもいるような一般人の女子高生ですよ？

私は机の上に投げ出してあった資料のようなものを手に取る。恐らく、依頼関係の資料だろう。へえ、一番怪しいのは神主さんの娘さんですか。つまりは巫女さんな訳ですね。名前は、火野火織？　小学校じゃ苛められそうな名前です。ん？　巫女さんで力オリと言え——。

「そういえば、私の友達にも巫女さんでカオリって名前の子いるんですよ。ほら、最初話た具合が悪そうだって言った子です。前に言ってたんですけど、実家が神社らしいですよ？ 本人は、あんまり実家のことが好きじゃないみたいで話したがないんですけどね。秋山香織っていう子なんですけど――」

「待て小夜、？秋山？だと？」

私の言葉に、双司さんは鋭い眼つきでこちらを見る。えっ、私なにか言いました？

「火野、秋山……。小夜、その子の実家の神社の名前分かるか？」

「えっと、本人実家嫌いみたいなんで聞いたこと無いんですよ。それに、その話したのも四月くらいの話ですし」

「――そうか、ならいい。ああ、小夜。俺はこれから出かけてくる。恐らく、帰りは深夜回ると思うから君もそろそろ帰るといい。残念ながら、今日の賄い飯は無しだ」

「ちよっ、双司さん！？」

声と共に、双司さんは事務所飛び出す。私、どうすればいいんでしょうか？

とりあえず、私は戸締りとガスの元栓の確認をすることにした。ガス漏れなんかあると、大変なことになりますしね。

商店街を歩きながら手に取るのは携帯電話。そして、そのディスプレイには川崎刑事に無理を言って転送して貰った、火野、秋波、愛宕の家系図。いや、正確には親族図といったところか。国家の狗というものは、こういったものも簡単に手に入るの辺りから気に食わないものだ。

「記憶が正しければ、三家系のどこかにあの姓があつた筈だが……」

現代では、それほど姓というものは重要視されていないものであるが、かつては力のある貴族などしか姓を名乗ることが出来なかった。基本的に、人々が姓を持つのが一般的になったのは今から約二百年程前。つまり、豪族などの平安の貴族の血など持たない限り、家系図には名のみ記載される。現代の家系図はどうかは知らないが、太古から続く家系などは血筋の記録を残す為にそのあたりはマメに記載しているものだ。それは現代になっても同じ事。力が衰退しがちな現代では、外の血を受け入れ血を存続させる手法を取りがちである。その為、外の血を取り入れた事実が残るように、しっかりと記録しておくための記憶媒体。それが現在の家系図だ。

「——やはりか。まあ、このご時世純血を保っている一族が珍しいくらいだ。不思議ではないな」

そんな呟きと共に俺が眺めるのは、火野神宮の家系図。現在の神主にあたる人物の元へ嫁いだ家系の姓。

「そして海外留学というのは偽装か……。やれやれ、どういう事かねこれは」

ああ、タバコでも吸わないとやってられない。うん、ついでにコンビニに寄るとするか。

そう、コンビニのある方向へと足を向け、一歩踏み出そうとした時。

「———？」

肌を撫でるような違和感。周囲を見回すも、人気がない以外は特に異常らしきものは見当たらない。いや待て、なぜ人がいない？ 此処は商店街だ。少なくとも、一人くらい視界に入らなければおかしい。

「———っ！？ 人払いの結界か！？」

聴覚に届く音が軋む。キリ、キリ、キリ、キリ。まるで、黒板を掻きむしるような音と共に、目の前の視界が歪んでいく。

一度捻じれた視界は、今度は逆方向に湾曲を始め、その形を別形へと変貌させる。

「……驚いた。まさか、商店街なんかで忌闇の結界なんてものを使われるとはね」

ゆっくりと収縮していく歪みの先には、既に先ほどまで歩いていった商店街の風景は存在しない。今では珍しい木造建築と石瓦の街並み。普段踏みしめているコンクリートで舗装されたアスファルトの道路などではなく、まさに土をむき出しにされた簡素な歩道。それらは、まるで平安時代の貴族の屋敷を思い起こさせるような光景。

そして、俺は人工的に造られたと思われる、闇のように黒く濁った川に掛かる、木で出来たアーチ状の橋の上に立っていた。
空は、泥のように薄暗い雲に覆われている。

「『忌闇』の結界……。仕掛けたのは陰陽師か!？」

突如、闇が溶けたような川の水面が浮き上がる。そこから出てきたのは、五メートルはあろう巨大な黒い獣。かつて、鬼と呼ばれた存在が数体ほど浮かび上がって来る。

黒い鬼達は、こちらに向かって一斉に、その巨大な拳を振り落とす。それを、右手に見える建物まで跳躍することで回避する。

「人払いに忌闇、さらには鬼の式か。完全に俺を狙ったとしか思えない展開だな」

クシャリと、前髪を掻きあげる。クソッ、さっさとタバコ買っておけばよかった。まあ、とりあえず。

俺は拳を円を描くように振り、跳躍。屋敷の建物を足場にし、もう一度跳躍。狙うのは最も近い牛面鬼。それを見据え、体内の魔術方陣のギアを一気にトップへ。同時に、己の瞳が澄んだ青色へ輝く。さて、何処の誰かは知らないが俺に手を出した事を後悔してやろうか。

夕暮れ過ぎて日も完全に落ちてしまった現在、事務所を出た後私はいつもと比べて人通りの少ない商店街を歩いていた。いきなり飛び出して行った双司さんでも見つけられれば御の字なのだが、生憎とそれらしき影すら見つけられない。や、にしても人少なすぎですよ。

「ホントに双司さん何所に行っちゃったんですかね……。なんか、香織も関係しているみたいですし」

彼女の友人としては、色々心配なのです。普段の奇行見慣れているせいかもしれないが、何かやらかしてしまっただんじゃないですよ。ね？ って、あれは――。

「香織？」

視界の隅の方に見える桜色の髪。あんな独特な髪の色をしているのは、私は香織しか知らない。なにやら、キョロキョロと周囲を見渡しているようだ。

「あ、小夜ちゃん」

「香織、身体の調子は大丈夫なんですか？ もう夜の九時回ってますけど」

テコテコと、こちらに気がついて小走りでニコニコ笑いながら向かってくる彼女に問い掛ける。うん、顔色はそんなに悪くないですね。

「散歩だよー。体はもう大丈夫、家に帰って少し眠ったのが良かった」

たみたい♪ 小夜ちゃんこそ、こんな時間になにやってるの？」

あー、なんと説明したらいいものか。流石に、“自称吸血鬼のスーツ姿な男性探してます！”なんて言えないですし。

「ちよつと人探しですよ。まあ、見つからなかったら素直に帰宅する方向の気楽なものですけど」

このあたりが無難だろう。間違つてないですし。

「人探し……、奇遇だね！ 私也有人探してるんだ」

「香織も？ 待ち合わせか何かですか？」

そう聞くと、彼女はフルフルと首を横に振り。

「待ち合わせじゃないんだけどね、うーん数千年越しの再開？ みたいなものかな」

「——— なんですかソレ？ また変な雑誌でも読んだんじゃないですよ」

「雑誌というより歴史書だね。小夜ちゃんって、古事記とか読んだことがある？」

生憎、歴史はそんなに興味ないのです。

「その顔見ると無さそうだね。私的にはそこはいいんだけど、小夜ちゃん」

ふと、香織は真顔になり私を正面から見据える。 magari 美人だから、妙に迫力があります。

「このあたりで、スーツ着て髪がオールバックで目がネオンみたいに青い男見なかった？」

えーっと、なんだろう。香織が探している人物像が鮮明に脳裏に思い浮かぶのは。スーツでオールバックで目が青いって、完全に双司さんの事じゃないですかっ!？

「さつきからソイツのこと探してるんだけどね、中々見つからなくて……。この辺りで働いてるって情報手に入れたから、わざわざ探しに来ただけだ——」

「あー、香織？ あなた、双司さんと知り合いなんですか？」

私の中の一番の疑問を問いかける。だって、クラスメイトの友達があの自称吸血鬼を探してるなんて夢にも思いませんし。

「へえ、小夜ちゃんあの男のこと知ってるんだ？ そう、櫛名田姫じゃ飽き足らず、私の大事な友達である小夜ちゃんにまで手を出してるんだ……」

ふふふ、となんか香織は俯きながら黒いオーラを出し始める。怖い、普通に怖いですからっ! 香織落ち着いて——!？

「——えっ？」

ゆらりと、視界全体の空気が揺れる。それと同時に、肌にジワリと汗玉が滲むほどの熱を感じる。おかしい、今の季節にはあり得な

い温度上昇。少なくとも、十一月に体感していい気温ではない。すなわち、熱い。

「よし、こうなったら小夜ちゃんにも協力してもらおうかな。あの、大罪人をおびき出す為に――」

その後、香織が何て口にしていたのかは分からない。だって、気が付いたら私の意識は既にブラックアウトしていたのだから。

「鬼の肝吸いか……想像しただけでマズそうだな」

目の前の、鬼だった物の残骸を眺めながら呟く。こいつらの体液でスーツはグショグショだ。クリーニングで、この生臭い臭いも落ちてくれるといいんだが……。

パキン、とガラスが割れるような音を立て、平安時代を思わせていた結界が消える。その後視界に広がったのは先ほどまでいた商店街。現在時刻を見てみると午後の十時過ぎ。おそらく、小夜も既に帰ってしまっているだろう。

「あら、残念ながら小夜ちゃんは帰ってないわよ？　だって、あなたが何時までもあの程度の雑魚に構っているから……私が攫っちゃった」

突如、背後から届く声。その気配に気が付けなかった平和ボケした自分に、内心舌打ちしながらも念のために後方を振り返りながらそこから距離をとる。

「そんなに離れなくてもいいのに。それとも、背後を取られたのはそんなに意外かしら？」

声を発する人物、それは――。

「――巨乳の女子高生だとっ！？」

春に咲き誇る桜の花びらを連想させるような桜色の髪、小夜と同じデザインの制服を身に纏い、その上からでも分かるほどの胸囲を持った少女。

「――って、初見で第一声がソレってなによ！？ あんたソレでも元神様っ！？ それに、私には秋山香織って名前があるんだけど？」

「神でもなんでも、女性の神秘には皆懂れるものだ……。それは、俺でも然り！！」

「自信満々に言うなっ！ ああ、もう！ 結構シリアスな展開でいこうと思ってたのに何でこうなるの――！？」

巨乳少女が何か喚いているが、個人的にはどうでもいい。とりあえず。

「小夜を攫ったと言ったが、何のつもりだ？ 俺は君みたいな人物

は知らないが……」

「あ、あなたが知らなくても私は用があるの！！ 簡潔に言うわ、—— 出雲の地 “八雲” にて待ってる。そこに、小夜ちゃんもいるわ。そして、そこに来るまでに貴方が殺した嫁のことを思い出して来なさい。でないと……何も分らずに死ぬわよ？」

そう言い残し、彼女は塵気楼を纏わせながら姿を消す。去り際に、少しばかり疲れたような顔をしていたのは気のせいだろう。しかし、

「櫛名田姫のこと……ね。ああ、そういえば彼女が死んだ時もこの時期辺りだったか」

独り虚空に向かつて呟く。まあ、依頼の件もまとめて解決出来そうなので構わないか。

フワリと冷たく、そして柔らかい何かが私の頬を撫でる。えーつと私って何してたんですっけ？ 確か双司さん追いかけて商店街で香織に会ったあと——。

「香織！？」

ばやけていた思考を振り払いながら、自分の身体を跳ね起こす。
何故かは知らないが地面で寝ていたせいで、背中から身体の節々までが痛い。耳を澄ませば、ギギギッと関節が軋む音が聞こえてきそうだ。って――。

「――此处、何処ですか？」

周囲を見ま渡してみれば、何処までも広がるように存在する小高い丘の上の草原。空には一面に星達が燦然と輝き、見方によっては地上の人々をあざ笑うかの様にも見える。周囲には雑音など一切存在せず、内界と外界を仕切るような静寂が辺りを支配している。

「あ、小夜ちゃん気がついた？」

ふと、聞きなれた友人の声が耳に届く。

「――香織あなた……」

私は声の主――秋山香織の方へと振り向き、声を発する。

「とりあえず、言いたいことは色々ありますが――、此処どこですか？」

「開口一番が場所の確認って……、小夜ちゃん緩いなあ」

む、緩いってなんですか。現状確認は大切なことですよ。

「普通さ、目が覚めて見知らぬ場所にいたらもう少し慌てないかな？ 危機感足りないよ？」

「それは問題ないですよ。私を此処に連れてきたのは香織だつてことは声が聞こえた時点で把握してましたから、後はその過程を確認するだけです。仮に、あなたが何か目的があつて私を此処に連れて来たのなら、既にやってると思いますし。だって、貴方まどろっこしいの嫌いでしょ？」

「うん、私はシンプルなのが好き——小夜ちゃん正解♪ でも、半分不正解。小夜ちゃんを此処に連れてきた所でその目的の一つは達成されてるの。後はあの男が来るのを待てばいいんだから」

あの男——、この場合は双司さんしかいないですね。

「あなた、双司さんと知り合いなんですか？ 私が気を失う前も探してみたいなこと言つてましたけど」

「双司？ 今そんな名前乗ってるのアイツ？ ふーん、つまり小夜ちゃんってあの男の本名知らないんだ」

本名ってなんですか？ まあ、吸血鬼とか名乗ってる双司さんが真つ当じゃないのは今に始まつたことじゃないですが。

「で、双司さんの本名ってなんですか？ あ、やっぱりいいです。こついうのって本人から聞かないとダメですし」

「……小夜ちゃん、危機感ないねえ。もうちょっと警戒してもいいんじゃない？ 色々と」

「香織、人生常識を持ちながら大らかに過ごすのが一番です。それに私に危機感つて——、関係ないことですよ」

——だって、私って壊れてますしね。

声には出さず、心の中で呟く。言葉の途中に黙った私を香織は怪訝な顔をして見つめているが、あえて無視をする。

「——なんからしくないなあ、小夜ちゃん。普段なら、もうちょっと突っ込み入り混せて狼狽するのに」

「多分、あなたの雰囲気にてられてるんですよ。で、私をこんなところに拉致してきた理由はなんですか？」

「うん、そういう率直に核心突いてくるところは普段の小夜ちゃんだね。それじゃ、理由を教えてあげるよ」

そういうと、香織は空を見上げ瞳を閉じる。その光景はまるで一枚絵画のようだ。そして、息を一息。

「私の目的はね、小夜ちゃんが双司って呼んでる男を殺すことだよ」

そう、彼女は告げた。

「あー、香織？ 多分それ無理ですよ？」

とりあえずダメ出しをしとく。だって、何時ぞやの桜の化け物を素手で殴り飛ばすキチガイを殺せる人類なんて、存在すると思いません。

「あの、小夜ちゃん。いきなりダメ出しはないんじゃないかな？」

私の返答が予想外だったのか、なんか眉を潜めて聞き返してくる。や、だってですね。

「現実見ましようよ。あの人普段は結構ボケてますけど、根っこの部分は明らかに人間的な思考皆無なんですよ？ 自分でも完全に人外宣言しちゃってるんですから、正直無理だと思えますよ？」

「む、まあ普通の人間なら無理だろうけど私は別だよ。私はね、――魔法使いなんだよ」

「つまり、大人になるまで夢を忘れなかった自宅警備員になれる職業ですか」

「えっ！ ちょっと何か凄まじく生温かい目で見つめられてるんですけどっ？！ 小夜ちゃんその目やめてーっ！？」

香織、妄想ならもう少しマシな言い分あるでしょ。現実問題、そんなこと言われても今時誰も信じませんよ？

「本当だもん！ そんな完全に信じてませんよ私って目しないで小夜ちゃんっ！
！」

「そうだぞ小夜。以前魔術について説明したことがあっただろう。つまり、魔法使いは存在する。まあ、正確には魔術師なんだが」

ん？ 今なんかどっかで聞いたニヒルな男性の声が聞こえた様な……。

「しかし、拉致されたのに中々どうして平気そうだな小夜。歪んでいるのか肝が据わっているのか……」

「いきなり出てきて酷い言い草ですね双司さん。どうせなら囚われのお姫様らしく、ブルブルと怯えていた方がよかったですか？」

「いや、元気そうでなによりだ。しかしどうせなら、縄で縛られていくくらいの演出は欲しかったところだな。――技術不足だぞ？」

秋山香織

何時の間にやら、私たちのすぐ側で胡坐を掻きながらタバコを吹かす双司さん。ほんと、何時からいたんですか。香織なんて固まってるし。

「何時から居たんだったって顔をしているな？ 大体小夜が目覚める少し前くらいからか。」

中々面白いやりとりを見せてもらったよ

私的にはごくごく普通なやりとりをしていたつもりなんですけど。

「で、小夜を攫った誘拐犯及び宝剣強奪容疑者、秋山香織。小夜や櫛名田姫の名前を使いこんなところに呼びだした用件はなんだ？」

櫛名田姫とは誰のことかは分からないが、やはり香織は双司さん呼び出したかったのか。

「――簡単よ、貴方に死んで欲しいの。この私の手によってね！」

彼女の立つ大地が燃ゆる。草原に生える雑草の類は一瞬でその形を崩壊させ、炭と化す。その彼女の姿はまるで業火の魔女。触れるものの全てを灰塵へと返す、灼熱の人工太陽。

「ふむ、君に恨みを買った覚えはないんだがね巨乳女子高生。個人的には、君が俺と櫛名田姫の間の何を知っているのかを聞きたいところなんだが？」

双司さんは言葉と共に立ち上がり、正面から香織を見据える。香織が炎出しているところを見ても特に様子が変わったように見えないのは、彼の中でソレが予想出来た事柄だからなのだろうか。

「あら、それは貴方が一番良く知ってるんじゃないかしら？ 私の魔力の気質を読めばたやすく分かるはずよ。三貴子の一柱さん♪」

香織はそう言っ、火の粉を散らしながら右手を水平に振りぬく。その右手には、何処から取り出したのか、刀身がほんのりと紅に染まる日本刀が握られていた。

「——火ノ迦具鎚か。ふむ、やはり君が盗みだしたというわけか。それにこの魔力……どうやら色々と聞きださないといけないようだ」

「正確にはブラフよ、ソレ。火野神宮は元々私の父の実家、今は母方の姓を名乗ってるけど、私の実家でもあるの。まあ、その物言いだと貴方もそこまでは気がついていた様だから私の行動と照らし合わせてみれば正解が分かるんじゃない？」

「つまり……、依頼自体がそもその罠のようなもので、実際は全員グルだったって訳か。俺を動かせやすくする為に——」

「——そういうこと♪そして火野一族の総力を掛けて育てられた私に与えられた任務は、この神の宿りし宝剣を使い我らの先祖の仇を討つこと。——櫛名田姫の仇たる貴方、スサノオノツミコトをね——」

瞬間、再び周囲を火炎が埋め尽くした。

視界には爆炎。その熱量はまるで神代の時代に降臨した炎神の样いや、これは神の炎そのものなのか。触媒に使っているであろう火ノ迦具鎚から巻き起こるソレは、間違いなく古の神炎そのもの。それは触れるものを完膚無きまでに昇華し、万物を焼き尽くす炎塵の顎。完全に、人の身には過ぎた力だ。

—— 単一概念付加 “我が拳ハ大氣ヲ穿ツ”

即時に拳への概念付加。概念とは世界の本質。物事の存在する意味たる象徴的な事柄。 “神聖なる青” たるこの身のみに許された、法則を操作する為の倫理能力。この瞬間、己の拳は大氣すらも穿つ力を得る——！！

「—— 甘いつ——！」

己に迫っていた火炎が四散する。直下型術式から誘導式に切り替えたか。

「術者としての腕は中々のものだな秋山香織。だからこそ問う、君は俺の名を何と呼んだっ!?」

四方から追尾してくる火炎の内、先方のものを身体を振りながら回避。その後、即座に拳を振り上げ残りのものを大気ごと撃ち落とす。散りゆく火の粉を視界に収めながら跳躍。こちらに向かい刀を振り下ろそうとしている彼女に向かって、下半身の捻りを加えた蹴りを打ち放つ。

「聞こえなかったのならもう一度言ってやるわよ、スサノオノミコト！！ かつて高天原にて騒乱を起こし、地にては八俣ノ大蛇を仕留めた荒ぶる神。そして我らが先祖たる櫛名田姫の仇っ！！」

シャン、と宙を切り裂く火ノ迦具鎚。ちっ、せめて刀の力に振り回されているだけならいいものを、使用者である彼女自身の力量も相まって非常にやりにくい。それに。

「櫛名田姫の仇って何の話だっ！ そもそも、彼女は稲穂を司る水の巫女だった筈だ。火ノ迦具鎚が扱える君とは、明らかに属性が合わないぞ！？」

「属性なんて努力しだいで何とでもなるわよ。なんなら、水の術式でも使ってあげましょうか？」

秋山香織の言葉と共に、火炎の合間を縫うように球状の無数の流水が生み出される。本来であれば蒸発してもおかしくないソレは、まるで周囲の熱の影響を受けていないかの如く極回転。非常識な。

「よくもまあ、反属性の術式を同時展開出来るものだな。俗に言う、天才というやつか？」

「私の努力をその一言で澄まさないで欲しいわね。それでも、小さいころから修業してたんだから。それにコレは貴方を殺す為に千年

の歳月をかけて組み上げられた相克の秘術。誰もが扱えるものではないわ」

それでも、人の身でありながらただかたか十七年で習得出来るのは天才と称しても問題はないだろう。ほぼ無限の時間をほぼ無限の時間を持つ吸血種でさえ、同時反属性展開なんざ出来る存在はごく一握りである。

「しかし、それが俺のことを知っていることには繋がらないな。俺は一度も自分のことをスサノオだと名乗った覚えはないが？」

「そんなの関係ないわよ。私の炎をどうやって弾いたのかは知らないけど、神炎をどうにか出来る時点で貴方はスサノオノミコトである可能性は高い。人間やこれらの妖程度の魂の格ならとつくに消滅してるしね」

「俺が聞きたいのは、どうやってそこまで俺の居場所まで調べるこ
とが出来たのかって事なんだがね。いや、むしろどうやって俺の存在を知ったか……だな」

「さあ？ 私は神宮から教えて貰っただけだから。私細かい話は嫌いだから、——そろそろ死んでくれる？」

と、見る時と場所を弁えれば可愛く見れるであろう微笑で小首を傾げる彼女。だが、現状ではそれは死刑囚に対する冷徹な笑み。そして、視界を炎と水の斬撃が埋め尽くした。

まるで、ガス爆発が起こったかのような轟音。無数の蛇のように荒ぶる炎は、獲物を食らう獣の如く大地を這いずりまわる。

「双司……さん？」

声を発するも火炎の向こうから返事は無い。あるのは灰へと還る草花と、熱量に耐え切れず融解している岩石だけだ。

「これで終わりね。死体が残ってたら念のために灰にしなきゃね」

その惨状を作りだした人物——香織は刀を肩に担ぎながら、先ほど双司さんがいたであろう場所へと視線を向けている。

「香織……あなた本当に？」

——双司さんを殺したんですか？
そこまでは言葉に出さない。それを口にしてしまったら、彼の死を認めたことと同じになってしまうから。

「うん、見たところ欠片も残ってないみたいだね。正直、拍子抜けだけど」

バサツと、香織は手で後髪を風に乗せるように払う。

「小夜ちゃん、そんな悲しそうな顔しないでよ。アイツはこうなつて当然の存在だったんだよ？ あの男——スサノオノミコトは自分の妻をその手で殺したんだから」

かの日本神話の神様の一人であるスサノオノミコト。香織は、双司さんがその人物だという。そして、彼が自分の奥さんをその手で殺害したと。

「小夜ちゃんは、あの男のこと結構気に入っていたみたいだけどそれは騙されてるんだだけ。あの男はかつては天と地を荒らしまわった暴君。本来であれば、とつくに死んで良かった筈の存在だよ」

沸々と、胸に湧き上がる嫌悪感。

「——なんですかソレ。それじゃまるで、双司さんは死んで当然みたいな言い方じゃないですか……」

頭の中に血が昇って行くのが分かる。香織、あなたは言葉を間違えましたね。

「そうだよ？ 元々数千年前にアイツは死ぬべきだったんだから。——それが、どうかしたの？」

もう、無理だ。

私は未だプスプス煙を上げる大地を踏みしめ、香織の正面へと歩いて行く。そんな私の行動に彼女はキョトンとした表情をしているが——。

「香織、先に謝つときます。——ゴメンナサイ」

バチン、と肌を引く叩く音。発生源は私の掌と香織の頬。

「……小夜ちゃん？」

呆然と、何が起こったのか理解できないといった表情で私を見つめる香織。もうね、我慢できなかったんです。

「香織、死んでいい人なんてこの世に存在しないんです。それがたとえ極悪人であつても、人であるかぎり生きていていいんです。そして、誰にもその命を奪う権利なんて持つてないんですよ」

そして、自分の命を奪う権利を持つのは自分だけだ。

「えっ、どうして、どうしてそんなこと言うの？　ねえ、それじゃあ私がここにいる意味がないじゃない。ねえ、私は言われた通り執行したただだよ？」

「誰に言われたか知りませんが、人に言われてやっている時点で意味はありませんよ」

私の言葉に、香織は俯きながら小さく肩を揺らす。彼女なりの事情というものがあるのだろうが、そんなの知ったことではない。私は、人の命を本人以外が奪うという行為が許せないだけなのだ。

「小夜ちゃん、私は——っ」

突如、草原に残っていた火炎を掻き消す程の豪風が吹き荒れる。そして、それに合わせたように天に昇る蒼海の月。

「——うそ、小型の太陽に匹敵する程の熱量だったのにつ！？」

ゆらりと、陽炎の奥に佇む男性の姿。ああ、よかった。無事でしたか。

「秋山香織、ここからは本気で相手しよう。今代の？神聖なる青？に牙を剥いたことを、後悔するといい」

そこにはこちらを見据える様に、青き瞳の吸血鬼が悠然と佇んでいた。

●

彼は呟く。世界の書へアクセス。現行概念をサーチ、ロード、自己の肉体ヘインストール。強化、硬化概念を肉体へ、耐火、耐水概念を上書き。魔術方陣へ文章概念を導入。？我ガ拳八空ヲモ穿ツ？我レガ振ウルモノ八万物ヲ断ツ刃ナリ？

言葉の意味は分らないが、香織でいう魔術みたいなものなのだろう。

「さて、待たせたな。ああ、小夜は下がっていてくれ。少しばかり派手になるだろうからな」

双司さんはそう言ってシャツのボタンを緩める。そんな彼の様子をまさに呆然と香織は眺めている。そんなに意外だったんですかね？

「なんで……、なんで生きてるのよ。いくら神でも、火ノ迦具鎚の力を借りた炎を受けて無事な筈が——」

「秋山香織、君は技術は一流だが、戦闘者としては二流だな。相手の言動から言葉の意味を推理し理解しなければ、ただ力に溺れるだけの愚者だ。君、？神聖なる青？という言葉に聞き覚えは？」

「——神聖なる青？ たしか……世界を構成する要素の化身、原色を名乗ることを許された唯一の存在……だったかしら。まさか、貴方がその？青？だとも？ 青は正確にその存在を確認されたことのない伝説上の産物よ」

「その固定概念が愚かだな。この世にありえないものなんて存在しない。全ては視覚に収め、感覚を受ける本人が信じなければ物事というものは成立しない。あるがままを感じ、視ることを覚えるべきだな」

彼は軽く腕を振るい、そう言い放つ。拳動の度に暴風が吹き荒れ、この一帯の大气を揺るがしている。その姿はまさに荒ぶる王。神々の時代に君臨した、闘争の神の再臨なり。

「では、ケリをつけるか」

双司さんの言葉と共に、拳と刃がこすれ合う。

「——織るは火糸、螺旋を描くは紅灯台……！」

紡がれる香織の言葉。それと共に生み出されるのは、糸の様な炎で構築された円柱。獣が襟首を傾げる様に、ソレは双司さんの首元めがけて襲いかかる。だが。

「甘いつ！ 空間概念？ベクトル法則ハ逆転スル？……！」

グニヤリと、彼の周囲の空間が湾曲。そして炎がそれに触れた瞬間、紅蓮の円柱は反転し香織へと向かっていく。彼女は驚きながらもソレを右方へ跳躍することで回避。

「今……何をしたの？」

「簡単なことだ。俺の周囲の空間のベクトルを逆転させただけだが」

「空間制御……いや、ありえないっ！空間制御どころかそれは世界の法則に干渉するレベルの技法よ。いくら貴方が古神の一人だから
つて——」

「君はもう少し人の話を聞くべきだぞ？ 現在の俺は世界の化身。
天上の青い月が姿を見せている限り、この世界の法則は我が手の内
だ。まあ、あまり長時間は扱えない力なんだがね」

——さて、覚悟はいいか？

信託のように、彼は香織に告げる。つて、双司さん香織を！？
彼の拳に周囲の大气が渦を巻きながら収縮。その様はまるで小型
の台風だ。

「っ！？」

繰り出されるであろう一撃を撃ち落とすかの如く彼女も刀を振り
上げるが——。

その瞬間、神の拳は振り落とされた。

パキンッと金属が砕けたような音が響く。眼前には、草原に仰向けに倒れた秋山香織の顔。その距離は、トクン、トクンと彼女の心臓の音が耳に届く程だ。

「――何故外したの？」

彼女は俺に問いかける。その視線は、振り下ろした己の右の拳。そこには、刀身だった鋼を散りばめ、その中央から砕けた火ノ迦具鎚の姿。

「――何故外したの？」

秋山香織は再び俺に問いかける。何故、外したか……か。

「別に俺は外したつもりでは無いんだがな。俺は元々、その刀を狙ったつもりだが？」

「それこそ何故？ 貴方なら、今の一撃で私を殺すことだって出来た筈でしょ？」

言葉を交わす距離は恋人の語らい。だが、彼女は疑問の方が強いのか、それともそんなことを考えている余裕がないのか平然と言葉を紡ぐ。まあ、確かに今の一撃で決着をつけることは出来たが。強いて言うなら――。

「――君を殺すと小夜が悲しむ」

ゴクリと息をのむ気配。目の前の彼女が何を思っているかは分からないが、理由を挙げればそれしか該当しない。秋月小夜という俺にとって興味深い人間の友人、それだけで彼女を殺さない理由には十分である。

「いいの？ 私はまた確実に貴方を狙うわよ」

「そこに関しては御免被りたいのだがね。まあ、少しばかり話してもしようか」

そう言つて、俺は彼女から身を離し立ち上がる。さて、そろそろ小夜の様子も確認しなければ――？

「――小夜？ お前は何故そんな不機嫌なような顔でこちらを見ているんだ？」

じーっと、何か不満そうな目でこちらを見ている少女。いや、だから何故そんな目でこちらを見る。

「別に、なんでもありませんよ。ただ、双司さんと香織の顔の距離がちよっと近すぎやしないかなーとか思ってただけです」

その何が問題あるんだろうか。素直に疑問が浮かぶ。うん、全く分からん。おそらく女心というものだろうが、生憎さま俺には昔っから無縁のモノなのである。

「まあ、小夜はなんだかんだで元気そうなので置いておこう。秋山香織、まず君が知っている限りの俺の情報を教えてくれ。そこから知らねば何も始まらん」

視線を、小夜から秋山香織へと移しかえる。彼女の言う先祖の仇とはなんなのか？ それを知ることが、現在俺が取るべき最善の行動だ。

さて、色々と答え合わせをしようか。

私は浅見屋双司という名の男の質問の真意を測りかねている。私
が知っていることですか？ それはすなわちこの男が過去に犯し
た罪の事。

「どうした、先ほどからひたすら俺に罵倒を浴びせているんだ。今
更黙りこむ理由はないだろう？」

何時の間に取り出したのか、口先にタバコを咥え火をともしなが
ら私に問いかける男を見る。いいじゃないの。ここで全てぶちまけ
て、小夜ちゃんも二度とこいつに近付こうと思わないようにしてや
るんだから。

「いいわ、話してあげる。数千年前、貴方は高天原から地へと降り
立ち、八俣ノ大蛇を打ち取る報酬として蛇の生贄になる筈だった稲
穂の水巫女を妻に迎えた。それが私たちの一族の先祖である櫛名田
姫よ。その後、あなたはこの出雲の地に八雲という宮殿を造り安泰

する。だけどそれからしばらくした後で、高天原へ戻ってこないスサノオに怒りを切らした天照大神八雲を襲撃される。その時、貴方は滅んでいく八雲をしり目に逃げ出し、しまいには妻である櫛名田姫を身代わりにして天照の追撃を逃げ延びた軟弱ものよっ！！」

彼女——櫛名田姫を祖に持つ火野の一族は、その事実を知らされた時当然の如く激怒した。そして、それと同時にスサノオノミコトが現在でも何らかの方法で生き続けているという情報を得た当時の火野の一族は、彼に先祖の復讐を誓った。幼い頃からその話を聞かされ、魔術の訓練を受け、代々その為に技術を磨くことを強制されていた一族に生まれ、自分の時間——実家意外の外の世界に触れることの出来なかった私は、スサノオノミコトさえ殺せばこの数千年の物語に終止符を打てると思った。そうすれば、私は実家に束縛されずに自由に生きることが出来る。もっと、自分の好きなことが出来る。故に、スサノオを発見したと、その討伐指令を受けた時には喚起したものだ。

「それが、君の知る真実か？」

男は澄ました顔で、相変わらずタバコを吹かしながら私に問いかける。ええ、そうよ。貴方の裏切りの記録。己の欲望に忠実であった、荒ノ王の正史とは異なる事実よ。

「だとしたら——、勘違いも腹立たしいな」

「——なんですって？」

「勘違いも腹立たしいと言ったんだ。何処のだれだか知らないが、よくもまあここまで歴史を無茶苦茶に改ざんしてくれたものだ」

改ざんとは何をいつているのか？ それは私にとっての真実が偽りであることほかならない。

「少なくとも、俺は彼女を殺した記憶はないさ。八雲崩壊の件は事実だが、その時には彼女は病で亡くなっていたよ。まあ、彼女の病を治療出来なかったことを考えればある意味で俺が殺したようなものだがね」

まるで世間話をするような気軽さで、男は言葉を紡ぐ。――言葉は出ない。言葉をだせる勇氣は無い。だって、男の言葉が真実ならば私のやったことは……。

「さて、秋山香織。君は――君たちの一族は一体誰にその情報を聞かされたんだ？ 第一、彼女には血縁者が存在しなかったのに、何故その子孫が存在しているんだ？」

「私は知らないわよ。元々、大昔のご先祖さまが残した書物に代々したがってただけだし。お爺様なら何か知ってるかもしれないけど……」

私はどうすればいいのか。もし、彼の言っていることが本当ならば私は勘違いで小夜ちゃんすらも巻き込んでコイツを襲ったことになる。それは間違いなく、私の美学に反することだ。そして、矛盾を抱えたままコイツを狙い続けるほど私は愚かではない。一回負けちゃったし。

「あの一、いい感じに忘れ去られてる私がすいません」

ふと、少し離れたところで私たちの様子を傍観していた小夜ちゃんの声が耳に届く。えっと、決して忘れてたわけじゃないんだよ？

「なんだ小夜？　どうかしたのか」

「いやですね、さっき双司さんがへし折った香織の刀なんですけど……。——いつの間にか破片ごとどっか消えちゃってるんですよね」

——はっ？

「——マズイっ！！」

言葉と共に浅見屋双司はこちらに歩み寄り、——私を右腕の中へ抱きかかえた。

「ちよっ！？　いきなり何すんのよっ、てっ何処触ってっ！？」

手、胸に当たってるからっ！？　そんな私の叫びなど耳に届かないのか、今度はポケーっとしている小夜ちゃんを左腕の中へ。

「双司さんっ！？」

「跳ぶぞ！　振り落とされるなよ！？」

瞬間、それまでいた丘という地上が、紅蓮の焰と爆音に包み込まれた。

空に溶ける紅蓮の花弁。眼球を焼き尽くすような高熱と共に、その欠片は故意的な蜃気楼を発生する。

「ちょっと、アンタこれ着地のこと考えてるのっ!？」

「うわー、空って本当に跳べるものなんですね」

小脇に抱えている秋山香織が何か喚いているが無視。あの状況じゃ仕方ないだろう。あと小夜、お前結構余裕あるなあ。しかし。

「まいった。まさか、レプリカじゃなくてオリジナルだったとは……」

今更だが火乃火具鎚を壊すんじゃないかな。な。

「秋山香織、転移術は使えるか!？」

「もう少し落ち着いた状態なら出来ないこともないけど、こんな状態じゃ無理よ。最悪、座標固定間違えて空間の隙間に閉じ込められるかも……」

『転移術』は、空間と空間を繋ぐ呪術だ。点と点を、座標と座標を繋ぐことで転移する。ただ、座標を指定する時に、世界法則を三次元から二次元へと観測し直して、再び三次元へと結果を反映させなければならぬ。

例えると、新しいプログラムを頭の中だけで造り上げて、その上で

完成したプログラムを別のプログラムに手書きで上書きするような物だ。

そんな複雑なコトをこんな状況で出来る程、人は複雑な思考回路は持ち合わせていない。

そもそも、空間系統の魔術は奇跡に分類される高等魔術。これは、本来は三次元の法則に乗っ取った魔術特性のみ、人間は持ち合わせているからである。

「——仕方ない、突っ込むか」

「はっ？」

「えっ？」

魔術方陣へ魔力をフルロード。？青？の能力を使用し、世界の概念にアクセス、検索、引き出し、解放。

「多重概念付加？水剋火？？重力制御？を？秋月小夜？？秋山香織？？浅見屋双司？へ付加！！」

同時に、宙に大気を収縮させ足場を作り己の身体を大地へと蹴り飛ばす。未だ燃え盛る焰を掻き消しながら着地。

「アンタ無茶にも程があるわよ！いくら概念加護があっても、この熱量じゃ五分持てばいいほうよ！？」

「空が飛べないんじゃないだろう？それに——」

——五分以内にこの原因を駆除すればいいんだろう？

俺の言葉に二人の少女は小さく肩を震わす。ふむ、何か妙なことも言っただろうか？

「そ、それで双司さんはどうするんですか？」

そうだな、まあ、やることと言えば。

「元凶の？業火の神？を叩き潰してくる。秋山香織、小夜のこと頼んだぞ？」

そうして俺は踵を返し、最も熱量の高い場所へ向けて駆ける。さて、さっさと終わらせるとするか。

私——秋山香織は、正直のところ浅見屋双司という人物を見過っていた。いくら古の神々の人柱といえど、所詮は過去の人。過去から現代まで神秘の探究を続けた、現代の魔術師にとっては敵ではない——そう思っていた。

「あれ……、本当に人類？」

先ほどの、彼の言葉を耳にした時に身体中を走った衝動。背筋からジワリと、まるで生温かい舌がなぞってくるような嫌悪感。本能

的に思う、——アレは決して人間の敵う相手じゃない。蟻が戦車に敵わないように、ライオンが銃に敵わないように、そんな絶対的な戦力差。それを、私はたった今この肌で感じ取った。

「小夜ちゃん……、あなたアイツが怖くないの？」

「えっと、怖いって何がですか？　まあ、さっきの言葉には驚きましたけど」

——本気？

「確かに私みたいな一般人にとっては理解しがたいくらいの運動能力ありますけど、双司さんって基本人畜無害を決め込んでるみたいですから大丈夫ですよ？」

「いや、どこにあんな反則級の人畜無害がいるのっ！？　小夜ちゃんアイツに洗脳されたりしてないよね？」

「それこそ大丈夫です。だって、私と双司さんは契約者ですから。それに浅見屋探偵事務所のお財布は今では私が握ってますし♪」

と、ニコニコと笑顔で仰る小夜ちゃん。可愛いけど微妙に聞き逃せない発言をしているのは気のせいだろうか？

「にしても……やっぱり暑いですね」

額にポツポツ汗を滲ませながら、小夜ちゃんは言葉を発する。たしかに、アイツの流水加護があるとはいえ、これは流石に熱い。気温的に感覚では大体四十度近いだろうか。私一人なら問題は無いが――。

「基盤は地下水脈を使つて、精霊加護は——この熱量じゃ期待できない。仕方ない、アイツの流水加護を使つしかないわね」

呟き、私は己の魔術を発現させる為の言霊を紡ぐ。魔術に最も大事なのは言霊だ。言葉に表すことで世界に問いかけ、己の内に刻まれた魔術方陣を起動させ、異法を持つて神秘を現実には織りなす——

——！！

「我が紡ぐは水膜ノ檻。脈動せよ、描くは水滴の陣。いずるは鎮めの揺り笠」

生じる現象は不可視の水膜。それは結界の一種であり、効力は単純。ただ、外気と内気を分断するだけの術式だ。外界と内界を遮断し、結界内の気温を常温まで変化させる。簡単に言えば、簡易版クーラーである。

「——小夜ちゃん？」

ふと、ポケーっとこちらを見つめる小夜ちゃん。もしかして、まだ暑いのかな？

「や、香織って本当に魔術師だったんですね……」

——ああ、そういえばこの心底不思議そうに自分を見上げる少女の前では、私は今まで一般人だったんだ。

思い出したように、私は、きゅうつとスカートの端を握りしめる。どうだろうか？　いくらアイツをおびき出す為とはいえ、友人を巻き込んだ私をこの子は軽蔑するだろうか。それとも、自分たちとは違う存在を化け物と言って罵るだろうか。まあ、そうなっても仕方

ないかな。元々アイツを探す為に今の学校にも入学させられた訳だし。どうせ後日、本家に無理やり戻されることになるだろうし、せっかく出来た友人は名残惜しいが残念だなあ。どっちにしろ、彼女が私のことを嫌いになるのは当然のことなのだ。

「えーっと香織？ 何そんな泣きそうな顔になってるのか分からないですけど、私は香織が双司さんみたいになびつくり人間でも何とも思いませんよ？ むしを個人的には普段の奇行の方が目立つんですから、超能力みたいなのが使えても私の友達なのには変わりませんし」

「——えっ？」

「ああでも、双司さんを殺すなんか言ってたのは減点です。なんであれ、人殺しはダメなことなんですからね？」

と、腰に手を当てながら私の額を指先で小突く小夜ちゃん。身長は私が高いので、必然的に上目づかいでこちらを見上げる形になる。なんだろう、それは別に痛くない程度の力なのに、何かが痛い。そしてジワリと、目じりが熱を帯びだすのは何でだろう？

「って、何で泣くんですかっ——！？ 今のそんなに痛かったの！？」

痛くない、痛くないんだよ小夜ちゃん。でも、なんでか涙が出てくるの……。

「えっと、よし、ほら頭なでなで——」

頭部に感じる、柔らかい温もり。うん、人肌って暖かい——そ

んな当たり前のことが嬉しいのは何故だろう。
ぐずつ、鼻を嚙りながら、服の袖で涙を拭う。

「……ありがとう」

喉の奥から絞り出すように、聞き取れるか定かではない感謝の言葉。だが、別に聞こえなくてもいい。だってこれは、ただ私にとっての自己満足の言葉でしかないのだから。

ふと、頬に感じる温もり。小夜ちゃんは私の頬に掌をあてがい、向日葵のような笑顔で口にする。

「——どういたしまして」

紅蓮の海を走る。

呼吸という動作をする度に、ジリジリと体内が焼けていく感触。うねりを上げながら燃え盛る炎は、その内大気すらも焼き尽くし、あらゆるものを死滅させる獄炎となるだろう。

その様子を観察しながら、魔力の余波を辿り元凶への到達を急ぐ。ああ、これは絶対に依頼料に含まれないんだろうな。むしろ料金が払われること自体が妖しくなってきたし。

「むっ、この辺りか？」

強まる魔力の余波。眼前に広がるのは紅蓮の繭。おそらく、大気中の、魔力濃度から考えてもアレがこの火災を起こしている核となる部分であろう。

「さて、いるんだろう腐れ狼？ さつさと姿を現せ」

繭に向かって声を飛ばす。此処まで来るのに大体一分弱、——
——急がなければあの二人も持たないだろう。

「——っ!？」

突如、頭上より飛来する焰の風。瞬時に拳を概念強化し、空へ打ち出す様に迎撃。——キインと、金属音にも似た音を立て、火炎は宙に霧散する。

「いきなり攻撃とは、中々にご挨拶だな腐れ狼。長年現世に出ていなかったせいで、礼儀作法というものを忘れたか？」

——貴様のその口よりはマシだと思っただが、スサノオよ。貴様こそ、現世に長い間顕現していたせいで、随分と人間臭くなっただようだな——

脳裏に、直接響く低音の声。それと同時に、眼前では炎の繭がその形を螺旋を描く様に崩壊させ、同時に声の主であろう姿へと変質してゆく。

炎柱はその灼熱を帯びる尾となり、焰の蛇は渦巻き巨大な胴を造る。空へ燃え盛る炎は、その形を獣の頭蓋の如く変貌させ。全てが結合され、目算三メートル以上はあるであろう巨大な紅蓮の狼となる。その姿こそ炎を祭る古神、火乃迦具槌の顕現なり。

「その名はとうの昔に捨てたよ。今の俺には、？荒ぶる王？を名乗る資格は無いのでね」

一息置き。

「二度は言わんぞ火乃迦具鎚、——今すぐこの炎を鎮めろ。でなければ、実力行使で鎮めさせて貰うが？」

——断る。数千年ぶりに現世へと出られたのだ。この我を、たかが刀剣なんぞに封じた人間どもにも礼をしなければならぬしな——

炎が揺らぐ。奴に人としての顔があったのなら、今頃ニヤリと皮肉げに笑みを浮かべていたであろう。まあ、予想通りの答えではあるか……。

「ならば、先ほど言った通り実力行使でいかせて貰うぞ。炎の神よ——」

——悪いが、再び封じられて貰う。

その言葉が合図だった。

「形式概念付加？我が拳八神ヲ封ズ拳ナリ？　？我が拳八万物ノ破壊ヲ促ス？」

概念を、？単語？ではなく？文章？として付加する。概念とは、その存在自体が非常に不安定なものである。それは物事に意味を持たせる為の力。単体ではなく、文章として用いれば、より具体的な

力の方向性を付加する物に持たせることが可能になる。だが、それは元々世界そのものの法則と言ってもいい。付加する概念の情報、付加する対象の粒子単位での情報。それらを組み合わせる概念という力は、所詮？元古神？ともいえど、生物には過ぎた力。己のポテンシャルを上回るような概念を使えば、それは反動となり直接使用者へと跳ね返る。そしてそれは、この身でも同じこと。

脳の血管、己の肉体の細胞一つ一つが、焼けるような痛みを帯びる。身体中の血管という血管が破裂しそうだ。ギチリ、ギチリと、まるで壊れたゼンマイ。

これが概念の副作用。？破滅？ などという過ぎた力が、外意外にも内側へと襲い来る。

—— 魔術方陣一番、五十三番、六十一番が停止。

—— 肉体破損状況、内蔵、第二子腸が破損。右大腕部、肋骨四本に罅。

—— 結論、戦闘続行可能時間、約三分十二秒。

ギリギリだな、と内心溜息をつく。だが、彼女たちに宣言してしまった以上はやるしかない——。

「—— 疾っ！」

眼前に広がる炎の獣に向かい跳躍し、両腕を大きく平行一回転。生み出された遠心力を利用し、右の拳を獣の顎目がけて打ち放つ。瞬間、己の拳を遮るように発生する炎の壁。だが。

—— なっ！？ ——

炎は拳に触れた瞬間、付加された文字通り？破滅？ する。フェイントなど使わない。放つ拳は全て本命。小細工なしに、全力で眼

前の障害を排除する――！！

――頭に……乗るなああ！！――

響く言葉と共に、左肩ごと炎の牙に食いちぎられる。左半身の神経接続をカット。同時に、魔術詠唱開始。顕現代償、己の肉体に流れる鮮血。

あと、五十三秒。

「我は暴風、無形にて有形たる風の尖塔っ！！」

風の矢じりは不可視の刃となり、獣の火の粉を削り取る。こうしている間にも襲い来る焔。右足の細胞が焼け死に、熱風で右の眼球が狼煙を上げる。復元など後回し。既にタイムリミットは近い。
あと、二十六秒。

――地ヲ埋メ尽クス流転――

周囲に響く祝詞のような言葉。

――痛ミヲ知ラヌ世ノ理――

同時に爆炎は一層噴き上がり、獣は徐々にその姿を変貌させる。
あと、十二秒。

肉体に残る魔力を総動員。自動復元をカット、耐火概念をカット、余剰魔力を全て右の拳へ。

――我ハ其ノ世界ニ君臨セシ灼熱ノ獣――

あと七秒。

上昇する魔力に呼応するように、己の瞳と天上に浮かぶ月が蒼海の青に輝く。

—— 顕現セシハ、万物灰塵ト化ス煉獄ノ顎ナリ ——

祝詞が止み、獣はただ獲物を喰らう為だけの、紅蓮に燃ゆる巨大な顎へと姿を変える。

あと三秒。

「—— 追加概念付加？放ツ拳ハ無数トナル？」

一秒。拳と顎は激突し、そして意識は炎の中へと散っていった。

唇に感じるしっとりとしていて、甘い感触。ねちより、くちやりと、舌と舌が絡み合う度に、卑猥な音色を奏でる。—— って。

「むうううう！？」

口を塞がれた状態で、私は喉の奥で声を上げる。えっ？ 何です

かこの状況？ 何で目の前に香織の顔がどアップ？ むしろ私のファーストキスがあああ！？

「つぶはっ。小夜ちゃん？ どうしたの？」

「どうしたのじゃないですよっ！？ いきなり人の唇奪うなんて…、私のファーストキスがあ……」

舌まで入れられました。あれですか？ 神様は私に嫌がらせでもしたいんですか。ふと、脳裏にニヒルな笑みを浮かべる双司さんの顔が浮かんだが、後で殴っておくことにしよう。何かムカツキます。

「なんか外の熱量が上がってきたからね。私の血って一応水巫女のも物だから、直接飲ませれば少しはマシになるかなあってね」

あー、応急処置みたいなものですか。でも、いきなりキスは頂けないです。

「ん、炎の勢いが弱まってきてる。あの男本当になんとかやったみたいね」

香織の言葉と共に、ゆっくりとその勢いを弱めてゆく。って、双司さんは？

次第に視界が開ける。燦りを上げる草原に見える黒い丸の様な物体。なんか、人の影がそのまま丸まったような感じです。そんなことを考えていると、球体はポロポロとその外壁を崩していく。

「双司さんっ！？」

崩壊した壁の向こうに倒れる男性。その身体からは、黒く濁った

炎の残滓をた揺らせている。その光景を確認すると同時に、私は己の足を彼に向けて駆けだす。あの人は無事なのだろうか？ 脳裏にフラッシュバックする六月の出来ごとを振り払い、彼のもとへと急ぐ。無事でいてください。

「——大口叩いた割にはボロボロね。左半身なんか、完全に消滅してるじゃない」

「——五月蠅い。古神相手にこの程度の被害だった時点で俺を褒めるべきだろう？」

全身ボロボロで、左半身からドクドクと流血している彼は皮肉げな笑みを浮かべる。てゆーか、それ大丈夫なんですか？

「まあ、復元自体は出来るからそこまで大した傷じゃないさ」

私の疑問に答える様に、双司さんはめんどくさそうに呟く。死なないのなら、問題ないです。

「さて、秋山香織。今の状態の俺なら、割とたやすく殺せるだろうが……どうする？」

そっだ、彼女——秋山香織は双司さんの命を奪うために今回この事態を引き起こしたのだ。今なら、それを成し遂げる絶好のチャンス——。

「——やーめた。うん、なんかもうめんどくさいや」

——はっ？

「おいおい、いいのか？ 本家からの指令でもあるんだろ？」

「いいのよ。？筋が通ってないことは私はやらない？ってというのが心情だし。こっちの情報が間違ってる可能性があるなら、私が動く理由にはならないわ」

笑顔で、後ろ髪を払いながら彼女は言葉を紡ぐ。えーっと、つまり。

「香織は現状維持ってことですか？」

双司さんを襲うことはないけれど、現実次第によっては別、そういうことだろう。

だが、個人的には一安心。色々あったけど、今夜はグッスリ寝れそうです。

「ふむ、大体復元したな。しかし、朝には筋肉痛になってそうだな」

妙に人間くさい言葉を吐きながら、身体を起こす双司さん。気のせいじゃなければ、さっきまで無かった左腕と足が生えてるんですけど……。

「——はあ！？ なんでこんな短時間で身体完全復元出来るのよ？！ 神格レベルの吸血鬼だって一週間はホルマリン漬けしないと厳しいくらいの傷だったでしょ！？」

「生憎、その反応は既に慣れてるんだ。魂さえ無事なら、なんとか復元出来るものだぞ？」

んな訳あるかー！！ と、頭を抱えながら空に向かって叫ぶ香織。

ああ、その気持ちよくわかります。魔術師の常識はどうか知らないですけど、双司さんに常識という言葉を求めちゃダメです。百倍返して裏切られますから。そして双司さん、無視決め込んでタバコ吹かさないで下さい。

「んっ?」

ふと、遠くに響くサイレンの音。目を凝らして音の方向を見れば、夜の闇に若干赤の光が混じっている。って香織?　なんでそんな美少女らしからぬ作画崩れっぽい顔してるんですか?

「——認識阻害の結界張るの忘れてた……」

「——秋山香織、今とんでもない愚言を吐かなかったか?」

「完全に忘れてたわ……。ついでに遮音も張ったかどうか妖しかったり……」

「土下座しろ、今すぐ土下座しろ。そしてどっか遠くの星になれ」

えーっと、つまり。

「今までの事、麓からは丸見えだってことですか?」

それって、結構どころかなりマズイことなんじゃ——?

「——さっさと逃げるぞ!!　秋山香織、転移門開け!　早くっ!!」

「ああもう!!　えーっと、術式は——、あれっ?　ここっでど

うちの式に繋ぐんだっけ？ あっ、うっ、早くしないとイケないの
にいいいっ——！！」

双司さんは焦るように私の首根っこを掴み、香織はしくはくしながらよくわからない円陣をつくる。そんな光景を眺めながら、なんだかこういいうドタバタもいいなあと思った私は悪くは無いはずですよね？

/ / e p i r o g e

差し込む朝日で、目が覚めた。冷たい室内の気温と、身体に被る毛布の温もり。そしてカーテンの隙間から差し込む、柔らかく暖かいお日様の光。寝ぼけ頭で視界に映る時計を見ると、時刻は午前六時三十五分。眠たい、凄く眠たい。

「……ふぁ」

一人暮らしを初めて既に二年ほど立つのだが、私は未だに朝には弱い。正直、同じ一人暮らしで狙った時間ピッタリに起きることの出来る小夜ちゃんが羨ましい。私にはそんなの無理だし。

未だ気だるい身体を引きずるように、毛布という麻薬から這いずり出る。ああ、寒い。コロンと、ベットから床のカーペットへとダイブ。やっぱり寒い。熱いのならいくらでも耐えられる自身があるのだが、寒いのは苦手な私である。

「気温つて、なんで下がるのかしら？」

それが物理法則だから仕方ない。だが、嫌なものは嫌なのだ。うう〜っと、唸りながら重たい身体を動かし洗面所へと向かう。鏡に映る自分の姿はそれはそれは酷いものだった。

まず、生気が無い。髪は例の如くボサボサ、目は二日酔いの酔っ払いみたいに据わっている。お気に入りの桜色のパジャマは何故か第二ボタンまで外れており、左肩がむき出しになっている。この顔では色気もヘツタクレもないと思うが。

「……………うあ〜」

いつまでもそんな自分の姿を見ているわけにもいかず、水道の蛇口を捻り水をたたき出す。手を触れると、指先がしびれるように冷たい。これを今から自分の顔にかけなければならぬと思うと、洗面台から後ずさりしそうになるが文句は言ってられない。仕方ないので、素直に冷水で顔を洗う。

「……………冷たい……………」

もう一度言おう、気温つてなんで下がるんだ。

二、三度冷水に顔を浸すと、次第に頭の中がスッキリしてくる。顔を洗ったらパジャマを脱ぎ棄て、オレンジのブラを装着。ショーツも同色の物に履き替え、そして壁に掛けてある学園の制服を着用し、ベットの側の洋風アンティーク風な化粧台へ。

立てかけてあるブラシを手に取り、髪に通す。どうでもいいが、私は化粧はしない。というより、まず仕方が分からない。そういえば、小夜ちゃんも化粧はしないみたいだがなんでだろう？ うん、今度聞いてみよう。

ブラシを通し終わったら、再び洗面台へ。歯ブラシを手に取り、歯を磨く。ガラガラと、うがいを三回。

再び時計を見ると、既に七時半を回っている。そろそろ出ないとマズイだろう。そう思い、机の上に置いてある鞆を手取る。準備は寝る前にしておいたから、確認の必要は無い。

ふと、カバンの側に置いてあったモノが目に入る。それは、銀と青の宝石で装飾された短刀。先日、あの男との別れ際に渡された魔具。

——もし、真実をしつてもなお俺を殺そうとするのならソレを使え。その短刀なら、問題無く俺の魂を砕くことが出来るだろう。ああ後、俺の事務所を手伝う気はないか？ 今なら小夜のお茶くみに晩御飯付きだぞ？

どういう意図で、浅見屋双司がコレを私に渡したのかは解らない。そして、何故自分の事務所を手伝えなんて言ってきたかは解らない。だが、小夜ちゃんのお茶くみはなかなか捨てがたいし、アイツの側にいた方が櫛名田姫の真実を知れる可能性が高い。故に、私はこの案を呑んだのだった。

そんなことを思い出しながら、私は短刀を手に取りスカートのポケットへ突っ込む。玄関へ向かい靴を履き、ふと一息。

おそらく、昨日の一件で私の中の何かが変わった気がする。いつもより、心が落ち着いている。多分、一族の目的があやふやになったからかもしれない。そして、小夜ちゃんが私が魔術師だって知っても、友達だと言ってくれたからかもしれない。

ドアノブに手を掛け、再び思考。これから何が起こるか全く予想出

来ない。すべきは、己で道を切り開き、考えること。今までみたい
に、一族の言いなりに行動なんてしないこと。自分で判断し、自分
で決める。筋は通さないといけないしね。実家に報告したら、色々
と文句は言われたけど、なんかもうどうでもいい感じだ。勝手に人
に色々押し付けるんじゃないわよ。

ドアを開き、光を浴びる。身体を包む日の揺り籠。さあ、これか
らの日常を歩むとしますか。

／*****あとがき*****／

どうも、最近色々とストレスマツハは桜月九朗です。

今回のお話は、時系列的には5、6話あたりの話になるのですが、
物語の構成上ここでは3話という位置づけです。以下はこの間のく
だらない会話。

俺「……おっばいで、世界が救えると思うんだ」

友人1「……胸より尻がいいです。叩きたい」

友人2「お前ら、普通胸や尻より足だろう。踏まれない」

俺「……」

友人1「……」

友人2「……」

俺、友人1、友人2「……」——よろしい、ならば戦争だっ
！「……」

深夜のファミレスでの会話でした。最後に、この物語を読んで下さった皆様に最大級の感謝を。

23日 執筆 桜月九朗

2011年 3月

Episode 4【雨界童話】

／／雨界童話

●

季節は六月。テレビや新聞のニュースの欄には、全国的に梅雨入りしたことを知らせる報道が掲載され、浅見屋探偵事務所の中から窓の外を眺めてみると鬱になるような勢いで雨粒がアスファルトへ向かって降り注いでいる。それは一粒一粒弾けるように幾重にも音を立て、まるで指揮者の居ないオーケストラを奏でているかのようだった。

「——雨ですねぇ」

事務所に備え付けてある黒塗りのソファーに背を持たれながら、私は誰に問いかけるでもなく呟く。ああ、こんな日は気分が鬱にな

ります。脳みそが湿気で腐りそうです。世界よ、もっと私に優しくなれ。

「雨だなあ。こういった日は誰もが小夜みたいな状態なのか、仕事も来ないし暇だ」

翻訳もあらかた片づけてしまったし——と、自身の後方から聞こえる男性の声。気だるい頭を声の聞こえた方へと捻じ曲げると、青い瞳をしたスーツ姿の男性が視界に入る。

彼の名前は浅見屋双司。今から二カ月程前に知り合った変人。変人と言つても、ソレがヒトに分類されるのか私には判断がつかないのでこの呼び方も適切ではないかもしれない。あえて言うなら、人外と言つた方が正しいでしょう。

ぼーっと自分を眺める私を余所に、双司さんは取り出した煙草に火を灯し、紫煙を吐き出していた。

「双司さん、煙草の吸い過ぎは身体に毒ですよ？ あと、目の前に女子高生がいるんだから、少しは遠慮して下さい」

「今さらだろう、小夜。それに、女子高生に夢を持っている男達の希望を粉々にするかのような状態のお前に言われたくない」

「仕方ないじゃないですか。私、雨嫌いなんですよ」

私は軽く猫のように伸びをしながら双司さんへと答える。まあ、彼の言うように今の私は色々とだらけきつているので、夢見る男子

諸君が見れば幻滅するかもしれないですね。しかし、これも全て頼んでいないのにも降る雨が悪い。必要だと分かっているけど、やっぱり何で降るの？ と、コイツを降らせているヤツに会えるなら文句を言っただけでいいくらいだ。

「気にするから余計にだらけるんだ。と、言う訳で気分転換にお茶でも汲んで来てくれ」

「こういったものに悩まされない双司さんには私の気持ちは分かりませんよーだ。……お茶ですね。今お湯を沸かしてきますから待って下さい」

気だるい身体を起こして、私は給湯室へと向かう。さて、ここ浅見屋探偵事務所は名前通りの探偵事務所である。最も、このご時世探偵稼業だけではやっていけない筈もなく、普段は双司さんの無駄にある知識を生かして外国書の翻訳で食いぶちを稼いでいるのが現状だ。まあ、受ける依頼が特殊すぎるというのも理由の一つなのだが……。

「——何だかんだで、もう二カ月ですか」

私がここに通うようになって、である。我ながら無茶な理屈で持ちかけましたが、本当に雇われるとは思いませんでした。あれ以来、私は毎週金曜の夜から土曜の夜まではこの事務所で過ごすのが日課になっている。基本的に私の仕事は頼まれた資料の整理、部屋の掃除、お茶くみ等々。資料の整理は、バインダーノートに種類別に纏

めるだけ。お茶くみは双司さんの気分次第。部屋の掃除に至っては、毎回殆ど汚れていないので一時間足らずで終わってしまう。

これではあまりにすることが少なく、半ば遊びに来ている様な感覚になりそうなので、双司さんに「ご飯くらいは作りましょうか？」

と、相談したことがあった。

それでも私は独り暮らしの女子高生。一般世間ではどうかは知らないが、その辺りの男性よりは美味しいものが作れますっ！！と、意気込んで尋ねたことなのだが……。

「——料理は俺がやる。なぜなら、趣味だからだ」

無駄に握りこぶしを掲げながら言われた為、大人しく身を引いた。実際、彼の作る料理はそこのレストランに出されていても疑問に感じないくらい美味しいものだったので、私の胃袋としては嬉しい限りなのですが——自分と比較した瞬間、目じりから涙が零れました。普通に女の子のプライドズタズタにされました。だって、何度食べても私が作るより美味しいんですもん。思わず、初めて食べたその夜はタオルケットに顔を埋めて寝ました。……悔しくなんてないんですからねっ！！

さておき、私がそんな思考に身を寄せている間にも、サアと雨はまだまだ降り続く。双司さんは煙草を吹かしながら何か分厚い本に目を通し、完全にこちらに意識を向けていない。話し相手にもなりそうにないので、私は何となく視線を事務所の中を見回すように移す。外見とは明らかに比率がおかしいこの事務所。双司さんの腰にかけている椅子の正面にある事務用の茶塗りの机。さらに、机の正面に向かい合うように置かれた来客用の黒革の長椅子。長椅子を中心から遮るように置かれた、机と同じ茶塗りのアンティークテーブル

ル。壁は、扉のある個所を除いてすべて本棚で覆われている。扉の数は全部で四つ。

出入り口であるスチール製の扉。

双司さんの私室兼寝室に続く、木製の茶塗りの扉。

私が泊まる時に使用する寝室へと続く、木製の黒塗りの扉。

そして。

「……双司さん。いい加減突っ込みますけど、あの？根性？って紙が貼ってある扉——何ですか？」

四つ目の扉。色は白。ぱっと見、特に何の変哲もない扉なのだが、そこに？根性！？と書かれた赤い紙が貼っていると話は別である。

「——ああ、それか」

双司さんが本から顔を上げる。文字を読み続けて疲れたのか、何処か眠たげな目をして。

「開けない方がいいぞ。変な物が出てくるから」

「——変な物って何ですかっ!？」

アレですか!？ この事務所何か得体のしれないナマモノでも飼っているんですかっ!？ だが、今何故が良い笑顔をしたネオンの顔が思い浮かんだのは何故だろう。しかもその笑顔に対して、私の本能がびーっ、びーっ、とアラートを告げている。勿論真っ赤なデッドランプで。

「生モノではないから安心しろ。どちらかと言うと、その中に入っているのは無機物だな。まあ、少しかり頭がパーになって、軽く引き込みりになる可能性があるような無機物だが。命に別条は無いさ」

「命に別条なくても頭にあるじゃないですか————って引きこもりっ!？」

「——小夜、中に興味があるのか？」

私は激しく首を横に降る。あれですよ、藪と突いて蛇なんて出したくありませんし。そんな私の反応に、そうか……と、少し残念そうに言葉を零して双司さんは本へと視線を戻した。なんで残念そうな顔するんですかっ!!

チクタク、チクタク、と掛け時計の無機質な針の音が室内に響き渡る。双司さんは再び本を読み耽り、私は来客用のソファ―に腰をおろしてある一点へと視線を送り続ける。視線の先には？根性！？と書かれた赤い紙の貼ってある白い扉。

——— 気になります。だけど、開けたら引きこもりで変な物である。何処ぞの馬鹿な友人二人なら何の躊躇もなく扉を開けそうだが、生憎と私はその辺りの自制心は持ち合わせています。だけど、やっぱり気になる。

「——— やはり、気になるのか？」

私の内心を察したのか、双司さんは本から顔をあげてこちらを見る。
据える。

「——— いえ、気のせいです」

「……そうか」

私の返事に再び本へと視線を戻す双司さん。心なしか、その声は残念そうだ。そんなに私を引きこりにしたいのだろうか、この自

称吸血鬼は。

しかしながら、時計の音が響く室内で二人っきりの無言の時間と言うのは酷く気まずいです。誰しも経験したことはあるのではないのだろうか？ 親しい友人との会話でも、いつの間にか発生する無言の空間。俗に言う話のネタ切れである。私自身嫌いではないのだが、やはり他者として何をするでもない無言の時間というのは精神的によろしくない。確かに、これまでもこの事務所に出入りしている時に、同じ状況になったことはなかったのかと聞かれれば否である。しかし、今回はあの扉という謎のオマケ付きなのだ。自分の理性というか精神的な垣根は既に崩壊気味。そんな私は、思わず少しならいいですね？ と内心の誘惑に負けてしまふのであった。

「……双司さん、あの扉——」

「——やっぱり気になるのか？」

「——違いますっ！！ いや、そんなに違わなくもないかもしれないですけど……。扉に貼ってある紙の事です。何で？根性？なのかなーって」

「少し違っぞ、小夜。？根性？ではなく？根性！？だ」

最後の？！？がポイントなんだと彼は言うが心底どうでもいい。

「で、何で？根性！？なんですか？ 基本的にそんな言葉とは無縁に近いですよ双司さんは」

「君はあの文字を聞きたいのか俺を貶したいのかどっちだ？」

「別に貶してなんていませんよ。——ただ本音を言っただけです」

「……最近、小夜が冷たい気がするんだが。ああ、春先の清純無垢な君は何処にいったのだろう」

「さあ？ きつと双司さんの妄想の中じゃないですか？」

まるで私が汚れてるとでも言いたいのか。失礼です。私は身も心も清純無垢な女子高生ですよ。

「やはりドライアイス張りに冷たいなっ！？」

何か机に？の？の字を書きながら言っているが無視。それより私の質問に答えて下さいよ。

「曲がりにも大の大人——を色々通り越してそんな人が見つとも無い真似しないで下さい。吸血鬼みたいなものって言ってたんですから、双司さんって良い感じに長生きしてるんですね？」

「むっ、まあな。吸血鬼——ああ、この際だから教えておくか」

何をですか？

「俺は正確には吸血鬼——あんな自然の摂理に真つ向から喧嘩売っているような理不尽生物じゃない。以前は小夜がイメージし易い例としてああ答えたが、本来は違う。確かに少々変質して吸血でエネルギーを回復したり同等の身体能力や回復能力も持っているが、その根源は全くの別物だ。俺自身のアレは、あくまで自然の摂理の延長線上のものだしな。加えて言うと、吸血鬼の始祖はヨーロッパだが、俺は国産だよ」

「……難しすぎて良く分からないですが、とりあえず吸血鬼ではないと？」

「その通りだ。まあ、今まで通り自称吸血鬼と思っという貰っても構わん。同じようにほぼ不老不死なお且、俺の真名は少々有名すぎるのだね」

昇る紫煙を見つめながら、双司さんは何処か懐かしむ様に呟く。
まあ、とりあえず今まで通り自称吸血鬼の変人というカテゴリーでいいのだろう。それより。

「話が思いつきり反れましたけど、結局扉に貼ってある文字って何か意味があるんですか？
いつまでも机に？の？の字を書いてないで教えて下さい」

それとも、人には言えない理由でもあるのだろうか？ そんな考

えが脳裏を過ぎり、思わずゴクリと唾を飲み込む。私の雰囲気を感じたのか、彼は真面目な顔をしてこちらを見据え――。

「いや――気分で書いた。特に意味は無い」

「――ふざけるなっ!!」

その言葉に、近場にあつた湯呑みを投げつけた私は悪くはないだろう。ここまで引つ張ってソレですか。

●

「大人びた人でも、妙に子供っぽい所を発見するとドキッってこない? そういうギャップに、女つてのは弱いと思うんだー」

それは、いつか読んだ女性向けのファッション紙でアイドルがコメントしていた言葉だ。当時の私は、そんなものかなーと流し読みしながら考えていたことを覚えている。なにせ、異性にそのような感情を抱いたことなんて産まれてこの方一度もないのだし、私の知る大人なんていうのは学校の先生かロクデナシの母親しかいなかったのだから。そんな私が、アイドルの言うような感情を体験したことがある筈が無い。でも。

「―――実際見ると、結構痛々しいんですね……」

と、いつの間にかコピー用紙を取り出してボールペンで？の？の字を書いている男性を見る。貴方、一応自称吸血鬼ですよ？ 春先の時の威厳はどこにいったんですか？ そんなことを内心で思うが、彼に届くはずもない。どうでもいいが、最近彼のあしらい方に馴れてきたな！。

気が付けば、面倒くさくなったのか平仮名からカタカナの？ノ？の字に変化した文字の羅列を書く双司さん。既にコピー用紙は三枚目。それでも描くのを止めないのは、彼なりのプライドなのだろうか。眺めていてもアレなので、私は再びあの白い扉へと視線を向ける。

―――やっぱり気になります。でも開けたらパーになって引きこもり……ダメですっ！！ 花の十代＋女子高生としてそれだけはダメですっ！！

と、思ってもやはり気になってしまうのは人の性なのか。頑張れ私の自制心、負けるな私の自制心、勝ち抜け私の自制心。ああ、もうむず痒いですっ！！

私は気を紛らわす為に、お茶をくみに台所まで向かう事にした。カチツと、私は水を入れたヤカンをガスコンロに置き火をつける。台所は、双司さんの寝室へ続く扉を開けたすぐに左手に存在する。ちなみに右手が双司さんの寝室だ。コンロでお湯を沸かしている間に、棚から急須を取り出しお茶の葉を入れる。銘柄は『KO鉄』。名前

の胡散臭さとは裏腹に、深みがあり割と美味しいと評判らしい。ちなみに買ってきたのは無論双司さん。

最初このお茶の葉を見た時、何かの冗談かと思った。まず銘柄から有り得ないし。一体何処で買ってきたかと聞いた所、双司さんは。

「決まってるだろう？ こんなもの、河嶋雑貨くらいしか売ってない」

と、答えた。どうやら、自分でもおかしな物を買ったと自覚はあったらしい。

河嶋雑貨とは、ここから10分程歩いた所にあるこじんまりとした雑貨屋だ。店主である『河嶋真』氏は、近所どころか街中でも変人として有名である。そんな彼が経営する雑貨屋には文房具から調理器具まで、幅広いジャンルの商品が存在する。ただ、どれも聞いた事の無いようなメーカーの物ばかりだが。ちなみに、意外と和風びいきな友人。秋山香織に、『K O 鉄』の事を聞いた所。

「勿論知ってるよっ！！ アレって結構美味しいよね。でもこの辺りじゃ、取り扱ってる所が少ないのが残念……」

との事である。流石は香織。『紙一重のアホの相方』なだけある。だが、和風びいきな彼女が言う程『K O 鉄』の味は確かなのだ。なんでも、昔から和食だけは良い物を食べていたからだとか。ちなみに、ネオンにも同じ問いかけをしたところ、返ってきた言葉が？あそこは本当に色々あって便利だよねー、縄とか？であった。思わず

腰の入ったボディブローを打ってしまった私。その後で、何故か香織が追い打ちをかけるように蹴り飛ばしていたが。実はあの二人、私が思っているほど仲は良くないのかもしれないです。

「でも、じゃれ合っているようにしか見えないんですよー私。確か……クラスの男子曰くツンデレとアホ娘でしたっけ？」

どちらがどちらなのかは、あえて言わず、です。

さておき、お盆を取り出し、その上に湯飲みを二つに急須を乗せる。お湯はまだ沸かない。仕方がないので、暇つぶしに棚の引き出しから折り紙を一枚取り出す。何故台所に折り紙があるのかというと、双司さん曰く風水的な問題らしい。台所とは水場であり、ココの台所は建物の調度北東に位置している。風水では、北東に水場は鬼門とされているらしいので、厄を緩和、消滅させる為に折り紙、『折り神』を台所に置いていっていると説いた。自分にはその辺りはよくわからないが、折り紙は折る事でその意味合いを発揮するらしい。

「暇だったらソレで遊んでくれ。折る手間が省ける」

と、双司さんは私に言った。それ以来台所での折り紙は、私の暇潰しの日課でもあるのだ。気を紛らわすには調度いい。先程の白い扉の事を忘れるように折り紙へと集中する。が——つ、やっぱり無理ですっ！！

折り紙をクシャクシャと丸め、ごみ箱へと投げ入れる。無理だ。不可能だ。忘れる事なんて出来やしない。インパクトがありすぎた。あゝもう、気になりますっ！！　と言うか、二ヶ月近く個々に通っ

て今までアレに気が付かなかった私って一体っ！？ 両手を頭に抱え唸る。気になる物は仕方がない。だが、変な物と御対面で引きこもりは遠慮したい。

考えが頭の中をループする。ものの見事に深みにはまってしまいましたが、私っ！？

その時、私の思考を遮るようにピーッと、ヤカンのお湯の沸いた合図が鳴り響く。中断された思考に安堵しながら、良い塩梅に蒸らしたお茶を注いだ湯飲みをお盆に乗せ、双司さんの所へと運ぶ。コピー用紙は、八枚目に差し掛かっていた。

「……双司さん。まだ書いてたんですか」

「これは既に戦いなんだ。コピー用紙と俺、どちらが最初に力尽きるかのなっ！！」

なんか勝手に盛り上がっているのとお茶、置いときますね。と、コピー用紙と格闘してる彼の横に湯飲みを置く。多分だが私がこの通う前から、ああやって一人で暇を潰していたに違いない。

極力、扉が視界に入らないようにしながら、私はソファアへと向かう。こういう時はお昼寝でもして忘れるに限ります。が、ソファアへ踵を返そうと後ろを向いた瞬間。

「あっ？」

不覚にも縛れる私の足。

「あつ、うつ？」

倒れまいと手をバタバタさせるが、私は鳥じゃない。そして蝶でもない。ましてや蛾でもない。

「——ふっ」

視界の端で、皮肉げに笑う双司さんの顔が見えた気がする。殴る、あのエセ吸血鬼絶対後で殴る。重力の法則に従って、私は床へと倒れて行く。その拍子に手からお盆が抜け飛び、あの白い扉を——
——強打っ!?

あつ、今、私の時が止まりました。現在、私の心は氷河期です。

「……そっ、双司さん」

「……何だ、小夜」

「……アレくらい、大丈夫ですよ……ね？」

「……………」

なんで残念そうに首を横に振るんですかつ!?

「……小夜。物っていうのは、結構繊細なんだぞ？」

キィと、金具が擦れるような音が扉から聞こえてくる。扉の隙間から、白い霧のような物が吐き出される。嫌な予感しかないのは私だけだろうか。

「双司さん、私家に帰ってもいいですか？ 全身全霊をかけて」

「手遅れだと思うぞ？ まあ、ゆっくり不思議体験でもしようじゃないか」

「——いやあああ——！」

拝啓。

全国は梅雨入りしジメジメした空気が漂う中、皆様はどうお過ごしでしょうか？

私、逝ってきます。

敬具。

そんなコトを思っている間に、霧は私たちの居る事務所一面を真っ白にし、その場にいる者全てを夢へと誘った。

—— 綺麗な音色。それが純粹な感想だ。

頭の中に、パイプオルガンの音が鳴り響く。繊細で尚且つ慈愛を感じさせるその音は、泣きじゃくる子供に母親が聞かせる子守唄に似ていた。体が冷たいく、硬い物に触れている感触がある。だが、意識だけはハッキリとしない。目を開けようにも、強烈な眠気のような物が襲って来て開けない。

なんなんですかコレは？

回らない思考で考えるが、何も思い浮かばない。真っ白だ。雪みたくに白いキャンバスのように、頭の中が無理矢理真っ白になる。

私は……誰だっけ？

ここは……何処だっただけ？

アレ？私は……『何』なんだろう？

オルガンの音色だけが真つ白な頭の中を埋め尽くし、奏でられている曲名すらも考えるということが出来ない。

私は何かを呟いたが、それさえも言ったのかわからなかった。

もう無理だ。そう、体が震えているが、それさえ理解出来ない。確かに『ある』のに、『理解』が出来ない。今の私にとって、自分を含めた世界は『情報』の渦でしかなかった。

理解不能の情報の世界。

「■■■■■」

響き渡る音色は次第に激しさを増し、大気を震わす波となる。

ワカラナイ。

音色だけが響く寂しい世界で、私は何故か子供の頃の記憶を思い出していた。

ナニモカモワカラナイ。

———何で、アンタなんて……………産まれてこなきゃよかったのに。

イヤダ、イヤダ、イヤダ。

———あの人じゃなくて……………アンタが死ねばよかったんだ。

「■■———ああ、やっぱり私は■■■■■だったんだ」

夢に、呑みこまれる。記憶に、呑みこまれる。私の中の歪みが、全部、全部———。

「———ここまでだ」

そんな女性と思わしき声で、誰も居なくなつた。

●

ガツンと、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受け、暗転。目の前には、既に見慣れた事務所が写し出されている。息は、何か激しい運動をした後のように荒々しい。体中が冷や汗をかいていて、今すぐにもシャワーを浴びたい気分だった。

「大丈夫か？ 何か体に不具合とか無いか？」

双司さんが、こちらを無表情で見つめながら問いかけてくる。彼の背後にはあの白い扉。

「……さっきの何ですか？」

自分の体を両腕で抱きしめながら口にするのはそんな言葉。その問

いに、双司さんは右手をこちらに掲げる。その手には題名も何も書いていない、ただの赤いハードカバーに被われた分厚い本が握られていた。

「これは『魔王』という楽曲の写本でな。対象者に、『虚無』を見せる力があるんだ。と言っても、力はオリジナルの百分の一くらいだが」

聞いた事位はある。楽曲で『魔王』と言えばそこそこの有名だ。確か、童話調の物語もあった筈。坊やよおいで……でしたっけ？ だが、私の身体はそんなことはどうでもいいとばかりに震え続けている。

「小夜。とりあえず熱いシャワーでも浴びてこい。話しの続きはそれからだ」

そんな双司さんの言葉に私は、コクンと力無く頷いて風呂場へと向かうことにした。

●

ノズルを捻る。私は、シャワーや湯舟は熱めが好きだ。衣服を持ってきたボストンバックへ脱ぎ捨て、未だ震える身体を両の手に抱きながら浴室の中へ。さっきのは、何だったのでしょうか？少し熱めのシャワーを浴びながら、私は先程の出来事について考えるが――。

――やめた。

今考えてもわかる筈もないし、後で双司さんに聞いた方が早い。それに私は、一刻も早くこの体の震えを止めたかった。未だに残る、『理解』出来ないという『恐怖感』。

雫が髪を伝い、体のラインをなぞりながら零れ堕ちて行く。凹凸の少ない平坦な体だ。脳裏に、友人二人の顔が浮び――思わず正面の壁を殴った。月曜、学校で会ったら殴っておきましょう、主に私の腹いせに。決めた。同い年なのに、この発育の違いは理不尽だ。シャワーを浴びながら思う。アーメン、ハレルヤ、糞喰らえ。神様なんて信じない。

「やれやれ、どういうことかね？ 俺の時は永遠と不思議の国のアリスを見せられたものだが……」

シャワーを浴びて戻ってみると、双司さんが先ほどの本を片手に何か呟いていた。戻ったか、と呟くと、彼はそのまま白い扉へと向かい、扉を開けて無造作に本を投げ込む。扉を閉めると、ガタガタと何かを訴えるようにドア縁が揺れる。

「少々、五月蠅い」

言葉と共に、双司さんが指先で扉を撫でると。お経のような文字の青い光が浮かびあがり、すうっと消えた。同時に、揺れていた扉も大人しくなっているので、彼が何かしたのだろう。

「さて、小夜。上がったなら先程の――」

顔を上げ、こちらを見る。そして少し眉を潜め。

「小夜、お前コスプレの趣味なんてあったのか？」

「違います！！ 一体何の話してるんですかつ！？」

「いや、だってなあ、ソレ」

そう言葉を口にしながら、彼は私の着ている服を指さす。ちなみ

に、私は今現在一泊用の着替えしか持って来ていないので、学園の制服を着用中です。

「これは着替えが無かったから着てるだけですっ！！ 私が制服でここに来た事くらい覚えてるでしょう！？」

「そういえばそうだったな。やつ、よかったよかった」

何がですか。そして女子高生が制服を着ているだけでコスプレ呼ばわりしないで下さい。そんな私の嘆きを余所に、双司さんはタバコと取り出し、手元にある百円ライターで火を付ける。しかし、コノ人はそんなにタバコを吸うならオイルライターでも買った方がいいのではないだろうか？

「小夜。ブーツと突っ立ってないでまあ座れ。さっきの話もしたいな」

——その言葉で、湯上りで火照っていた私の思考は一気に冷えた。小さく頷き、来客用のソファアーへと座る。

「さて。さっきのアレは『写本・魔王』による物だって事は言ったな？」

——頷く。

「これは対象者を『虚無』という現象で包み、体験させる力がある。何故そんな力を持つのかは、俺も調べてないので何とも言えない。ただ、オリジナルの『楽書童話・魔王』の劣化したコピーがこれらしい」

——虚無？

「『虚無』とは何も無い事を指す。ただの『無』ではなく、『理解』の存在しない『無』の事だ。」

「理解が、無い？」

おもわず聞き返す。……理解が無いというのはどういう事でしょうか？

「そう。いわゆる『認識出来るが理解できない』ってヤツだ。普通はオリジナルの楽曲と同じように、童話調でこれを体験するんだが……」

君は何を見たんだ？ 双司さんの視線が、そう問い掛けて来る。よくは覚えていない。意識がはつきりしなかったし、何も考えられなかったからだ。だが、覚えているとすれば——。

「――音、ですね」

「音？」

はい。と、答え。

「音が聞こえました。パイプオルガンの。曲名までは覚えていませんけど……」

双司さんはタバコの灰を落とし、腕を組む。

「音が……。もしかしたら写本の原点に辿り着いたのかもしれないな」

原点？困惑の表情を浮かべるが、双司さんは気付いていないのか。

「ただの人間に辿り着けるのか？ いや、ただの人間だからこそ辿り着いたのかもしれない」

私の声が届いていないのか、ブツブツと独り言を続けている。……仕方ないですね。大きく息を吸い、お腹に力を溜め、そして。

『そーうーじーさーんっ！！！！』

それを爆発させた。

うおっ！？ と、双司さんが椅子ごとひっくり返る。ゴツンと響いた音は、彼が床に頭をぶつけた音だろうか。こちらからでは机が邪魔で、その惨状を確認出来ない。……怪我してなきやいいですけど、自分でやっというて、何故かそんな事を思う。でもこれがある意味良心というヤツですよ。そんなことを考えていると、ヌツと机の後ろから腕が生えてきた。腕は机にその手を着くと、奈落の底から這い出すように自分の本体を持ち上げる。奈落の底。もとい床から、双司さんは無事生還した。

「目、覚めましたか？」

笑顔で問い掛ける。

「覚めるどころか地球一周して、そのまま地獄にダイブするような勢いだっただぞ」

久しぶりに姉貴の顔を見た気がしたと、批難がましい視線で呟くが、私はソレを軽く受け流す。てゆーかお姉さんいたんですか？ やれやれ。と、双司さんは倒れた椅子を元に戻し再び座り直した。

●

いつの間にか先ほどの会話はお流れに。結局、双司さんが一人で悩んで納得してしまった。おかげで、こっちは完全に不完全燃焼である。仕方がないので、気を紛らわす意味も込めて視線を窓の外へと向ける。雨はまだ止む気配は無い。むしろ、どこと無く悪化しているような気がする。そういえば私、今日帰れるんでしょうか？

疑問に答えるのは、外から響く雨音だけだ。別に明日は日曜だから帰れなくても大丈夫だが、代えの着替えが無いのはいただけない。主に下着的な意味で。

ポフツと、私は座ったまま体をソファーへと倒す。柔らかく気持ちがいいです。このまま少し、ソファーで寝てしまいたいでしょうか。そう思うと、意識が睡魔に掻き消されそうになる。しかし、そんな淡く甘い欲望を抱いた思考を打ち消すかのように。

ガタン。と、何か音がした。

ギギギツ、といい感じに脳内の危険本能を感じ取ったかのように重い身体を動かして辺りを見回す。双司さんも、さっきの音に気がついたようだ。同じ様に辺りを見回している。見た感じ物が落ちたとか、そういった異常は見られない。

「こつこつ時って、大概嫌な予感がするんですよえ」

人間の性なのか動物の危険本能なのかは知らないが、思わずあの白い扉に視線が向かう。扉には、いつの間にか南京錠が取り付けられている。おまけに貼ってあった紙が、赤から白に変わっていた。しかも、文字が『根性！』ではなく『必殺！』になっている。必ず殺すと書いて必殺。双司さんのセンスは、本当なよくわからない。

ガタン。と、再び音がする。私は見た。今。

……扉、揺れましたよね？

「どうやら愉快的な魑魅魍魎達が中でダンスでも踊っているようだ」

「魑魅魍魎に愉快とかあるんですか！？」

南京錠がガチャガチャ音をたてる。

「ステップを間違えたのか、体をぶつけているようだ」

「明らかに故意にぶつけている様に思えるのは、私の気のせいでしょうか？」

チツ、もう少し強めに術掛ければ良かった、とガタガタと、激しく揺れる扉を見ながら彼は言う。

「まあ気にするな。さつき無理矢理『本』を閉じ込めたからご立腹なだけだろう。しばらくすれば治まるさ」

以前もそうだったし。そう彼は付け加える。

「そういえば小夜。お前、今日帰れそうか？」

私は窓の外へと視線を向ける。雨は未だに降り続く。とゆーか――

――洪水っ!？

「って、なんか道路が水没してるじゃないですか!？」

「梅雨だからな。テレビでも付けてみるか」

そう言うと、彼はテレビのリモコンをどこから取り出しスイッチを入れる。

――本日は…明日の明け方まで…極地的な大雨が……全国各地で…降り続く見込み……です――

プツンと、テレビを消す。……今日帰るのは無理ですね。そう思った一瞬であった。

暇だ。

外は洪水クラスの大雨。仕事はするコトが無い。本なら事務所に山ほどあるが、そのほとんどが私には読めない。双司さんいわく事務所の本は、大体ルーン文字で執筆されているらしい。本人曰く、なるべく信仰を落とす為だとか。

……ルーン文字ってなんですか？

不思議文字は古典の授業で習うものくらいしか、私には理解不能だ。だが、その起源くらいは聞いた事がある。

ルーンとは北欧において、大神『オーディン』が自らを大樹『ユグドラシル』に九日間縛り付けて習得した文字の筈だ。それはあらゆる形で分岐し『アイルランド』『アレグロサクソン』『ケルト』『ゲルマン』と、地域ごとで独自の体型を残し発展した。今でも、一部の民族では使用されているらしい。そして、双司さんが言うには。

「魔術の基本はルーンやアラビア等の『文字』という数式の組み立

てなんだ。意味合いのある『文字』を、魔術という意味合いを持つ『数式』の通りに並べてやる。そこに『魔力』という解答式を入れてやる事で、魔術とは起動する。最も、古代魔術には術者の感情を起源として発動させる物もあるらしいから、断言は出来ないがな」

との事らしい。私にはさっぱり解らなかったですけどね。とにかく事務所にある本は、私には読めないというコトだ。

双司さんかというと、少々やることがあると台所に引きこもってしまった。中は見るとんじやないぞ？　だそうだ。鶴の恩返しですか？　話し相手もない事務所のソファで、右へ左へとゴロゴロする。だが、することも無いので、このまま今度こそ一眠りでもしようか。そう考えた矢先、私の意識は闇へと沈んだ。

——聞こえる。また、あの音だ。

響き渡るパイプオルガンの音色。今度は理解出来る。これは、聞く物を闇へと招く『魔王』の旋律。

ゆっくりと瞳を開ける。私の視界に広がるのは、白い礼拝堂。白で統一された壁。几帳面に、一寸の狂いも無く並べられた木製の長椅子。窓枠には、マグダラの描かれたステンドグラス。聖者のいない十字架。そして、漆黒の闇に彩られた弾き手のいない巨大なパイプオルガン。この空間はまるで、懺悔を聞くための神の箱庭ではなく、罪を内包して溜め込む煉獄のようだった。

懺悔する神もいなく。

罪をゆるす神もいなく。

大罪の聖母が見守る中。十字架に、自分自身を張り付けにして罪を償う。弾き手のいないパイプオルガンは、旋律を奏で続ける。

存在しない神を待つように。

懺悔する人々を包みこむように。

そして、己の弾き手を待つように。

音色は止まない。全てを包みこむまでは――。

●

目の前が、瞼ごしなのに眩しい。体を動かそうとすると、なぜか間接が軋む。妙に重い瞳を開けると、なぜか双司さんの顔がドアップで目の前にあつた。

「小夜、起きたか？」

無表情で尋ねてくる。ホラーだ。ナチュラルにホラーだ。そして何故かデジャビュだ。

「――起きましたから、ちょっと顔を引っ込めて下さい。なんだか、殴りたくなります」

何か言いたげな顔をしながら私から離れる双司さん。どの位寝ていたのかと、窓の外を見てみると朝方の様に明るい。雨は降っておらず、快晴の青空が天に広がっている。

「双司さん。今何時ですか？」

「朝の六時三十分だ。ただし、月曜のな」

――はいっ？

「……双司さん。今、何て言いました？」

固まった笑顔で問い掛ける。私の聞き違いであることを祈りたい。

「今日は、月曜日の六時三十分だよ。君は丸々二日程寝ていたんだぞ？」

「……………」

言葉が出ない。……二日も寝てた？

私は朝に弱いとかそういうコトの前に、9時間寝たら勝手に起きる体質である。その私が一度も起きずに、二日も寝ていたというのは一体……。

「小夜。考えるのもいいが、今日学校じゃないのか？」

ピキッと、世界が止まる。——そうでしたああ！？

「やつ、ヤバイです！！ 双司さん、私急いで帰りますのでこれで失礼します！！ ああゝなんでですかっ！？」

「そのまま行けばいいじゃないか。制服着てるんだし」

分かってない。この人は分かってない。私だって一応女だ。それも花の女子高生だ。このまま学校へ行くなどという恥さらしは出来る筈も無い。

「双司さんのデリカシーをぶっ飛ばすような発言は置いといて、私もう行きますんで！！ 放課後、また来ます！！」

私は双司さんの返事も聞かず、事務所を飛び出す。事務所の窓から見たように、やはり空は一面青に包まれていた。

■ ■ ■

「――行つたか」

俺は、事務所の窓から小夜が走り去るのを見送る。

「まさか、二度も写本に取り込まれるとは。小夜のヤツ、完全に適合者みたいだな」

魔道書はオリジナルであれ写本であれ、自らの『意思』を持つ。魔道書は己の意思で『主』を決め、魔術師としての知識と力を与える。己の根源の意味を果たすために。どうやら、小夜は『写本・魔王』に気に入られたみたいだった。でなければ、二度も同じ人物を取り込んだりはしない。しかし。

「彼女は生憎と、まだ一般人だ。魔道書よ、貴様が何故小夜を選んだのかは知らん。だが、あの子とは契約させんよ」

扉がガタガタと震え始める。まるで、こちらの言葉に返答するかのよう。……やはり、無理矢理にでも契約するつもりか。

だが、それは不可能だ。扉に付けてあつた南京鍵が、甲高い金属音と共に弾け飛ぶ。扉自体を固定してある金具のボルトが、扉から逃げ去るように外れていく。俺は出てくる物に備え、指先に魔力を込めて前方に突き出す。親指と人差し指だけを伸ばした状態。いわゆる、指で銃を作っている状態だ。扉が金具という支えを失って、ゆっくりとこちら側に倒れてくる。そのタイミングで、俺は呟いた。

「？風は時として、事象すらも変質させる？」

指先から出は黒い風。形という物は存在しない。ただ、対象を飲み込むだけの幽玄の存在。影は扉ごと中身を飲み干す。有無を言わず、跡形も無く闇へと送り込む。跡に残ったのは、一部屋分位の『何も存在しない』空間だけだった。

朝の予鈴が教室に鳴り響く。周囲の生徒達は、未だ学友とのお喋りを楽しんだりしている。だがそんな中、私は比喻でも何でも自分の机で突っ伏していた。

「小夜ちゃん。どしたの？なんかダレてるよ……」

友人、秋山香織が少し呆れながら話しかけてくる。どうやら、ネオンはまだ来ていないらしい。で無ければ、私の周りがこんなに静かな筈が無い。今の私は制服はスぺアを使っているが、シャワーを浴びていたら時間が無くなったので髪は濡れっぱなし。さらに、全力疾走してきたので体力は底をついていた。それが、他人の所に泊まって寝過ごしたせいとは言える筈も無く。

「何でもないです。ただ、寝過ごしただけですから」

「珍しいね。小夜ちゃんが寝坊するなんて。深夜番組でも見てたの？」

香織は少し目を輝かせながら聞いてくる。

「残念ながら、深夜番組を見たとしても絶対貴女と同じ番組は見ないと思いますよ？」

だって、香織と言えばミステリーだし。オカルトだし。この子、空想科学とか好きだし。私には、そんな番組見る気すら無いし。

「ふーん、じゃあ——」

——何してたの？

そう聞かれても、正直に言える内容では無い。……何かいいごまかし方は。

ふと頭の中に、あのパイプオルガンの音色が響いてくる。これだ。

「——音楽を聞いてたんですよ。ちょっと不思議なクラシックをね」

私は意味ありげに笑いながら言う。キンコンカンコンと、始業のチャイムが鳴り響く。さて、真面目に授業を受けるとしようか。

私の日常は続く。

ゆつくりと、思い出を紡ぐように。

日常と非日常の生活は、まだまだ終わらない。

あとがき

——時間掛かったあああああ！！

どうも、皆さん桜月九朗です。

コレを書いている時のリアル季節は只今四月中旬。桜も殆ど散ってしまったよっ！！ もう一度位お花見行きたかったよっ！！

どうにもリアルが忙しいこの頃。落ちついて過ごせる日はいつになるやら……。

さておき。

今回は時系列的には第三話のお話。小夜ちゃん、とある不思議体験をする——の巻です。この話は、おいおい続きがあるので詳しくはその機会に。

今回は細かいあとがきは無しです。最後に、この作品を読んで下さった方々へ最大級の感謝を。

04月15日

2011年

執筆

桜月九朗

E p i s o d e 0 5 【紅色聖夜祭】その？（前書き）

皆さまゴメンナサイ。

だいぶ時間が空いてしまいました……orz

とりあえず紅色聖夜祭、前篇投稿です。

Episode 05【紅色聖夜祭】その？

これより、儀式を始める。

己の血で描くのは八卦の円陣。

四方へ置くのは、守護天使達のシンボル。

東方へ火のミカエルを。

西方へ風のラファエルを。

南方へ地のウリエルを。

北方へ水のガブリエルを。

そして中央には、主の血肉を喰らいし槍の欠片を。

天使達は共鳴しあい、聖痕よりアダムを呼び寄せる。アダムは寄り代となり、我らが父は再び降輪する。神の為に建てられた大聖堂はペテロ十字と共に贅となり、信者は神の復活を崇め讃える。
そして主は、自らを貫いた鏃を自らの血肉とするだろう。

我は代行者。

神に仕える騎士ではなく、神を導く先導者。

我は恐れない。

我は望まない。

我は悔やまない。

この身はソナタの為に。ソナタは我が身の為に。
貴方様の御加護を我に。
この献身たる私の魂に貴方様の憐れみを。アーメン。

●

【紅色聖夜祭】

十二月。街はクリスマスの彩り一色。赤や緑のネオンの雪花が咲き
乱れ、鈴の音は人々を祝うように降り注ぐ。クリスマスまであと二
日、イヴまではラスト一日。先週から南が丘学園は他より少しばか
り早い冬休みに入っており、特に日柄やることもない私は双司さん
の事務所に入り浸る毎日を過ごしていた。

「そういえば、もうすぐクリスマスですね。私達も何かパーティと
かしますか？」

折角の世界公認のお祝い事ですし、たまにはこの事務所も彩り鮮や
かにしても良いのではないかと思う今現在。しかし。

「必要ない。なぜなら、俺には縁のゆかりも存在しないからだ」

即答。その間、一秒足らず。うん、もう少しくらい考えてくれたっていいと思います。

「……双司さん、即答はあまりにも酷くないですか？ パーティくらいいいじゃないですかー。この花のない事務所を、クリスマスくらい明るく彩りましょうよー」

ソファアの上で、手足をバタバタさせながら言う。我ながら駄々っ子である。

「……小夜、お前クリスマスの由来は知っているか？」

——由来？ たしかクリスマスは、イエス・キリストの誕生日とその前夜祭だったはずだ。

今となっては恋人同士で過ごしたり、家族でケーキを食べて過ごすというお祭りごとみたいになっているが、元々はそんな感じだった筈。って、何かの本に書いてあった。

「でも、それがどうかしたんですか？」

双司さんの質問と、飾り付けもといパーティを拒否する理由の関係がいまいちわからない。

「宗教というのはだな、人の存在概念を構築する上でかなりの影響力を持つ。たとえば、カトリック教徒の人間と、仏教徒の人間が存在するとして。方や絶対神を信仰する、方や複数の神々から成る世界を信仰する。この二人が互いの信じる概念を話し合った場合——どうなると思う？ ああ、勿論互いが自分の意見を曲げるなんてコトは絶対に無い」

えっと、つまり。

「それは、互いの意見が全く違ってお互いにソレを曲げようとしな
いなら話はずつと平行線ですよね？」

「その通りだ。二つの意見がずつと平行線という事は、その二つの
線が交わることはありえない。後にも先にもただ平行に並ぶだけだ。
それがどういうことか——解かるか？」

「……その二人は仲好くなることは絶対にありえないってことす
か？」

結局、どこまで辿っても平行線なら二人の意見が一致したり和解
したりすることは無い。でも、それがどうかしたのでしょうか？
そんな顔をしていると、双司さんはめんどくさそうに小さく溜息
を吐きながら口を開く。

「以前、秋山香織が言っていただろう？ 俺は元々この国の古神、
それも科学の発展した現代にまで伝承の途絶えない力神だ」

「そういえば、普段はアレですけど神話やオカルトに疎い私ですら
聞いたことのある名前でしたね」

…… 本当に普段はアレですけど、と口には出さずに呟く。

——彼の物の名をスサノオノミコトと言った。

日本神話において知名度で言えば天照大神と並ぶほどの昔の神様。
双司さんと香織との一件があった後日、私は彼の名前について図書
館で調べていたことがあった。その中でも最も有名なのが、ヤマタ

ノオロチの神話だろう。

その昔、日本神話における天上の神々が住まうという地——高天原を追放されたスサノオノミコトは、現在で言う島根県——出雲の国の肥河という土地へと降り立った。そこで、彼は後の伴侶となる櫛名田姫という少女に出会うこととなる。

降り立った地の川の上流から、なにやら人の泣き囁る声が聞こえてくるので向かってみれば、美しい娘を間にして老夫婦が涙を流していた。この出会いが、八岐大蛇討伐の始まりである。

スサノオが話を聞いてみれば、夫婦の名をアシナズチ、テナズチと言い、娘の名をクシナダヒメと言った。

夫婦には八人の娘がいたが、毎年八岐大蛇という八つの頭と八本の尾を持つ大蛇が娘を食べてしまう。そして今年も、その大蛇がやってくる時期が近づき、最後に残った娘——クシナダヒメも食われてしまうので泣いていたのだ。

それを見て、スサノオが何を思ったのかは分らないが——本人に聞く気も無い——クシナダヒメを妻として貰い受ける代わりに、彼が大蛇を退治すると言った。

スサノオが行ったのは、初めにクシナダヒメを大蛇から隠す為に彼女を櫛へと変えて自分の髪に差した。恐らく、自分の身と共にあるのが一番確実に隠し通せると思ったからであろう。次に、八つの門を造りそれぞれに強い酒を満たした酒桶を置いた。これは私の予想だが、大蛇の頭の数に合わせてこういったものを造ったのだと思う。真実は双司さんのみぞ知る。

そうした準備をして、大蛇が来るのを待っていると八つの山、八つの谷に跨る程の大蛇——八岐大蛇がやってきて、八つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲みはじめた。大蛇がその場で酔って寝てしまうと、スサノオノミコトは十拳剣を持ちて、それを切り刻んだとされる。尾を切った時、剣の刃が欠けた。彼は不思議に思い、

尾を裂いてみると中から太刀が出てきた。その後、彼は太刀の一振りをして天照大神へと献上した。それこそが、天叢雲剣であり、草薙の剣である。

これが、スサノオノミコトにおける有名な伝承——ヤマタノオロチ退治の逸話である。

図書館などに行けば必ず一冊は記載されているこの国の古代の英雄。今尚、様々な形でその名を世へ伝える荒人神。それが、浅見屋双司という人物の真名であり魔名。

普段の双司さんを見ている限りでは想像も出来ない——私なんか戦車から見た蟻みたいに小さく見える程の逸脱した存在なのだろう。でも、私にとって彼は、料理上手で、めんどくさがり屋で、地味に言動がセクハラ染みていて、基本的にだらけているがいざという時には頼りになる、そんなヒトなのだ。ぶっちゃけ、昔の話なんか知ったことが。

「——それで、ソレがどうしたんですか？」

「つまり、俺にとってはカトリックってことだ。言っただろう、平行線だと」

双司さんが仏教でクリスマスがカトリック……ああ、そういうことですか。

「単純に言えば、双司さんってクリスマス嫌いなんですね！」

……なんでしょう。なんでそんな頭の可愛そうな子を見るような目で私を見るんですか？って、溜息吐かないで下さいっ！

何処となくいたたまれない気持ちになり、双司さんの視線から逃

げるように窓の外へと目を移した。

『もろびとこぞりて』が、窓の外から響き渡ってくる。クリスマスソングとしては代表的な歌だ。

Joy to the world! The Lord is
come

Let earth receives her king (迎え奉
れ)

Let every heart praise Him roo
m (久しくまちにし)

And heaven and nature sing x2 (主
は来ませり)

And heaven, and heaven and nat
ure sing (主は、主は来ませり)

瞳をつぶり、聞こえて来る音色に合わせて口ずさむ……たしか、聖歌の第二楽章の曲だったでしょうか？

口ずさみながらそんな事を考えつつ、先ほど粉碎されたクリスマス気分浸る。

「う……うう」

なんか今、亡者のような唸り声が聞こえてきたんですけど。

「さ……小夜……」

今度は空耳では無い。たしかに私の名前が呼ばれた。この謎の唸り声の主から。

口ずさむのを止め、瞳を開く。最初に瞳に写ったのは、黒いスーツ

を着た何かが床をはいつくばっている姿だった。

「……双司さん、床に突っ伏して何してるんですか？」

なんと言つか、見た感じ虫の息だ。

「小夜……。せ、聖歌は止めてくれ……」

双司さんが起き上がるうとした瞬間、ガチャと入口の扉が開き何者が駆け込んで来る。

「ヤッホー小夜ちゃん！ さし入れ持ってきたよ！」

「ぐふッ！？」

あ、踏んだ。

「あれ、小夜ちゃんどしたの？ そんなポケーっとした顔して」

私は走り込んで来た人物——秋山香織の足元を指さしてやる。

「……何やってるの浅見屋双司。ノゾキ？ だったら灰にするわよ？」

「自分から踏んでおいて何言つか。と言うより早く退け、スカートだからまる見えだぞ？」

私は思う。この人は毎度毎度一言多いんじゃないかと。

ドスンと、何か巨大な物理音が事務所の室内に響いた。

後に残ったのは顔を真つ赤にした香織と、床にめり込んでいる黒スーツの男、そしてなんとも言えない微妙な空気だった。

「それで？ 珍しいじゃないか。お前が自分からここに来るなんて」

「何よ。来ちゃ悪いって言うの？このノゾキ魔」

あれは不可抗力だ——と言っても無駄だと経験が悟っている。

「まあまあ、香織も双司さんも落ち着いて下さい」

秋山香織にはもう少し慎みを持てと言いたい。それは小夜にも言えることではあるのだが。

以前、女子高生に夢を持つと言われた記憶が蘇るが、何となく理由が分かった。

「でも香織、本当に珍しいですね？ いつもは私が誘わないと来ないのに」

「うん。小夜ちゃんのコトだから、冬休みになっても入り浸ってる

「思ってたね。さし入れ持ってきたの。浅見屋双司の分は無いけど」

「そうですね。香織のスカートの中を覗いた人に、さし入れなんて
いないですよね双司さん？」

「だから不可抗力だ。第一、覗いたわけじゃ無い」

「……ちなみに何色でした？」

「——ピンクだ。しかもチェックの」

そうして、俺は言ってから気がつく。墓穴を掘ったと。

ああ、そういえば馬鹿姉貴や櫛名田姫にも——貴方は一言多い——
などと言われたことがあったっけか。

「——浅見屋双司。貴方、灰になるのと細切れにされるのどっちが
いい？ この際両方にしようかしら。曲がりにも古代神なんだから
——これくらいじゃ死なないでしょ？」

事務所の室内の温度が急激に上昇する。

「——俺が悪かった。悪かったから炎を仕舞ってくれ」

土下座で謝る。我ながら思うが、古神の威厳もひつたくれも無い。
しかし、この事務所で火事を起こされるよりはマシである。

そんな俺を見下しながら、秋山香織はため息をつき炎を静め短刀を
スカートのポケットへと仕舞った。

「はあ、浅見屋双司。貴方一体、床で何してたのよ？」

「簡単に言えば、精神衛生上よろしくない歌を聞いて苦悶に喘いでいた」

頭の上にハテナマークが飛び交うように、秋山香織は首を傾げる。

「あつ、もしかして【もろびとこぞりて】ですか？」

小夜が、しまった……という風に問い掛けてくる。

「【もろびとこぞりて】って、聖歌の第二楽章よね？　それがどうかしたの？」

……題名を聞くだけでも忌ま忌ましい。だが、説明しない事には始まらない。

「小夜には先ほど軽く話したんだが……秋山香織ならば知っているだろう。聖歌とは本来、正教徒の主へ捧ぐオーケストラだ。そこには一切の不純を含まない。一切の例外は存在しない。そして、一切の外神へ対する慈悲もない。主を絶対と讃えるが故に、灰は灰に塵は塵に。外界の異物に対して例外なく働きかける純潔無垢の音響結界。つまり――」

「――ああ、そういうこと。そりゃ純然たる異教徒の神には効果抜群だわね。自分たちの神域を侵されない為に他者の神域を侵す詩。そりゃ耳を塞ぎたくなるわね」

どうやら小夜とは違い彼女は理解してくれたようだ。

「えっ？　香織は今の説明で理解出来たんですかっ!？」

「あー、小夜ちゃん。一応私って陰陽道主体の魔術師だからね？共感したくはないけど、浅見屋双司の言ってることも理解出来るのよ。そうね、例えば小夜ちゃんが風邪を引いたとしましょう。すると小夜ちゃんは身体の中のばい菌をなんとかしようとして薬とか飲むでしょ？ 詳しく言うなら、小夜ちゃんの身体に住んでいる白血球——小夜血球がバイキンを排除しようとして熱が出るの。つまりはそういうこと。聖歌っていう異物が、浅見屋双司の肉体を阻害しているの。小夜ちゃんは寝るときにお腹を出して寝たら風邪を引くけど、浅見屋双司は聖歌という詩を聞いたら風邪を引く。理解出来た？」

「——何となく言いたいことは分かりましたけど小夜血球ってなんですかっ！？ 私の身体にはそんな愉快な名前の細胞さんなんて住んでませんよ！」

その言葉で、思わずミニマムサイズの小夜の大群が、えいやほらと病原菌を退治する光景が思い浮かんでしまった。

多分、秋山香織も同じ思考に辿り着いたのだろう。□元が今にも噴き出しそうに笑っている。

「……小夜血球。大量のミニマム小夜ちゃん——これは売れるっ！」

「——売るなっ！」

「でも、理屈は分かるとしてもアンタ本当に古神でしかも原色の一柱なの？　いくらなんでも軟弱すぎないかしら」

小夜がお茶を汲みに席を外している間に、秋山香織がさし入れと称して買ってきたプリンを頬張りながら呟く。恐らく、魔術師然とした会話を彼女にはあまり聞かれたくないのだろう。秋山香織にとって、小夜とは日常——平穩における象徴なのだ。

「この時期は毎年信仰が極端に弱まるから仕方が無い。第一、お前だって魔術のキレが落ちているだろう？　それだけ、この地に根付いた西洋の信仰は濃いと言う訳だ」

「むっ、確かに平常時の半分以下にまで落ちてるけど……。アンタ原色でしょ？　なんとかしなさいよ」

どうにかなるなら自分自身だってどうにかしたい。

「無茶言っな。そもそも、常時【青】の法則を使っていたら世界が塗り替わっている。アレは元来そういうものだ。三千大千世界において、その在り方を定着させる為の楔であり、破壊する為の穴。先月の一件では短時間——それも内界へ向けて使っていたから問題なかったものの、本来おいそれと使うべきものじゃない」

「——ちよつと待って。その物言いだとまるで……。外世界を肯定するような……」

「……少し話し過ぎたか。忘れる、年寄りの戯言だ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ」

どうにも歳をとると口が軽くなるらしい。

何か喚いている秋山香織をしり目に、俺は立ちあがり部屋を後にする。だが、これは彼女が魔術という化法を身に宿し、生業として行く以上いずれは突き当たる壁だろう。老婆心……という言い方は適切ではないが、自分が手を焼いてやる必要はない……のだが。

どうにも、出自ははっきりとしないとは言え彼女——櫛名田姫の血脈。俺はソレに世話を焼きたがっているようだ。

甘い、砂糖菓子よりも断然甘い。まるで天上の姉のようだ。故に。

「——ヒントをやるう秋山香織。お前が耳にしたのは、真理の理へ続く投石だ。トリスメギストス、アウグステイヌス、マグス、カリオストロ、ファウスト、クロウリー、安倍晴明、ダルク——数多くの英雄、魔術師たちが求めた無意識下の秘法。アカシツクレコード、未知への壁、アカシヤ盤、現世界の黙示録であり旧世界の遺物。そして、真世界の設計図。もし、お前がソレに挑むと言うなら……心して懸かれ。でなければ、喰われて終わりだ。せめて、俺と同格になれなければ諦めろ」

平坦に、率直に、音のない声で伝える。

背後で、息をのむ音が聞こえた。これで潰れるならそれまで。彼女の物語は予定調和のまま終わるだろう。成ればこそ、脱却出来るか……楽しみにしているよ秋山香織。

そうして、俺は今度こそ部屋を後にした。

私——秋山香織は浅見屋双司と名乗る男に対し、二度目の恐怖を抱いた。

以前も思ったが、アレは決して人間の敵う相手ではない。いや、それどころか人外でも敵う相手ではない。そう、常識という枷から完全に逸脱した存在。陳腐な表現だが、空に浮かぶ星を掴もうとするようなものだ。

アレで軟弱？ 否、そんな訳が無い。彼が部屋を出る前に口にした言葉——それだけで、あの瞬間間違はなく世界が震えた。何故、こんな化物が此処にいるのか。何故、こんな化物が存在するのに、この世界は無事なのか。

あの瞬間、間違はなく世界という存在は浅見屋双司という男に恐怖したのだ。

「——ははっ、なんて滑稽」

気づかぬ内に握りしめていた拳には、大量の冷や汗が浮かんでいる。

私はどうやってあんな化物に喧嘩を売ろうとしていたのか。私はどうやってあの化物に勝つ気でいたのか。戦車と蟻どころではない。蟻ですら、戦車の部品に入り込めばその命を持って不具合程度起こすことが出来るというのに——アレにはそんな常識は存在しない。以前、ボロボロになったアイツは——今なら自分をたやすく

殺せる——そう言ったが微塵も思えない。あの時アイツに渡された短刀でだって、先ほどの浅見屋双司という存在を殺しつくせるとは思えない。

なのにアイツは、自分と同格となれと言った。

「何、その夢物語？ あんな化け物と同格？ うぬぼれるな私。次元が違うとかそういう問題じゃない。アレはヒトには……理解出来ない」

意図せずに口に出た言葉が、さらに私の恐怖を加速させる。

「……香織？ そんな神妙な顔してどうかしましたか？」

思考の中断。気が付けば、小夜ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「何か顔色悪いですよ？ 買って来たプリンにでも当たりましたか……」

聞こえてくる小夜ちゃんの声。恐怖とはまるで正反対な、能天気——などと言ったら彼女に失礼か。間違いなく此処にある日常を感じさせてくれる声が身体に染みる。

「……ううん、なんでもない。なんでもないよ小夜ちゃん」

なるべく、今の自分に出せる精一杯の声を出す。どうだろうか？ 私はいつもの私のように振る舞えているだろうか？

「——なんでもない筈がないでしょう。声震えていますよ？」

どうやら、見事に失敗したようである。

「そういえば双司さんは何処に行ったんですか？ 人にお茶だけ淹れさせておいて頼んだ本人がいないなんて……」

まさかつ！ と彼女は声を張り上げる。

「双司さん……あの人香織に何か余計な事でもしたんですね！？ でないと唯我独尊フリーダムな香織がここまでキャラ崩壊することなんてありません！」

いや、その評価もどうなのだろうか？ 自業自得とはいえ、日常における自分のキャラを多少訂正したくなってきた。ではなく。

「い、いや小夜ちゃん。私は大丈夫だから……ね？」

もし、あの恐怖の矛先が小夜ちゃんに及んだら——考えただけでもゾツとする。

これ以上アイツと彼女を引き合わせてはならない。だって、アレはヒトと共に歩けるものではないのだから。その筈なのに。

「なんですかその悪い男に掴まったけど必死に庇うような盲目女じみた言い訳は！ 女の子が傷ついていたら大概男が悪いんです！ そうに決まっています。それが八割がたの世の中の真理です！」

ものすごい暴論で真理を語られた。

「というわけで——私、ちょっと双司さんぶん殴ってきます」

どたばたと事務所の奥へと引っこんでいく小夜ちゃん。

——ちよつ、小夜、いきなりなにを！？　って何でパイプ椅子を頭上に掲げる！？　ま、待てっ、それは洒落に——。

ガコンと、何やら鈍い音がして静かになった。

あー、うん、なんだろう。先ほどの悩みが一瞬で吹き飛んだような——そんな気がした。

「……小夜ちゃんって、たまに常識で測れないことがあるよね」

どこかスッキリしたような笑顔で戻ってきた彼女を見て、そんな言葉が口に出た。

「なんか、香織にだけは言われたくないセリフを吐かれた気がしますけど」

ゴメンね小夜ちゃん。私も色々と突拍子のないことしている自覚はあるけど、今の小夜ちゃん程じゃないと思う。

「それはそうと、さつき双司さんに聞いてきたんですけど今日はもう帰っていいそうです。別段やることも無いんですって。てことでどこか遊びに行きましょう！」

「えっ？　小夜ちゃん！？」

そう言つと、彼女は私の手を引いて事務所を飛び出す。

かくして、いつの間にやら私は小夜ちゃんに連れ出されて行くのであった。

「そういえば、ネオンって今何してるんでしょうね？ 冬休みに入ってから、まだ一度も顔見てませんけど」

香織を連れて事務所を出た私は、特にどこかの店に入るのでもなくブラブラと街中を歩いていた。

「彼女なら確か、まだ見ぬ秘境を目指して旅に出るとか言ってたよ？」

「ネオンは一体冬休み中で何をやらかすつもりなんでしょうか……」

何となくだが、今空にキラんと笑みを浮かべたネオンの幻影が見えた。

「なんででしょう。冬休み明けたらアマゾンの奥地で原住民と会ってきたとか言ってる彼女の姿が頭に浮かびました……」

「あの金髪なら……ありえなくはないね」

本物のオカルトに身を突っ込んでいる魔術師からのお墨付き程怖い者はないだろう。ネオン、貴女一体何者ですか？

Joy to the world! The Lord is
come もろびとにきこられて

Let earth receive her king (迎え奉
れ)

Let every heart prepare Him room
(久しくまちにし)

And heaven and nature sing x2 (主
は来ませり)

And heaven, and heaven and nat
ure sing (主は、主は来ませり)

他愛もない話をしながら、聖歌の響く街中を揃って歩く。

「そういえば、香織は冬休み明けるまでどうするんですか？」

「うーん、私は多分ずっとこっちにいるかなあ。ちょっと先月の一件で実家はゴタゴタしてて居ずらいんだよね。でもお正月は流石に戻らないと駄目かも。巫女としての仕事もあるし」

という言葉聞いて思い出したが、香織は本物の巫女さんでした。うーん、これは香織をからかう為にも巫女服姿を拝みに行くしかないのでしょうか。

「小夜ちゃんは実家とか帰らなくていいの？」

「実家ですか……。私あんまり帰りたくないですよー。そりや向こうから帰ってこいと言われれば戻るかもしれないですけど、連絡無いなら放置です。多分、双司さんさえ良ければずっと事務所に入り浸ってますね」

食費浮きますし、と言葉を続ける。同時に、一つの妙案を思い付いた。うん、後で双司さんに相談してみましよう。どうせあの人もお正月は暇の筈です。

「——なんだろう。今、変な寒気がしたんだけど」

ふふふ、その寒気が現実になることを祈ってますよ香織。お正月、楽しみにしてください。きっと、今の私は相当に黒い笑みを浮かべているだろう。破天荒に被害を被っている私としては、たまには仕返ししてやらないとストレスが溜まるのである。

「さて、目的もなく歩くのも疲れてきましたし、どこか喫茶店で休憩しましょうか」

笑みを悟られる前に、私は近場の喫茶店へ彼女の手を引く。お茶でも飲んで、思考を切り替えましようかね。

などと、そんな考えでのんびりお茶を楽しんでいる時にソイツは現れた。

室内の席が空いていなかったのでオープンテラス。小夜ちゃんは

抹茶オレ。私はミルクティー。互いのお気に入りのソレを飲みながら冬休みの今後の予定を立てていた時だった。

「——失礼。少々、道をお聞きしてもよろしいかな？」

流暢な日本語だと、私は思った。外国人特有の訛りというものが無い。まるでテレビの向こう側のアナウンサーが喋っているような声だ。なんかこう、無機質ともとれるし、舞台劇の役者が芝居めいた口調で喋っているようにも聞こえる。

「はいっ！？ えっと、きゃんゆうすぴーくじゃぱにーず？」

「黒髪のお嬢さん。私は日本語で喋っているつもりですが、もしかすると伝わっていないかったですかな？」

日本語の問いに何故か舌も回っておらず発音も怪しい英語で返す小夜ちゃんへ、人が良さそうに頬笑みながら問いかける外人の男。

髪は金髪、瞳はブルー、背丈は長身。服装は——アレだ、教会にいる神父が着ているカソックと呼ばれる衣服。胸元に十字架が輝いているところを見ると、恐らく彼は見た目通りの神父と呼ばれる人種なのだろう。外人の男だ。そう、男。

整っている顔つきを見る限り、こういうのがイケメンと呼ばれる分類になるのであろう。

「いきなりで驚かせてしまって申し訳ない。実は……道に迷ってしまいました。金見教会病院というところへ行きたいのですが、どちらか道がをお分かりになりますか？」

——金見教会病院。それは南ヶ丘市北部に位置する病院の名だ。詳しくは知らないが、総合病院の敷地内に礼拝堂が建てられている、

日本にしては珍しい病院である。

「あの教会がある病院ですね。それでしたら、今いる道をずっと真っ直ぐに行けば見えますよ。分からなくなったら、十字路になっている所で北って書いてある道を通って真っ直ぐ進めばいいです。この商店街って、それ以外に道がないから迷うことはないと思います」

声すら発さない私を余所に、小夜ちゃんは男の質問に答えていく。

「そうでしたか！ 確かこういうのをこの国の諺で……灯台もと暗しでしたかな？ いやはや、無知蒙昧とはこのことか。しかし、こうして正しい言を知る機会を与えてくれた君たちと主に感謝いたします。それでは美しいお嬢様方、改めて感謝いたします。それでは……」

そう言って、男は去っていく。そうして、私はようやく息を吐くことが出来た。

「結構カッコいい神父さんでしたね……香織？」

「あ、うん、どうかした？」

「いや、どうかしたのは貴方でしょう。ぼーっとして」

「——ちょっと嫌な事思い出しただけ。小夜ちゃん、あんな見た目だけの男に騙されたらダメだよ？」

「いきなり何言ってるんですか。って、なんで私の抹茶オレに手を伸ばします！？ しかも一気飲み！？」

騒ぐ小夜ちゃんを尻目に、私はカップの中身を飲み干す。ふう、少しは気分晴れたかな？

「さて、今日はもう帰ろう。と言う訳で、小夜ちゃんもあんまりブラブラしてちゃ駄目だよ？」

よし、今日はゆっくりとお風呂に浸かって寝るとしよう。こういふ日はさっさと寝てしまふのが一番である。

その連絡を受けたのは、小夜と秋山香織が事務所を出て直ぐのことであつた。

「やあ、久しぶりだね友よ。こうして電話越しとはいえ話すのは百年ぶりくらいだね。元気かい？」

「ああ、お前は聞かなくても元気そうだな」

「そこは、君も元気かと聞き返して欲しいところかな」

——様式美と言う奴さ。

そう言つて、幼さを感じさせるボーイソプラノの声が笑う。その声を聞いていると、夢の国の住人の話を思い出す。あれは何と言ったか。心も身体も、ずっと少年のまま生き続ける妖精の物語。思うが故に、現実から乖離してしまった主人公の喜劇を。

「それで、何の用だ？ 普段は欧州の山奥に引きこもっているお前が連絡を寄こすなんて、どうせロクなことじゃないんだろう？」

「極東の島国に引きこもっている君が言うかい？ まあ、その予想通りロクなことじゃないよ。ボクにとっても、君にとってもね」

少年の声は一息置き。

「——実は、教会の連中がその国に入ったらしい。それも、彼の槍の欠片の一つを持ってね」

その言葉に、一瞬時を忘れた。

「君の居る極東は歪みが溜まりやすい場所だからね。古来よりそういう話には事欠かない。だからこそ、穴が空き易い。多分、新しい界でも作るつもりなんじゃないかな」

「馬鹿か？ 確かにこの国は世界中から見ても穴は空き易い場所だが、だからこそ歪みの均衡が崩れやすい。そんな場所で大掛かりな儀式をすれば、一時的には成功しても直ぐに安定せず崩壊する。それが理解出来ない連中でもないだろう？」

言葉にしながら、俺は今代の教会の総主——法皇ゲオルギウスの姿を思い出す。

アレは色々とぶつ飛んだ人間だが、頭が悪い訳ではない。むしろアレは人の極致に到達している人間だ。貴重な十三の欠片の内の一つを使つて、半ば賭けみたいなきことをしでかす訳がない。

「仮に成功してしまつたら、僕のような死者には一大事だからね。今そつちに向かつてるところだよ。それで、君は動くかい？」

「……知らぬふりをしておくのも難しい話だろう。仮に成功でもしてみる——禁忌や亜種の迫害の時代に逆戻りだ」

「——そして、異端者はすべからず排除される。まあ、そんな事態になるのはゴメンだから僕も動くんだけどね」

「お前こつちに来る気か？」

「勿論！　と言うより、もう領海に入つたところだけどね。あと……一時間くらいで到着するんじゃないかな」

クスクスと、電話口で笑う声が聞こえる。
まるでイタズラに成功した子供のようだ。

「君も動くなら、教会の連中が向かつた場所を伝えておくよ。確か場所はミナミ……なんて読むのかな？　えっ、ああ。ミナミガオカね。うん、ミナミガオカつて土地らしいよ。それじゃ、Auf Wiederhoren！（さようなら）」

その言葉を最後に、受話器の向こうからは少年の声が聞こえなくなる。

「ミナミガオカつて——南ヶ丘のこと……だよな」

よりもよつてこの時期に、この街で、こんな面倒なことが起る世の中に思わず殺意を覚えたのだった。

「……暇です」

寒さの厳しいお昼下がり。

香織と別れた私は事務所に戻る気にも自宅に戻る気にもなれず、ブラブラと一人散歩をしているのであった。

「もう、香織もなんでいきなり帰っちゃうんですか。そんなにあの神父さん好みじゃなかったんですかねー」

持ち帰り用に買った抹茶オレを飲みながら呟く。

ほんと、香織どうしたんですかねー。

しかしながら、これからどうしましょう？ 無闇に買い物してお金を浪費するのも気が引けますし。

思わず俯きながら考え込んでしまう私。道端でそうこうしていると、

「あら……貴女？」

ふと、声がかかる。

誰かと思いい顔を上げてみれば——どえらい美人さんがいた。

「——ああ、やっぱり。前に公園に居た子よね？」

公園？ はて？ 何のことでしょう？

彼女の言葉に、ゆっくりと記憶を思い起こす。こんな美人さんなら普通忘れないと思うんですが……。

とりあえず、女性を上から下まで観察してみる。

ゆったりとした長袖の白いワンピースに、茶色の厚手のコートを羽織っている。裾の隙間から見える生足が。白く美しい脚線を描いている。そして、服の上からでも圧倒的に理解出来ること。うん、スタイルは圧倒的に私の負けです。全体的に線は細いが、出るころはしっかりと出ているし、引つ込む所は引つこんでいる。こう、全体的なバランスで言えば香織やネオンよりも彼女に軍配が上がるだろう。少女ではなく、女性としての魅力の差で。

自分と比較してしまうと圧倒的な戦力差で叩き潰されてしまうので、極力意識しないようにして今度は女性の頭へと目を向ける。

見つめられているせいか、ほんのりと頬を赤くしている彼女は同性から見てもトキメイてしまいそうだ。枝毛の見えない長く艶のある黒髪も、彼女のその表情を際立てることに一役買っているように思える。

……長い黒髪？

「——黒髪……美人……公園……お姉さん……ブランク？」

「思い出してくれたかしら？」

「ああ！ ブランコの幽霊お姉さん！」

その言葉に、女性はガクツと身体を倒した。

「たしかに……あの時は幽霊っぱかったのは認めるけど、その思い出し方はないじゃないかと思うの。お姉さん……泣いていいかな？」

「私が全面的に悪かったですから、そんな本当に泣きそうな顔しないで下さい！ ひしひしと罪悪感に打ちひしがれそうです……」

かくして、無事女性のことを思い出した私です。話を聞けば彼女も暇だということで、以前彼女と出会った公園で世間話でもするこ
とになりました。

「はい、紅茶でいいかしら？」

「……なんですかコレ。【自前花伝きつと君の想像しているミルクを使ったミルクティー】って。あまりにもネーミングがぶっ飛んでますね……」

「その飲料メーカーって、ずいぶん前に消費者に何かの不祥事で随分叩かれたらしくて……。それ以来、何を開き直ったのかずっとそんな感じの商品を出し続けてるのよ」

ほら見て、と女性は自分の持っている缶コーヒーを私に見せる。

【ドキッ 苦味スツキリ暗黒街コーヒー】

「暗黒街って何ですかっ！ どう見ても苦味をスツキリどころか増長させてますよねっ?!」

「それがねー、コレ飲んでみると結構甘口で美味しいのよ。しかも、寝る前に飲むと安眠効果もあるらしいわ」

「——暗黒街ってそういう意味ですかっ!？」

眠気覚ましにと飲んでも、安眠効果があるのでは意味が無いだろう。翌朝×切前のプログラマーがすっかり飲んで、気が付けば朝になっていて精神的に暗黒街行き……。イヤ過ぎます。

「まあ、お姉さんは寝るのにはもう飽きちゃったから、あんまり意味はないんだけどね」

そう言って、グイッと一気飲み。

美人がやると、男っぽい仕草も様になるのが悔しいです。

「——ふう。そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は崎守ミサキ。職業は——家事手伝いってことにしておいてくれると嬉しいかな?」

「つまり——ニートですか」

「……そうはつきりと言われると傷つくわね。仕方ないじゃない。最近までずっと入院してたんだから」

「あつ、ごめんなさい。最近までってことは、もう退院されたんですか？」

「うん、と言っても外に出られるようになったのは本当に最近のことだけどね」

やっぱりシャバの空気は美味しいわー、と何処ぞにお勤め後みたいなセリフを吐く。

「それで、お嬢さんは何てお名前なのかしら？ まさか、人は名乗ったのに自分は名乗らないなんてことはないわよね？」

「安心して下さい、その辺りの礼儀はわきまえてます。秋月小夜——南ヶ丘学園の二年生です」

「うん、自己紹介良く出来ました。小夜ちゃん……って呼んで良いわよね？ まさかこんな所で小夜ちゃんに会えるとは思ってなかったなあ。あの時は悪い事しちゃったし」

「……あの時？」

はて、何のことだろうか？

「んー、小夜ちゃん覚えてなくても無理ないよ。あの後、直ぐに

「恐いお兄さんが助けてくれたからね。きにしない、きにしない」

「頭を撫でるのは構わないんですけど、そんな小さい子供を撫でる風にするのは止めて下さいっ！」

などと抗議してみても、その手をどかす気になれないのは年上の魔力か。

結局、しばらくはがままにされていた私であった。

Episode 05【紅色聖夜祭】その？（前書き）

【紅色聖夜祭】その？です。

続きますので、読まれてない方はその？からお読みください。

Episode 05【紅色聖夜祭】その？

これより、儀式を始める。

己の血で描くのは八卦の円陣。

四方へ置くのは、守護天使達のシンボル。

東方へ火のミカエルを。

西方へ風のラファエルを。

南方へ地のウリエルを。

北方へ水のガブリエルを。

そして中央には、主の血肉を喰らいし槍の欠片を。

天使達は共鳴しあい、聖痕よりアダムを呼び寄せる。アダムは寄り代となり、我らが父は再び降輪する。神の為に建てられた大聖堂はペテロ十字と共に贅となり、信者は神の復活を崇め讃える。
そして主は、自らを貫いた鏃を自らの血肉とするだろう。

我は代行者。

神に仕える騎士ではなく、神を導く先導者。

我は恐れない。

我は望まない。

我は悔やまない。

この身はソナタの為に。ソナタは我が身の為に。
貴方様の御加護を我に。
この献身たる私の魂に貴方様の憐れみを。アーメン。

●

【紅色聖夜祭】

十二月。街はクリスマスの彩り一色。赤や緑のネオンの雪花が咲き
乱れ、鈴の音は人々を祝うように降り注ぐ。クリスマスまであと二
日、イヴまではラスト一日。先週から南が丘学園は他より少しばか
り早い冬休みに入っており、特に日柄やることもない私は双司さん
の事務所に入り浸る毎日を過ごしていた。

「そういえば、もうすぐクリスマスですね。私達も何かパーティと
かしますか？」

折角の世界公認のお祝い事ですし、たまにはこの事務所も彩り鮮や
かにしても良いのではないかと思う今現在。しかし。

「必要ない。なぜなら、俺には縁のゆかりも存在しないからだ」

即答。その間、一秒足らず。うん、もう少しくらい考えてくれたっていいと思います。

「……双司さん、即答はあまりにも酷くないですか？ パーティくらいいいじゃないですかー。この花のない事務所を、クリスマスくらい明るく彩りましょうよー」

ソファアの上で、手足をバタバタさせながら言う。我ながら駄々っ子である。

「……小夜、お前クリスマスの由来は知っているか？」

——由来？ たしかクリスマスは、イエス・キリストの誕生日とその前夜祭だったはずだ。

今となっては恋人同士で過ごしたり、家族でケーキを食べて過ごすというお祭りごとみたいになっているが、元々はそんな感じだった筈。って、何かの本に書いてあった。

「でも、それがどうかしたんですか？」

双司さんの質問と、飾り付けもといパーティを拒否する理由の関係がいまいちわからない。

「宗教というのはだな、人の存在概念を構築する上でかなりの影響力を持つ。たとえば、カトリック教徒の人間と、仏教徒の人間が存在するでしょう。方や絶対神を信仰する、方や複数の神々から成る世界を信仰する。この二人が互いの信じる概念を話し合った場合——どうなると思う？ ああ、勿論互いが自分の意見を曲げるなんてコトは絶対に無い」

えっと、つまり。

「それは、互いの意見が全く違ってお互いにソレを曲げようとしな
いなら話はずつと平行線ですよね？」

「その通りだ。二つの意見がずつと平行線という事は、その二つの
線が交わることはありえない。後にも先にもただ平行に並ぶだけだ。
それがどういうことか——解かるか？」

「……その二人は仲好くなることは絶対にありえないってことす
か？」

結局、どこまで辿っても平行線なら二人の意見が一致したり和解
したりすることは無い。でも、それがどうかしたのでしょうか？
そんな顔をしていると、双司さんはめんどくさそうに小さく溜息
を吐きながら口を開く。

「以前、秋山香織が言っていただろう？ 俺は元々この国の古神、
それも科学の発展した現代にまで伝承の途絶えない力神だ」

「そういえば、普段はアレですけど神話やオカルトに疎い私ですら
聞いたことのある名前でしたね」

…… 本当に普段はアレですけど、と口には出さずに呟く。

——彼の物の名をスサノオノミコトと言った。

日本神話において知名度で言えば天照大神と並ぶほどの昔の神様。
双司さんと香織との一件があった後日、私は彼の名前について図書
館で調べていたことがあった。その中でも最も有名なのが、ヤマタ

ノオロチの神話だろう。

その昔、日本神話における天上の神々が住まうという地——高天原を追放されたスサノオノミコトは、現在で言う島根県——出雲の国の肥河という土地へと降り立った。そこで、彼は後の伴侶となる櫛名田姫という少女に出会うこととなる。

降り立った地の川の上流から、なにやら人の泣き囁る声が聞こえてくるので向かってみれば、美しい娘を間にして老夫婦が涙を流していた。この出会いが、八岐大蛇討伐の始まりである。

スサノオが話を聞いてみれば、夫婦の名をアシナズチ、テナズチと言い、娘の名をクシナダヒメと言った。

夫婦には八人の娘がいたが、毎年八岐大蛇という八つの頭と八本の尾を持つ大蛇が娘を食べてしまう。そして今年も、その大蛇がやってくる時期が近づき、最後に残った娘——クシナダヒメも食われてしまうので泣いていたのだ。

それを見て、スサノオが何を思ったのかは分らないが——本人に聞く気も無い——クシナダヒメを妻として貰い受ける代わりに、彼が大蛇を退治すると言った。

スサノオが行ったのは、初めにクシナダヒメを大蛇から隠す為に彼女を櫛へと変えて自分の髪に差した。恐らく、自分の身と共にあるのが一番確実に隠し通せると思ったからであろう。次に、八つの門を造りそれぞれに強い酒を満たした酒桶を置いた。これは私の予想だが、大蛇の頭の数に合わせてこういったものを造ったのだと思う。真実は双司さんのみぞ知る。

そうした準備をして、大蛇が来るのを待っていると八つの山、八つの谷に跨る程の大蛇——八岐大蛇がやってきて、八つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲みはじめた。大蛇がその場で酔って寝てしまうと、スサノオノミコトは十拳剣を持ちて、それを切り刻んだとされる。尾を切った時、剣の刃が欠けた。彼は不思議に思い、

尾を裂いてみると中から太刀が出てきた。その後、彼は太刀の一振りをして天照大神へと献上した。それこそが、天叢雲剣であり、草薙の剣である。

これが、スサノオノミコトにおける有名な伝承——ヤマタノオロチ退治の逸話である。

図書館などに行けば必ず一冊は記載されているこの国の古代の英雄。今尚、様々な形でその名を世へ伝える荒人神。それが、浅見屋双司という人物の真名であり魔名。

普段の双司さんを見ている限りでは想像も出来ない——私なんか戦車から見た蟻みたいに小さく見える程の逸脱した存在なのだろう。でも、私にとって彼は、料理上手で、めんどくさがり屋で、地味に言動がセクハラ染みていて、基本的にだらけているがいざという時には頼りになる、そんなヒトなのだ。ぶっちゃけ、昔の話なんか知ったことが。

「——それで、ソレがどうしたんですか？」

「つまり、俺にとってはカトリックってことだ。言っただろう、平行線だと」

双司さんが仏教でクリスマスがカトリック……ああ、そういうことですか。

「単純に言えば、双司さんってクリスマス嫌いなんですね！」

……なんでしょう。なんでそんな頭の可愛そうな子を見るような目で私を見るんですか？って、溜息吐かないで下さいっ！

何処となくいたたまれない気持ちになり、双司さんの視線から逃

げるように窓の外へと目を移した。

『もろびとこぞりて』が、窓の外から響き渡ってくる。クリスマスソングとしては代表的な歌だ。

Joy to the world! The Lord is
come

Let earth receive her king (迎え奉
れ)

Let every heart prepare Him room
(久しくまちにし)

And heaven and nature sing x2 (主
は来ませり)

And heaven, and heaven and nat
ure sing (主は、主は来ませり)

瞳をつぶり、聞こえて来る音色に合わせて口ずさむ……たしか、聖歌の第二楽章の曲だったでしょうか？

口ずさみながらそんな事を考えつつ、先ほど粉碎されたクリスマス気分浸る。

「う……うう」

なんか今、亡者のような唸り声が聞こえてきたんですけど。

「さ……小夜……」

今度は空耳では無い。たしかに私の名前が呼ばれた。この謎の唸り声の主から。

口ずさむのを止め、瞳を開く。最初に瞳に写ったのは、黒いスーツ

を着た何かが床をはいつくばっている姿だった。

「……双司さん、床に突っ伏して何してるんですか？」

なんと言つか、見た感じ虫の息だ。

「小夜……。せ、聖歌は止めてくれ……」

双司さんが起き上がるうとした瞬間、ガチャと入口の扉が開き何者が駆け込んで来る。

「ヤッホー小夜ちゃん！ さし入れ持ってきたよ！」

「ぐふッ！？」

あ、踏んだ。

「あれ、小夜ちゃんどしたの？ そんなポケーっとした顔して」

私は走り込んで来た人物——秋山香織の足元を指さしてやる。

「……何やってるの浅見屋双司。ノゾキ？ だったら灰にするわよ？」

「自分から踏んでおいて何言つか。と言うより早く退け、スカートだからまる見えだぞ？」

私は思う。この人は毎度毎度一言多いんじゃないかと。

ドスンと、何か巨大な物理音が事務所の室内に響いた。

後に残ったのは顔を真つ赤にした香織と、床にめり込んでいる黒ス
ーツの男、そしてなんとも言えない微妙な空気だった。

「それで？ 珍しいじゃないか。お前が自分からここに来るなんて」

「何よ。来ちゃ悪いって言うの？このノゾキ魔」

あれは不可抗力だ——と言っても無駄だと経験が悟っている。

「まあまあ、香織も双司さんも落ち着いて下さい」

秋山香織にはもう少し慎みを持てと言いたい。それは小夜にも言えることではあるのだが。

以前、女子高生に夢を持つと言われた記憶が蘇るが、何となく理由が分かった。

「でも香織、本当に珍しいですね？ いつもは私が誘わないと来ないのに」

「うん。小夜ちゃんのコトだから、冬休みになっても入り浸ってる

「思ってたね。さし入れ持ってきたの。浅見屋双司の分は無いけど」

「そうですね。香織のスカートの中を覗いた人に、さし入れなんて
いないですよね双司さん？」

「だから不可抗力だ。第一、覗いたわけじゃ無い」

「……ちなみに何色でした？」

「——ピンクだ。しかもチェックの」

そうして、俺は言ってから気がつく。墓穴を掘ったと。

ああ、そういえば馬鹿姉貴や櫛名田姫にも——貴方は一言多い——
などと言われたことがあったっけか。

「——浅見屋双司。貴方、灰になるのと細切れにされるのどっちが
いい？ この際両方にしようかしら。曲がりにも古代神なんだから
——これくらいじゃ死なないでしょ？」

事務所の室内の温度が急激に上昇する。

「——俺が悪かった。悪かったから炎を仕舞ってくれ」

土下座で謝る。我ながら思うが、古神の威厳もひつたくれも無い。
しかし、この事務所で火事を起こされるよりはマシである。

そんな俺を見下しながら、秋山香織はため息をつき炎を静め短刀を
スカートのポケットへと仕舞った。

「はあ、浅見屋双司。貴方一体、床で何してたのよ？」

「簡単に言えば、精神衛生上よろしくない歌を聞いて苦悶に喘いでいた」

頭の上にハテナマークが飛び交うように、秋山香織は首を傾げる。

「あつ、もしかして【もろびとこぞりて】ですか？」

小夜が、しまった……という風に問い掛けてくる。

「【もろびとこぞりて】って、聖歌の第二楽章よね？　それがどうかしたの？」

……題名を聞くだけでも忌ま忌ましい。だが、説明しない事には始まらない。

「小夜には先ほど軽く話したんだが……秋山香織ならば知っているだろう。聖歌とは本来、正教徒の主へ捧ぐオーケストラだ。そこには一切の不純を含まない。一切の例外は存在しない。そして、一切の外神へ対する慈悲もない。主を絶対と讃えるが故に、灰は灰に塵は塵に。外界の異物に対して例外なく働きかける純潔無垢の音響結界。つまり――」

「――ああ、そういうこと。そりゃ純然たる異教徒の神には効果抜群だわね。自分たちの神域を侵されない為に他者の神域を侵す詩。そりゃ耳を塞ぎたくなるわね」

どうやら小夜とは違い彼女は理解してくれたようだ。

「えっ？　香織は今の説明で理解出来たんですかっ!？」

「あー、小夜ちゃん。一応私って陰陽道主体の魔術師だからね？共感したくはないけど、浅見屋双司の言ってることも理解出来るのよ。そうね、例えば小夜ちゃんが風邪を引いたとしましょう。すると小夜ちゃんは身体の中のばい菌をなんとかしようとして薬とか飲むでしょ？ 詳しく言うなら、小夜ちゃんの身体に住んでいる白血球——小夜血球がバイキンを排除しようとして熱が出るの。つまりはそういうこと。聖歌っていう異物が、浅見屋双司の肉体を阻害しているの。小夜ちゃんは寝るときにお腹を出して寝たら風邪を引くけど、浅見屋双司は聖歌という詩を聞いたら風邪を引く。理解出来た？」

「——何となく言いたいことは分かりましたけど小夜血球ってなんですかっ！？ 私の身体にはそんな愉快な名前の細胞さんなんて住んでませんよ！」

その言葉で、思わずミニマムサイズの小夜の大群が、えいやほらと病原菌を退治する光景が思い浮かんでしまった。

多分、秋山香織も同じ思考に辿り着いたのだろう。□元が今にも噴き出しそうに笑っている。

「……小夜血球。大量のミニマム小夜ちゃん——これは売れるっ！」

「——売るなっ！」

「でも、理屈は分かるとしてもアンタ本当に古神でしかも原色の一柱なの？　いくらなんでも軟弱すぎないかしら」

小夜がお茶を汲みに席を外している間に、秋山香織がさし入れと称して買ってきたプリンを頬張りながら呟く。恐らく、魔術師然とした会話を彼女にはあまり聞かれたくないのだろう。秋山香織にとって、小夜とは日常——平穩における象徴なのだ。

「この時期は毎年信仰が極端に弱まるから仕方が無い。第一、お前だって魔術のキレが落ちているだろう？　それだけ、この地に根付いた西洋の信仰は濃いと言う訳だ」

「むっ、確かに平常時の半分以下にまで落ちてるけど……。アンタ原色でしょ？　なんとかしなさいよ」

どうにかなるなら自分自身だってどうにかしたい。

「無茶言っな。そもそも、常時【青】の法則を使っていたら世界が塗り替わっている。アレは元来そういうものだ。三千大千世界において、その在り方を定着させる為の楔であり、破壊する為の穴。先月の一件では短時間——それも内界へ向けて使っていたから問題なかったものの、本来おいそれと使うべきものじゃない」

「——ちよつと待つて。その物言いだとまるで……。外世界を肯定するようっな……」

「……少し話し過ぎたか。忘れる、年寄りの戯言だ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ」

どうにも歳をとると口が軽くなるらしい。

何か喚いている秋山香織をしり目に、俺は立ちあがり部屋を後にする。だが、これは彼女が魔術という化法を身に宿し、生業として行く以上いずれは突き当たる壁だろう。老婆心……という言い方は適切ではないが、自分が手を焼いてやる必要はない……のだが。

どうにも、出自ははっきりとしないとは言え彼女——櫛名田姫の血脈。俺はソレに世話を焼きたがっているようだ。

甘い、砂糖菓子よりも断然甘い。まるで天上の姉のようだ。故に。

「——ヒントをやるう秋山香織。お前が耳にしたのは、真理の理へ続く投石だ。トリスメギストス、アウグステイヌス、マグス、カリオストロ、ファウスト、クロウリー、安倍晴明、ダルク——数多くの英雄、魔術師たちが求めた無意識下の秘法。アカシツクレコード、未知への壁、アカシャ盤、現世界の黙示録であり旧世界の遺物。そして、真世界の設計図。もし、お前がソレに挑むと言うなら……心して懸かれ。でなければ、喰われて終わりだ。せめて、俺と同格になれなければ諦める」

平坦に、率直に、音のない声で伝える。

背後で、息をのむ音が聞こえた。これで潰れるならそれまで。彼女の物語は予定調和のまま終わるだろう。成ればこそ、脱却出来るか……楽しみにしているよ秋山香織。

そうして、俺は今度こそ部屋を後にした。

私——秋山香織は浅見屋双司と名乗る男に対し、二度目の恐怖を抱いた。

以前も思ったが、アレは決して人間の敵う相手ではない。いや、それどころか人外でも敵う相手ではない。そう、常識という枷から完全に逸脱した存在。陳腐な表現だが、空に浮かぶ星を掴もうとするようなものだ。

アレで軟弱？ 否、そんな訳が無い。彼が部屋を出る前に口にした言葉——それだけで、あの瞬間間違はなく世界が震えた。何故、こんな化物が此処にいるのか。何故、こんな化物が存在するのに、この世界は無事なのか。

あの瞬間、間違はなく世界という存在は浅見屋双司という男に恐怖したのだ。

「——ははっ、なんて滑稽」

気づかぬ内に握りしめていた拳には、大量の冷や汗が浮かんでいる。

私はどうやってあんな化物に喧嘩を売ろうとしていたのか。私はどうやってあの化物に勝つ気でいたのか。戦車と蟻どころではない。蟻ですら、戦車の部品に入り込めばその命を持って不具合程度起こすことが出来るというのに——アレにはそんな常識は存在しない。以前、ボロボロになったアイツは——今なら自分をたやすく

殺せる——そう言ったが微塵も思えない。あの時アイツに渡された短刀でだって、先ほどの浅見屋双司という存在を殺しつくせるとは思えない。

なのにアイツは、自分と同格となれと言った。

「何、その夢物語？ あんな化け物と同格？ うぬぼれるな私。次元が違うとかそういう問題じゃない。アレはヒトには……理解出来ない」

意図せずに口に出た言葉が、さらに私の恐怖を加速させる。

「……香織？ そんな神妙な顔してどうかしましたか？」

思考の中断。気が付けば、小夜ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「何か顔色悪いですよ？ 買って来たプリンにでも当たりましたか……」

聞こえてくる小夜ちゃんの声。恐怖とはまるで正反対な、能天気——などと言ったら彼女に失礼か。間違いなく此処にある日常を感じさせてくれる声が身体に染みる。

「……ううん、なんでもない。なんでもないよ小夜ちゃん」

なるべく、今の自分に出せる精一杯の声を出す。どうだろうか？ 私はいつもの私のように振る舞えているだろうか？

「——なんでもない筈がないでしょう。声震えていますよ？」

どうやら、見事に失敗したようである。

「そういえば双司さんは何処に行ったんですか？ 人にお茶だけ淹れさせておいて頼んだ本人がいないなんて……」

まさかつ！ と彼女は声を張り上げる。

「双司さん……あの人香織に何か余計な事でもしたんですね！？ でないと唯我独尊フリーダムな香織がここまでキャラ崩壊することなんてありません！」

いや、その評価もどうなのだろうか？ 自業自得とはいえ、日常における自分のキャラを多少訂正したくなってきた。ではなく。

「い、いや小夜ちゃん。私は大丈夫だから……ね？」

もし、あの恐怖の矛先が小夜ちゃんに及んだら——考えただけでもゾツとする。

これ以上アイツと彼女を引き合わせてはならない。だって、アレはヒトと共に歩けるものではないのだから。その筈なのに。

「なんですかその悪い男に掴まったけど必死に庇うような盲目女じみた言い訳は！ 女の子が傷ついていたら大概男が悪いんです！ そうに決まっています。それが八割がたの世の中の真理です！」

ものすごい暴論で真理を語られた。

「というわけで——私、ちょっと双司さんぶん殴ってきます」

どたばたと事務所の奥へと引っこんでいく小夜ちゃん。

——ちよつ、小夜、いきなりなにを！？　って何でパイプ椅子を頭上に掲げる！？　ま、待てっ、それは洒落に——。

ガコンと、何やら鈍い音がして静かになった。

あー、うん、なんだろう。先ほどまでの悩みが一瞬で吹き飛んだような——そんな気がした。

「……小夜ちゃんって、たまに常識で測れないことがあるよね」

どこかスッキリしたような笑顔で戻ってきた彼女を見て、そんな言葉が口に出た。

「なんか、香織にだけは言われたくないセリフを吐かれた気がしますけど」

ゴメンね小夜ちゃん。私も色々と突拍子のないことしている自覚はあるけど、今の小夜ちゃん程じゃないと思う。

「それはそうと、さつき双司さんに聞いてきたんですけど今日はもう帰っていいそうです。別段やることも無いんですって。てことでどこか遊びに行きましょう！」

「えっ？　小夜ちゃん！？」

そう言つと、彼女は私の手を引いて事務所を飛び出す。

かくして、いつの間にやら私は小夜ちゃんに連れ出されて行くのであった。

「そういえば、ネオンって今何してるんでしょうね？ 冬休みに入ってから、まだ一度も顔見てませんけど」

香織を連れて事務所を出た私は、特にどこかの店に入るのでもなくブラブラと街中を歩いていた。

「彼女なら確か、まだ見ぬ秘境を目指して旅に出るとか言ってたよ？」

「ネオンは一体冬休み中で何をやらかすつもりなんでしょうか……」

何となくだが、今空にキラんと笑みを浮かべたネオンの幻影が見えた。

「なんででしょう。冬休み明けたらアマゾンの奥地で原住民と会ってきたとか言ってる彼女の姿が頭に浮かびました……」

「あの金髪なら……ありえなくはないね」

本物のオカルトに身を突っ込んでいる魔術師からのお墨付き程怖い者はないだろう。ネオン、貴女一体何者ですか？

Joy to the world! The Lord is
come もろびとにきこられて

Let earth receive her king (迎え奉
れ)

Let every heart prepare Him room
(久しくまちにし)

And heaven and nature sing x2 (主
は来ませり)

And heaven, and heaven and nat
ure sing (主は、主は来ませり)

他愛もない話をしながら、聖歌の響く街中を揃って歩く。

「そういえば、香織は冬休み明けるまでどうするんですか？」

「うーん、私は多分ずっとこっちにいるかなあ。ちょっと先月の一件で実家はゴタゴタしてて居ずらいんだよね。でもお正月は流石に戻らないと駄目かも。巫女としての仕事もあるし」

という言葉聞いて思い出したが、香織は本物の巫女さんでした。うーん、これは香織をからかう為にも巫女服姿を拝みに行くしかないのでしょうか。

「小夜ちゃんは実家とか帰らなくていいの？」

「実家ですか……。私あんまり帰りたくないですよー。そりや向こうから帰ってこいと言われれば戻るかもしれないですけど、連絡無いなら放置です。多分、双司さんさえ良ければずっと事務所に入り浸ってますね」

食費浮きますし、と言葉を続ける。同時に、一つの妙案を思い付いた。うん、後で双司さんに相談してみましよう。どうせあの人もお正月は暇の筈です。

「——なんだろう。今、変な寒気がしたんだけど」

ふふふ、その寒気が現実になることを祈ってますよ香織。お正月、楽しみにしてください。きっと、今の私は相当に黒い笑みを浮かべているだろう。破天荒に被害を被っている私としては、たまには仕返ししてやらないとストレスが溜まるのである。

「さて、目的もなく歩くのも疲れてきましたし、どこか喫茶店で休憩しましょうか」

笑みを悟られる前に、私は近場の喫茶店へ彼女の手を引く。お茶でも飲んで、思考を切り替えましようかね。

などと、そんな考えでのんびりお茶を楽しんでいる時にソイツは現れた。

室内の席が空いていなかったのでオープンテラス。小夜ちゃんは

抹茶オレ。私はミルクティー。互いのお気に入りのソレを飲みながら冬休みの今後の予定を立てていた時だった。

「――失礼。少々、道をお聞きしてもよろしいかな？」

流暢な日本語だと、私は思った。外国人特有の訛りというものが無い。まるでテレビの向こう側のアナウンサーが喋っているような声だ。なんかこう、無機質ともとれるし、舞台劇の役者が芝居めいた口調で喋っているようにも聞こえる。

「はいっ！？ えっと、きゃんゆーすぴーくじゃぱに〜ず？」

「黒髪のお嬢さん。私は日本語で喋っているつもりですが、もしかすると伝わっていないかったですかな？」

日本語の問いに何故か舌も回っておらず発音も怪しい英語で返す小夜ちゃんへ、人が良さそうに頬笑みながら問いかける外人の男。
髪は金髪、瞳はブルー、背丈は長身。服装は――アレだ、教会にいる神父が着ているカソックと呼ばれる衣服。胸元に十字架が輝いているところを見ると、恐らく彼は見た目通りの神父と呼ばれる人種なのだろう。外人の男だ。そう、男。

整っている顔つきを見る限り、こういうのがイケメンと呼ばれる分類になるのであろう。

「いきなりで驚かせてしまって申し訳ない。実は……道に迷ってしまいましたね。金見教会病院というところへ行きたいのですが、どちらか道がをお分かりになりますか？」

――金見教会病院。それは南ヶ丘市北部に位置する病院の名だ。詳しくは知らないが、総合病院の敷地内に礼拝堂が建てられている、

日本にしては珍しい病院である。

「あの教会がある病院ですね。それでしたら、今いる道をずっと真っ直ぐに行けば見えますよ。分からなくなったら、十字路になっている所で北って書いてある道を通って真っ直ぐ進めばいいです。この商店街って、それ以外に道がないから迷うことはないと思います」

声すら発さない私を余所に、小夜ちゃんは男の質問に答えていく。

「そうでしたか！ 確かこういうのをこの国の諺で……灯台もと暗しでしたかな？ いやはや、無知蒙昧とはこのことか。しかし、こうして正しい言を知る機会を与えてくれた君たちと主に感謝いたします。それでは美しいお嬢様方、改めて感謝いたします。それでは……」

そう言って、男は去っていく。そうして、私はようやく息を吐くことが出来た。

「結構カッコいい神父さんでしたね……香織？」

「あ、うん、どうかした？」

「いや、どうかしたのは貴方でしょう。ぼーっとして」

「——ちよっと嫌な事思い出しただけ。小夜ちゃん、あんな見た目だけの男に騙されたらダメだよ？」

「いきなり何言ってるんですか。って、なんで私の抹茶オレに手を伸ばします！？ しかも一気飲み！？」

騒ぐ小夜ちゃんを尻目に、私はカップの中身を飲み干す。ふう、少しは気分晴れたかな？

「さて、今日はもう帰ろう。と言う訳で、小夜ちゃんもあんまりブラブラしてちゃ駄目だよ？」

よし、今日はゆっくりとお風呂に浸かって寝るとしよう。こういふ日はさっさと寝てしまふのが一番である。

その連絡を受けたのは、小夜と秋山香織が事務所を出て直ぐのことであつた。

「やあ、久しぶりだね友よ。こうして電話越しとはいえ話すのは百年ぶりくらいだね。元気かい？」

「ああ、お前は聞かなくても元気そうだな」

「そこは、君も元気かと聞き返して欲しいところかな」

——様式美と言う奴さ。

そう言つて、幼さを感じさせるボーイソプラノの声が笑う。その声を聞いていると、夢の国の住人の話を思い出す。あれは何と言ったか。心も身体も、ずっと少年のまま生き続ける妖精の物語。思うが故に、現実から乖離してしまった主人公の喜劇を。

「それで、何の用だ？ 普段は欧州の山奥に引きこもっているお前が連絡を寄こすなんて、どうせロクなことじゃないんだろう？」

「極東の島国に引きこもっている君が言うかい？ まあ、その予想通りロクなことじゃないよ。ボクにとっても、君にとってもね」

少年の声は一息置き。

「——実は、教会の連中がその国に入ったらしい。それも、彼の槍の欠片の一つを持ってね」

その言葉に、一瞬時を忘れた。

「君の居る極東は歪みが溜まりやすい場所だからね。古来よりそういう話には事欠かない。だからこそ、穴が空き易い。多分、新しい界でも作るつもりなんじゃないかな」

「馬鹿か？ 確かにこの国は世界中から見ても穴は空き易い場所だが、だからこそ歪みの均衡が崩れやすい。そんな場所で大掛かりな儀式をすれば、一時的には成功しても直ぐに安定せず崩壊する。それが理解出来ない連中でもないだろう？」

言葉にしながら、俺は今代の教会の総主——法皇ゲオルギウスの姿を思い出す。

アレは色々とぶつ飛んだ人間だが、頭が悪い訳ではない。むしろアレは人の極致に到達している人間だ。貴重な十三の欠片の内の一つを使つて、半ば賭けみたいなきことをしでかす訳がない。

「仮に成功してしまつたら、僕のような死者には一大事だからね。今そつちに向かつてるところだよ。それで、君は動くかい？」

「……知らぬふりをしておくのも難しい話だろう。仮に成功でもしてみる——禁忌や亜種の迫害の時代に逆戻りだ」

「——そして、異端者はすべからず排除される。まあ、そんな事態になるのはゴメンだから僕も動くんだけどね」

「お前こつちに来る気か？」

「勿論！　と言うより、もう領海に入つたところだけどね。あと……一時間くらいで到着するんじゃないかな」

クスクスと、電話口で笑う声が聞こえる。
まるでイタズラに成功した子供のようだ。

「君も動くなら、教会の連中が向かつた場所を伝えておくよ。確か場所はミナミ……なんて読むのかな？　えっ、ああ。ミナミガオカね。うん、ミナミガオカつて土地らしいよ。それじゃ、Auf Wiederhoren！（さようなら）」

その言葉を最後に、受話器の向こうからは少年の声が聞こえなくなる。

「ミナミガオカつて——南ヶ丘のこと……だよな」

よりもよつてこの時期に、この街で、こんな面倒なことが起る世の中に思わず殺意を覚えたのだった。

「……暇です」

寒さの厳しいお昼下がり。

香織と別れた私は事務所に戻る気にも自宅に戻る気にもなれず、ブラブラと一人散歩をしているのであった。

「もう、香織もなんでいきなり帰っちゃうんですか。そんなにあの神父さん好みじゃなかったんですかねー」

持ち帰り用に買った抹茶オレを飲みながら呟く。

ほんと、香織どうしたんですかねー。

しかしながら、これからどうしましょう？ 無闇に買い物してお金を浪費するのも気が引けますし。

思わず俯きながら考え込んでしまう私。道端でそうこうしていると、

「あら……貴女？」

ふと、声がかかる。

誰かと思ひ顔を上げてみれば——どえらい美人さんがいた。

「——ああ、やっぱり。前に公園に居た子よね？」

公園？ はて？ 何のことでしょう？

彼女の言葉に、ゆっくりと記憶を思い起こす。こんな美人さんなら普通忘れないと思うんですが……。

とりあえず、女性を上から下まで観察してみる。

ゆったりとした長袖の白いワンピースに、茶色の厚手のコートを羽織っている。裾の隙間から見える生足が。白く美しい脚線を描いている。そして、服の上からでも圧倒的に理解出来ること。うん、スタイルは圧倒的に私の負けです。全体的に線は細いが、出るころはしっかりと出ているし、引つ込む所は引つこんでいる。こう、全体的なバランスで言えば香織やネオンよりも彼女に軍配が上がるだろう。少女ではなく、女性としての魅力の差で。

自分と比較してしまうと圧倒的な戦力差で叩き潰されてしまうので、極力意識しないようにして今度は女性の頭へと目を向ける。

見つめられているせいか、ほんのりと頬を赤くしている彼女は同性から見てもトキメイてしまいそうだ。枝毛の見えない長く艶のある黒髪も、彼女のその表情を際立てることに一役買っているように思える。

……長い黒髪？

「——黒髪……美人……公園……お姉さん……ブランク？」

「思い出してくれたかしら？」

「ああ！ ブランコの幽霊お姉さん！」

その言葉に、女性はガクツと身体を倒した。

「たしかに……あの時は幽霊っぱかったのは認めるけど、その思い出し方はないじゃないかと思うの。お姉さん……泣いていいかな？」

「私が全面的に悪かったですから、そんな本当に泣きそうな顔しないで下さい！ ひしひしと罪悪感に打ちひしがれそうです……」

かくして、無事女性のことを思い出した私です。話を聞けば彼女も暇だということで、以前彼女と出会った公園で世間話でもするこ
とになりました。

「はい、紅茶でいいかしら？」

「……なんですかコレ。【自前花伝きつと君の想像しているミルクを使ったミルクティー】って。あまりにもネーミングがぶっ飛んでますね……」

「その飲料メーカーって、ずいぶん前に消費者に何かの不祥事で随分叩かれたらしくて……。それ以来、何を開き直ったのかずっとそんな感じの商品を出し続けてるのよ」

ほら見て、と女性は自分の持っている缶コーヒーを私に見せる。

【ドキッ 苦味スツキリ暗黒街コーヒー】

「暗黒街って何ですかっ！ どう見ても苦味をスツキリどころか増長させてますよねっ?!」

「それがねー、コレ飲んでみると結構甘口で美味しいのよ。しかも、寝る前に飲むと安眠効果もあるらしいわ」

「——暗黒街ってそういう意味ですかっ!？」

眠気覚ましにと飲んでも、安眠効果があるのでは意味が無いだろう。翌朝×切前のプログラマーがすっかり飲んで、気が付けば朝になっていて精神的に暗黒街行き……。イヤ過ぎます。

「まあ、お姉さんは寝るのにはもう飽きちゃったから、あんまり意味はないんだけどね」

そう言っ、グイッと一気飲み。

美人がやると、男っぽい仕草も様になるのが悔しいです。

「——ふう。そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は崎守ミサキ。職業は——家事手伝いってことにしておいてくれると嬉しいかな?」

「つまり——ニートですか」

「……そうはつきりと言われると傷つくわね。仕方ないじゃない。最近までずっと入院してたんだから」

「あつ、ごめんなさい。最近までってことは、もう退院されたんですか？」

「うん、と言っても外に出られるようになったのは本当に最近のことだけどね」

やっぱりシャバの空気は美味しいわー、と何処ぞにお勤め後みたいなセリフを吐く。

「それで、お嬢さんは何てお名前なのかしら？ まさか、人は名乗ったのに自分は名乗らないなんてことはないわよね？」

「安心して下さい、その辺りの礼儀はわきまえてます。秋月小夜——南ヶ丘学園の二年生です」

「うん、自己紹介良く出来ました。小夜ちゃん……って呼んで良いわよね？ まさかこんな所で小夜ちゃんに会えるとは思ってなかったなあ。あの時は悪い事しちゃったし」

「……あの時？」

はて、何のことだろうか？

「んー、小夜ちゃんは覚えてなくても無理ないよ。あの後、直ぐに

「恐いお兄さんが助けてくれたからね。きにしない、きにしない」

「頭を撫でるのは構わないんですけど、そんな小さい子供を撫でる風にするのは止めて下さいっ！」

などと抗議してみても、その手をどかす気になれないのは年上の魔力か。

結局、しばらくはがままにされていた私であった。

「それで、小夜ちゃんは一切何を道端で悩んでいたのかな。お姉さんに話してみない？」

ミサキお姉さんのお悩み相談教室開幕です、などと騒いでいる眼前の年上。

なんだか、最初会った時の印象が見事に吹き飛びそうです。

「——別に、悩みなんでないですよ？ そりゃあ、多少考え事していたことは認めますけど……」

「ダウト。前に、貴女の空気は読みやすいつて言ったでしょう？」

見事に顔に出てるわよ……多分根が素直なのね」

そんなに顔に出やすいんでしょうか私……。

「見たところ……一緒に楽しくお茶を飲んでいた友人がいきなり原因もわからず帰ってしまつて悩んでたつて所かな？」

「——見てましたよねっ！？絶対見てましたよねっ！？」

「だから顔に出てるつて言ってるじゃない」

そんな訳あるか。

「——そんな訳あるかつて思ったでしょ？ あれ、前に会つた時も似た様なやりとりをしたような……」

その言葉に、あの時も思ったが顔に出るとかそんなレベルじゃないですこの人。なんというか、思考が全部見抜かれてる気さえします。

「ハズレ。考えを全部見抜いてる訳じゃないわよ。そうね……思考パターンの先読みつて言つた方が正しいかしら。小夜ちゃんは、将棋をやつたことある？」

「——将棋ですか。一応、ルールくらいは知ってますけど」

「それなら理解出来るかしら。将棋つて、言つてしまえば最終的には相手が打つ手の読み合いなの。プロの棋士なんかは、常に相手の三手先を読んで駒を動かすつて話があるわ。私のも、それと似た様なものなの」

「常に会話する相手の三手先を読んで会話しているってことですか？」

「そんなものよ。相手の表情、仕草、そして気質からどんな思考に辿り着くか予想して回答する。私の癖みたいなものね」

何事もない風に言っているが、それはとてつもなく馬鹿げたことではないのか。

思考を予想するといっても人間の性格は千差万別ですし、回答パターンも幾つ予想出来るのか想像もつかない。しかも会話中にそんな高速思考などしていれば、間違いなく自分の口が止まるだろう。彼女のそれは言わば、自分達には想像もつかない並列思考によってなりたっているのだ。つまり。

「——ああ、双司さんみたいなんでも人間なんですネ」

「……小夜ちゃん？　なんか今、ものすごい馬鹿にされた気がするんだけど」

違いますよー。馬鹿になんてしてませんよー。ミサキさんって、双司さんや香織みたいなびっくり人間寄りだなーって思っただけですー。

「誰かは知らないけど、多分考えてる人達程私は人間辞めてないと思うわよ？」

「——安心して下さい。びっくり人間は皆さん同じことを言いますから」

どこか苦味を潰したような顔で黙り込むミサキさん。うん、これで少しは意趣返し出来ました。

「まあ、本当に悩みて程のものでもないですよ？ 友達の帰り方が唐突過ぎて途方にくれていただけです」

「ちなみに、どんな別れ方だったの？」

ようやく本題に入れたのが嬉しいのか、目を輝かせている彼女に先ほどの出来事をかいつまんで説明する。ぶっちゃけ、原因があの神父さん以外には思い浮かばない私です。

「——ああ、それなら間違いなくその神父の男性が原因ね」

ミサキさんも同じ回答が出たようでした。

「それで、小夜ちゃんは どうしたいの？」

「……何がですか？」

「だから、お友達が帰っちゃった理由を知ってどうしたいかって聞いているの。単なる好奇心？ 自己満足？ それとも偽善心？」

むっ、どういう意味だろう。

「小夜ちゃんは 気質が読みやすいって前に言っただけ……この問いだけは別。だって——今の小夜ちゃんからは何も読み取れないもの」

そう言うミサキさんの瞳に映り込んだ私は、自分でも驚く程に無表情であった。

なんだこれは？　これは誰だ？　私は何故こんな中身の無い顔を
している？

ぐるぐるすると、頭の中で歯車が廻る音が聞こえる。それはまるで、巨大な鋼鉄の扉を開く様な重々しい音だ。

「私」

言葉が出ない。二の口が紡げない。

何か気が付いてはいけないものに気が付いてしまった。だが、よくぞ気が付いてくれた。

そんな背反の感情が、私の視界をモノクロに染める。

眼前に居る筈のミサキさんが遠い。空が近い。地が底へ落ちていく。そして、思考が海へと流れ出す。

それ以上はヤメロ。私の思考を現在から飛ばすんじゃない。過去へと誘うな。もう私は、ヒトなんだ。

だから、だから、だから、だから、だから、だから、
から、だから、だから、だから、だから、だから、だ
だから、だから、だから、だから、だから、だから、だ
ら、だから、だから、だから、だから、だから、だか
だから、だから、だから、だから、だから、だから、だ

「——うん、やっぱり今の無し！」

というミサキさんの声に引き戻された。

「ゴメンね、変な事聞いて。まー、お友達がいきなり挙動不審になつたりしたら心配だもんね。友情っていいなー」

何か満足したと言うように笑うミサキさん。

私、今何をしてましたっけ？

「……ミサキさん？」

「でもあの怖い怖いお兄さんが気に入る訳がやっと分かったわ。限りなく完成された不完全。ピースの足りていないパズルってところかしら？ 完成したらどんな色になるのか楽しみで仕方が無いわね」

彼女はそう言うと、私に背を向けて歩きだす。

えっ、良く分からないこと言っただけのまま帰っちゃうんですか！？

「——あつ、大事な事言うの忘れてた」

と、足を止め首だけ振り返り、

「小夜ちゃんのパズルが完成したら——また夢幻の回廊にご招待してあげる。完成後なら、あのお兄さんも手は出してこないでしょうしね」

などと、またもや意味のわからないセリフを残して去っていった。

「よく来てくれた、秋山香織。いきなり呼び出して済まなかったな」

小夜ちゃんと別れた後、再び事務所へと足を運んでいた。

理由は単純。帰ってお風呂にでも入ろうと思った矢先、この男――浅見屋双司にいきなり呼び出されたのだ。

「……いきなり何の用よ。私だって暇じゃないんだから、つまらない内容なら帰るわよ？」

彼への拭いきれない恐怖を抑えつけながら、せめてもの反抗として憎まれ口を叩く。

そんな私の内心を余所に、彼はタバコの煙を吹かしながら何かの書類と思われる紙束を差し出してきた。

「なにこれ、私に書類整理でも手伝えって言うの？」

「違う、中身に目を通してみる。先ほど纏めた、この街で起こるであろう厄介事とその結果予想図だ」

厄介事？ その言葉に首を傾げながらも、私は言われた通り紙束の内容に目を通し――息を飲んだ。

聖槍の欠片を用いた儀式魔術予想

彼の者を貫いたとされる槍の欠片を持って、教会の人間が南ヶ丘

へ侵入。

ローゼンクロイツの予想によれば、欠片を用いた大規模儀式魔術行使の為だと思われる。

予想される儀式の内容は三つ。

一つ、欠片を用いた信仰力の上昇儀式。

しかし、信仰力を向上させるだけなら、わざわざ極東の島国にまで足を運ぶ必要性が存在しないので目的としては却下。

二つ、欠片を利用した降霊術の行使。

極東の島国の特徴一つである歪みを利用した、降霊、もしくはそれに伴う蘇生術の使用。

だが、この行為も歪みを利用する上で最適とは言えない。なぜなら、歪みを利用し蘇った者は、また歪むからである。潔癖症とも言える教会の連中が、わざわざ歪な存在を呼び戻す為に術を使うとも思えない。

三つ、これが最も可能性が高く、可能性が低い内容である。

大規模異界創造魔術【再誕ノ賛】

位相空間論という学術理論がある。

これは、開集合と閉集合、コンパクト性と連結性、点集合における幾何学理論など実数世界における現象がなにかしらの連続性——つまり法則性に則って起こっているという概念である。

分かりやすく言えば、一見無意味とも思える行動が先を見てみれば利益に繋がっている……と表現した方がいいのだろうか。

すなわち、物質、精神、全ての事柄は点と点、線と線で幾何学的に結びついているという集合論だ。

【再誕ノ贄】という術は、この法則を反転させる。

繋がりが合った要素数同士を反発させ、亀裂を生み出す。繋がりと
いう法則に則っていた事象は、これにより繋がりが失われ崩壊する。
そうなる、どういった事が起こるのか。繋がりを断たれた部分
には穴が開くのだ。

風船を膨らませようにも、穴が空いていればそこから空気が漏れ
だしてしまう。血液を循環させようにも、穴が空いていれば血が流
れ出してしまう。

それでは、【再誕ノ贄】が行われた空間そのものに穴が空いてし
まえばどうなるか？

答えは簡単だ。その部分の物理法則が崩壊していく。いや、その
場所だけ新しい法則が誕生すると言えるだろう。つまり、新しい世
界というものが産まれるのだ。

一歩間違えれば、自分たち以外の他勢力全てを敵に回すような所
業だが、成功すれば新世界の王ともなれる方法。恐らくは、かつて
絶対的であった主の威光を用いた世界を創る気なのだろう。仮に安
定せずに世界という形を成さなかったとしても、主の降り立った地
として新たな聖地と祭り上げることが出来る。

しかし、あの現法王であるゲオルギウスが、このような強硬手段
を用いるかというところで疑問が残る点ではある。

「……これは、どういうこと？」

「どうもなにも、書いてある通りだ。先ほど旧友から連絡があつて
な……どうにも厄介事が始まるらしい」

「厄介事ってレベルじゃないでしょう！」

紙束を机に叩きつけながら叫ぶ。この内容が本当のことなら、間違はなく各魔術師や異能者達の勢力が動く。そうなれば、南ヶ丘にはそいつらが押し寄せることになるだろう。つまり、この街が――戦場となる。

「冗談じゃないわ。貴方、この街を戦場にする気？　今回に限っては間違いなく一般人にも被害が及ぶ……小夜ちゃんだって、巻き込まれる可能性があるのよ!？」

自分達の領域どころか世界すらも侵されると知れば、なりふり構ってられない戦争が起こる。最悪、この街ごと更地になるかもしれない。

「進んで戦場にさせる気はないが、残念なことに俺に連絡を寄こしたのは死者の都のローゼンクロイツだ。それにヤツは既にこの国に入っている。遅かれ早かれ、何か起こるだろうな」

「――何でアンタはそんなに落ち付いてられるの!？　自殺願望でもある訳？」

「そんなつもりはないさ。だが、焦っても仕方あるまい。そういう君はどうする？　このまま傍観しているつもりか？　それとも、魔術師らしく動くつもりか？」

その問いに、私は間髪入れずに答えた。

「冗談じゃないわ。この街でそんなふざけたことやらせる訳ないでしょ?」

この街には私の友人がいるのだ。たとえ浅見屋双司が動かないと

しても、私が動く。みすみす小夜ちゃんを危険な目に合わせてなるものか。

「良く言った秋山香織。これで俺も動き易くなるというものだ」

——はっ？

「いやはや、お前がそう言ってくれて助かったよ。事情が事情とはいえ、古神が表舞台に出てくるのは少々問題があるからな。これで心置きなく——暗躍できる」

「えっ、アンタ動く気ないんじゃないの？」

私の言葉に、彼は眉を潜める。その表情は、私が何を言っているのか心底分らないといった感じだ。

「俺がいつ自分は動かないと言った？ 他の場所ならまだしも、拠点であるこの街で直接動くのは少々危険だったのな。大ぴらな理由が欲しかったところなんだ」

……確かに、現存する古神がタイミング良く現れたとなると様々な組織が黙ってはいないだろう。その実態の調査、あわよくば神を御する為に人材を派遣してくるに違いない。でも、おおぴらな理由？

「まだ分からないのか？ 出自は不明とはいえ、お前は櫛名田姫の血族なのだろう。なら、その一派が再誕ノ贄を防ぐために動いたという噂でも流せば、俺の存在がばれても一時的に顕現しただけと思われる。なにせ、生身で現存する古神なんてものは半ば空想の産物になっていくからな」

そのくらいの情報操作は簡単だ、などと言つてのける眼前の男。
しかし、味方であればこれほど頼もしい人物は存在しない。正真正
銘伝説級の化け物に、誰が敵うと言つのだろうか。

「さて、お前には俺の眼となり足となつてもらふ。しかし——再誕
ノ贄を行使する程の術者を止めるとなれば、少々力不足だな……」

「——って、待ちなさいよ！ その言い方だと、まるで私にアンタ
のパシリになれって言つてゐたいじゃないの!？」

「そういえば少し前に読んだ漫画を参考に、時間概念を弄つた部屋
があつたな。あの時はギャグのつもりで作つてみたが、以外にも役
に立つものだ」

「だから話を聞けー!」

そんな私の叫びを余所に、いつの間にか背後に回つた浅見屋双司
に首根つこを掴まれる。

えっ？ 何この状況？

「よし、これから少し魔術の概念のイロハを叩き込んでやる。心配
するな、ただマシな戦いが出来るように鍛えてやるだけだ。ああ、
ついでに火乃迦具鎚も持つてこい。どうせ実家に奉納しなおしたん
だろう？ 移動用の魔力は貸してやるから早くしろ」

えっ、なにそれ恐い。

ずるずると、そのままなすすべもなく連れて行かれる私。

お願い、一言だけ言わせて。

「——だから人の話を聞けー!」

そんな叫びが、事務所に木霊するのであった。

E p i s o d e 0 5 【紅色聖夜祭】その？（前書き）

紅色聖夜祭その？になります。

初見の方はその？からお読みください。

Episode 05【紅色聖夜祭】その？

—S...l a...v...e。

薄暗い地下洞窟。

南ヶ丘——その中心に位置する地下空間に、カソックで身を包んだ西洋人が岩壁の空を見上げていた。

「……玉座は近い。しかし、天を浮上させるにはあと一歩贅が足りない」

金の短髪を掻き上げながら、男は呟く。

—R a...g...i e...。

「これ以上は贅は望めぬだろう。ならばどうするか。内が足りなければ外から持ってこればいい」

—n a...m a...s...t e...r...m i...s e...r i...c...o...r...。

「先人は良い言葉を残した。ゴルゴダの模倣は既に完成している。つまり、私は儀式の為の翼を造り上げればよい」

男は指揮者がタクトを振るうように、虚空へ向かい腕を振るう。

「——ああ願わくば、み名尊まれんことを。み国来らんことを。み旨の天に行わるる如く、地にも行われんことを」

と、声を止めた。

「……いけないな。ああ、いけないな。折角の私が主へ捧げる詩が台無しじゃないか。ほら、伴奏を止めては駄目だよ」

——ユルシテ……タスケテ。

——イタイノ……モウラクニシテ。

薄暗い空間から声が聞こえる。それはまるで男の声に答えるように、壊れたラジオみたいな音を出していた。

——ユルシテ……タスケテ。

——イタイノ……モウラクニシテ。

神様に救いを求める亡者の声。まさしくそう言って過言ではないだろう。幾つもの音は、洞窟の中を反響して地響きに近い音色を奏でる。

「痛いのは嫌だ、苦しいのは嫌だ、自分が不幸になるのは嫌だ。そ

れは人間として正しい感情です。誰しもが楽でありたい、幸せでありたい、幸福が欲しい」

男は語りかけるよう言葉を続ける。

「今のあなた方は誠に人間らしい！ その願い……素晴らしい程に愚つ直で、青臭い少年のように輝いている！ まさしく、ペトサイダ池の水を天使が動かすに値する願いだ」

何処か歓喜するように男は声を上げた。

そして、岩石の割れ目から洞窟内を日の光が照らす。

――光に映ったものは、岩壁一面に張り付けられた人間であつた。

老若男女。様々な人間が十字に貼り付けにされ、その身を鮮血で染め上げている。

――ユルシテ……タスケテ。

――イタイノ……モウラクニシテ。

それぞれの口から零れるのは、生への怨念じみた叫びであり願い。この苦しみから早く自分を解き放つてくれ。もう痛くしないで欲しい。いつそのこと殺してくれ。痛い痛い痛い、苦しい苦しい苦しい。

「さあ、主へ捧ぐ磔刑達よ！ 共にグレゴリオを奏でよう。我らの日用の糧を今日我らに与えたまえ。人に許す如く、我らの罪を許したまえ。試みに引きたまざらわれ、我らを開くより救い給え」

男の祈りは、磔刑となっている人々を蹂躪するように洞窟内に響いた。

さて、結局ミサキさんのお話もよくわからないことになってしまった私は、こう言う時はやけ食いに限ると団子屋の全種類セット片手に自宅へと足を進めていた。

「みーたーらーしー、しよーゆー、ごーまー、きなこー、三色だんごー」

すっきぶ、すきつぶ、くるりとたーん。

自分でも酷いくらいの浮かれ具合だとは思うが、こうでもしないとやっていけないのです。今日に限り現役女子高生としての恥は捨てます。

「ぜーんしゆるーい買ったのにいー、なぜーかお茶だけべえつりよっきーん」

団子全種類に玉露パック。合わせて合計二千八百円の出費である。いいんです。もう今日は何も気にしません。ぶくぶくと太っても

構わないんです。体重系なんて怖くないっ！

「こゝんやは一人で、だんごば〜てい〜」

クリスマス前だというのに、私は一体なにをやっているのでしょうか。

ケーキではなく団子。うん、花より団子です。団子最高です。もういいそのこと、将来は団子屋目指してみましようか。

「……日本では面白い歌が流行ってるんだね。何て曲名なんだい？」

横からそんな声が耳に届く。

ああ、もういい加減にして下さい。今日は厄日なんでしょうか。

「残念ながら曲名はありません。しいて言うなら、私に捧げる団子レクイエムです」

そう口にしながらかのの主へと首を動かすと――、

「団子レクイエムか。食べちゃうんだから確かにそうだね」

コロコロと、機嫌良さそうに笑う美少年がいた。

「へえ、君が持っているのがジャパニーズ団子か。話には聞いていたけど、見るのは初めてだよ。美味しいのかい？」

歳は十歳前後だろうか。

肩口で切り揃えられた銀髪がさらさらと風に靡き、成長すれば絶世の美丈夫となることを約束された美貌を際立てている。

身に付けているライダースーツのような革製の衣服には、ジャラ

ジャラと無造作にチェーンや薔薇の細工をあしらった十字架が巻きつけられていた。まるで自分を鎖と十字架の檻に閉じ込めているようだ。

しかし、私が言いたいのとはそんなことではない。本当に、本当にいい加減にして下さい。

「――また外国人ですか！　というか今日は妙な人との遭遇率多過ぎですよ！　私何かイベントフラグでも立てました！？　お願いですから……静かにお団子食べさせて下さい……」

心からの願いである。少しの傷心も許されないのでしょうか。

「えーっと、僕何か悪いこと……しちゃったかな？」

頬を引き攣らせながら謝る美少年。

うん、無理に背伸びして頭を撫でようとしないでいいですから。もう私のハートが砕けちゃいそうです。るるる。

「僕でよかつたら話だけでも聞くよ？　愚痴だけでも、言葉に出してしまえば多少は楽になるものさ」

見ている側も釣られて頬が緩んでしまうような笑顔で少年は言う。話の切り出し方もミサキさんとは大違いです。なんか、久しぶりにマトモな人と会話している気がします。

「――って、見ず知らずの外国人にいきなりこんな事言われても困るか。ゴメンね、変な事言っちゃって」

なんでしようこの子。すっごく心が洗われるんですけど。普段濃いメンツに囲まれているせいか、新鮮味が凄まじいです。しかも銀

髪の美少年ですよ。ゴメンって言う時なんか、逆にこっちが罪悪感に囚われそうになる表情になるなんてどこまでヒトの心を驚掴みにするんだって。ではなく。このまま抱きしめて気にしてないよって言っただけというか發育悪いお姉さんは嫌いって聞きかけそうになるというかとにかく私の心が別の意味ではーとぶれいく。つまり、

「——愚痴、聞いてもらってもいいですか!？」

こつこつ結論に至る訳であります。

「そう？ それなら言ってみて良かったよ」

私も良かったです。その笑顔がすつごく眩しい。

「それじゃ、場所を移そうか。フラッド、この付近で落ち付いて会話できて——そうだね軽食なんかも食べられる場所はあるかい？」

「それでしたら、この地点から西へ百メートル程進んだ所にある和食処がよろしいかと」

少年の背後から、低い枯れた声が聞こえた。

いつからいたのだろうか？ 燕尾服に身を包んだ白髪の新老の男性。まるで少年に仕えているかのように、彼の一步後ろに佇んでいる。いや、きっと仕えているのだろう。少年を魅せることを重点的に置いているような雰囲気は、海外小説などに出てくる古参の執事のように思えた。

でも、そんな人を連れているなんてこの子どこかの御曹司だったりするのでしょうか？

美少年の御曹司——ネオン辺りが喜びそうなネタである。

「君が選ぶ場所なら期待出来そうだね。では、お手をどうぞフロイライン。道案内は彼の役目だけど、エスコートするのは僕の役目だからね」

その言葉に私は、何故彼が自分の友人でないのかと天に嘆くのであった。

カコン、カコン。室内にししおどしの音が響く。
心のオアシスを与えてくれそうな少年にエスコートされて連れてこられたのは、見事にお高そうな日本料亭でした。

「どうかしたかい？ そんなに緊張しなくてもいいよ。どうせ個室なんだし」

——個室だから緊張するんですよ！

明らかに良いお値段がしそうな料亭に連れてこられ、責任者と思われる女性に頭を下げられている少年の姿に呆然として気が付いたら個室で向かい合ってお茶を飲んでいた。

「こんな状況……誰が予想出来るって言うんですか」

少年に聞こえないように小さく呟く。

しかも、テーブルに鎮座しているのはまた高そうな香りを出している玉露と、先ほど私がやけ食いように買ってきた団子である。値段的な意味でミスマッチにも程があります。

「それにしてもこのジャパニーズ団子は美味しいね。コレは是非国の同志達にも食べさせてあげたい味だよ」

そう口にしつつ団子を頬張る美少年。こういう姿は年相応で可愛らしい。

「君は食べないのかい？ 自分で買った団子だろう？」

「い、いえ、食べたいのは山々なんですが……」

この場所の空気に負けて喉を通りそうに無いとは言えない。私にはこの子を責めるような言葉は口に出れないんですっ！

「でも僕ばかり食べてるし……。そうだ！ 確かこの店にはアンミツってデザートがあったはず。団子のような味なのかは分からないけど、お礼に御馳走するよ！」

そう言ってお品書きを手に取り注文をする少年。

……今、チラリと餡蜜の値段としては恐ろしいケタが見えたのです
が。

「ふふふ、実はこうやって誰かとゆっくり話すなんて久しぶりなん

だ。だから出来ればもう少し肩の力を抜いてくれると僕は嬉しいかな」

「……そうですね。折角いいところに連れてきてもらっただんですから、そうさせてもらいます」

うん、開き直ろう。それが一番だ。

正直、明らかに年下であろう少年に愚痴を言うのは良心的にはばかれるものがあるのだが、本人が良いって言うのだ。お言葉に甘えよう。

「実は最近、私見事に振り回されてる気がするんですよ」

ずらずと、お茶を啜りながら語る。

「確かに双司さん——私の雇い主みたいな人なんですけど——のお手伝いをするってことは、理不尽な事態に巻き込まれる確率が高いのは分かってます。でも、双司さん以外にも私の意志そっちのけで自己完結するんですよ！？ 今日だって、一緒に出かけていた友人は何の前触れもなく帰っちゃうし、会ってまだ二回目の人に奇妙な会話された挙句にそのまま私を放置して何処か行っちゃうし……。皆フリーダム過ぎるんです！ むしろ双司さんの手伝いするようになってるから、そういう不思議な人との遭遇率が高過ぎるんですよ……」

一度口にしてみれば、以外にも出てくるストレスの塊。今更ながら、自分って結構不満あったのかと自覚します。

「……もうお被いでも頼むしかないのでしょうか？」

実家が神社な友人を思い出すが却下。本人がアレなので、効き目が期待出来ない。

はぁ、と溜息を吐く私の姿に、少年は顎に手を当て考え込むような仕草をしてから口を開く。

「うーん、君にそういう事が起こるようになったのはいつごろからかい？」

「いつごろ……。まあ、奇妙な日常が始まったのは今年の四月位からですけど」

思えば、変な友人や不思議な人と出会ったのは四月のあの事件が切っ掛けとも言えなくはない。あの月から、香織やネオンみたいなエキセントリックな人との関わりが始まった。それ以前は、周囲の人たちとは付かず離れずの平凡な日常を送っていた筈だ。教師のブラックリストに入れられることも無かったですし。

「——なるほどね。そうだな……。この国では四月っていうのは出会いと別れの季節って言い表し方があるそうだね」

「ええ、そうですけど」

「表現の多様性っていうのはこの国の素晴らしい文化でもあるけど、逆を言えばそれだけ多種多様な解釈があるって意味。また、そのような言い表し方は一種の願掛け染みた力にもなることがある」

あくまで迷信みたいなものだけどね、と彼は言葉を続ける。

「星の巡りって言えばいいのかな。そういった風習がある場所では、人の進む未来なんかに影響してくることがあるんだ。四月という

始まりの時期に、その後の起こる未来の方向性を定めてしまった結果——それ以前の行動結果論が崩れてしまう。つまり、周りを取り巻く日常の型つていうのがズレてしまった訳だ」

「……それは素直に諦めろってことですか？」

「いや、そういう意味じゃないよ。この型つていうのは簡単に変えられるのもなんだ。例えば、危ない所に近づくって言われた人は大抵二つの反応に分かれる。危ないなら近づかないようにしよう、もしくは危ないっていうなら面白そうだから行ってみようってね。もし、自分の理解の範疇以外のことに関わりたくなければ、ここで行かなければいい。また逆なら、危険を冒してでも行けばいい。もし、平凡な日常を望むなら危うきに近づくずに徹すればいいんだ。その行動一つでこの先の未来は変わってくると思うけど……参考になったかい？」

言いたいことは分かった。もし本当に嫌なら、関わりを持たなければいい。関わりがなければ、私が言っている結果は生まれないのだから。

「でも僕の予想だと、素直に今を受けとめる気でしょ？ 本当に嫌だと思っているなら、もっと醜い顔で話すのが人間ってヤツだからね」

君、愚痴をこぼしている時心なしか楽しそうだったもの。

「……うつ、分かりますか？」

その言葉に、見事に凶星を突かれた。

「はははっ、そんな君だから僕も話を聞いてあげたいって思ったんだけどね」

こうして話をしていると、自分より少年の方が何倍も年上のような気がしてくる。

なんというか、見た目の愛くるしさに似合わないくらいに存在感が重いというか。

「なんだか、少し気が晴れました。ありがとうございます——えっと、そういえば自己紹介してませんでしたよね？」

「——あっ！ 僕としたことが大事な事を忘れていた……。女性をエスコートする前に、そんな基本的な事を忘れるなんて……」

この子、見るからに失敗したって顔してるんですけど……。
その姿か何かどうしようもなく可笑しくて、

「——くすつ。そんなに気負わないで下さい。自己紹介は今からでも遅くないんですから」

思わず、笑いながら少年の頭を撫でてしまった。

「そんなに気にするのなら、一つ提案です。私とお友達になつてくれませんか？」

その言葉に、少年は驚いたように目を見開き——満面の笑みを浮かべる。何か不思議といいことをした気分になります。

「喜んで貴女の友となりましょうフロイライン。僕の名は、クリスチャン・ニコラス・フォン・ローゼンクロイツ。薔薇十字の祖にし

て開拓者。よろしければ、お名前を教えて頂けませんか？」

おとぎ話の舞踏会であるような芝居がかった動きで手を差し出す少年。

しかし、その一挙一動は絵本から抜け出してきた貴族様を沸騰とさせるほど様になっていた。だから、ここは私も礼に習うとしましょう。

「私の名前は、秋月小夜です。ありがとうございます、デア クライネプリンツ」

そんなやり取りをしながら、しばらく二人でお茶を啜るので会った。

ちなみに、奢ってもらった餡蜜はとても美味だったことを言うておきます。

E p i s o d e 0 5 【紅色聖夜祭】その？（前書き）

E p i s o d e 0 5 【紅色聖夜祭】その？になります。

Episode 05【紅色聖夜祭】その？

西欧協会、その本部であるローマ・ヴァチカン大宮殿。ヨーロッパの小国に匹敵する程の大きさを持つ、世界最大級の聖堂宮殿だ。そんな広大な建造物の地下深くに、大司祭と呼ばれる人々でも一握りしか知らないとされる大聖堂が存在していた。

名を、サン・ゲオルギウス大聖堂。法皇ゲオルギウスの為に作られた、教会の深部とも言える聖堂である。

一面をステンドグラスに包まれた広大な室内には、一切の空気の澱みも存在しない。

まさに、汚れきった地上とは隔離された聖域と言える。

「さて、彼は上手くやってくれているでしょうか……」

その聖域には玉座が存在していた。

聖堂内の最深部。聖母のステンドグラスを背後に、この聖堂の主の為の玉座が鎮座している。

そして、玉座に座っているのは未だ年若い少女であった。

「人の歪み、霊脈の歪み、魂の歪み……あらゆる歪みが集まり終着する極東の島国」

彼女が唇を震わせる度に、空は揺れ儂い光達は踊り出す。

声の主こそ玉座の主であり、聖ゲオルギウスの名を冠する教会の帝。十二億もの司祭と信者の頂点に君臨する法皇である。

「一つ一つは小さな因果。だけど、それが繋がり合えば大きな力を生み出す連結世界。人は善を求める心から抜け出せない。人は悪の因果から抜け出せない。白であり、黒であり、灰色であるこの世界。今の世界に——救いはない」

白いドレスを身に纏い、足首まで伸ばされた銀の髪を空に乗せながら少女は謡う。

「何故、人は罪から抜け出せないのか。何故、人はがむしやりに救いを求めるのか。ああ、私は全てを愛しているのに——何故人はこゝも自己愛のみに生きるのか」

カツン、とハイヒールを踏みならす音が響く。

「何が悪い？ 何が悪なのか？ 世界が悪なのか？ それとも私が悪なのか？ 愛することは罪なのか？」

彼女が自身の細い腕を言葉に合わせて振るうたび、連れられるように光達はステップを変える。

「エフェソス、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキア。新天地を求めればよいのか？」

罪を洗い流せぬ者は捨て置くのが善と言うのか？ 否定することが善だと言うならば私は善すら否定しよう」

故に喝采せよ、喝采せよ、喝采せよと少女は謡う。

この魂に憐みを、万軍の王は此処に居るぞと声を響かせる。

「同胞たちよ！ 福音を告げるラツパを掲げよ。蛇すらも共に行きたいと願うのなら、私はそれを受け入れよう。告げる！ 剣を掲げよ、槍を突き立てよ、流れ出した聖なる血は全て私が抱きしめよう！」

謡い終えると、聖堂には少女を讃えるように跪いた騎士たちの姿があった。

その数、十三。それぞれが、彼女を象徴する十字架を背負う騎士達である。

「我ら十三槍の騎士キリエ・エレイソン。我らが身は主——法皇リナ・ゲオルギウス閣下の為に魂すらも捧げましょう」

総勢十三の騎士達が、一斉に各々の武器を天に掲げる。

リナ・ゲオルギウスと呼ばれた少女はその姿を一瞥し、満足そうに笑みを浮かべた。

「——しかし、恐れ多くもゲオルギウス閣下。何故、あのような男に東方遠征を任されたのですか？ 正直申しまして……あの男は閣下のご意向とは別の意志をしているように思えるのです」

騎士たちの最前列にいた中年のスキンヘッドの男が問いかける。

鎧の上からでも視認できる程に鍛え上げられた肉体は、一見しただけでは教会関係者とは思えないだろう。戦場を渡り歩いた軍人――

—そう言われた方が納得できる風貌で合った。

「ふふふつ、貴方の言葉は最もだと思えますよ騎士団長。ですが、私は言った筈です。私は——全てを愛している。この魂に憐みを。共に行こうとしている迷い人を無碍にするなど、私には到底出来ないのです」

では、その騎士が頭を垂れるリナ・ゲオルギウスという少女は一体何なのか？

いや、彼女という存在を人の尺で測ることすらおこがましいのであろう。

彼女には、それだけのカリスマと力があるのだから。でなければ、今頃玉座には座っていない。

「それに仮に失敗したとしても、彼からすれば本望でしょう。なにせ、不完全とはいえ主を降ろす儀式の一端を担えたのですから」

クスクスと、聖堂に可愛らしい笑い声が響き渡る。だが声とは違い、彼女の表情は妖絶——策略を模索する魔女のような表情を浮かべていた。

「まあ、貴方の懸念するような事態は起こらないと思いますよ？」

「と、言いますと？」

「だってあの国には——」

彼女は一息置き。

「怖い怖い、法則の色を司る青がいらっしゃるんですもの」

年相応の乙女のように、恋焦がれた表情で答えるのであった。

携帯に映る時刻を見れば、いい感じの夕暮れ時。

お土産用にさらに高級餡蜜を三つも貰い今までの不満が見事に吹き飛んだ私は、折角だから皆で食べようと軽い足取りで事務所へと向かっていた。

クリスチャン・ニコラス・フォン・ローゼンクロイツ——長いのでクリス君で良いと言われた——ともメールアドレスを交換しましたし、次に日本に来た時はまたお茶でも飲もうとの約束も交わした。うん、普通のやり取りって素晴らしいことである。

どうやら彼はこれから行かなければならない所があるらしく、非常に名残惜しかったのだが付き人の人に連れていかれたのだった。本人は見事に駄々をこねていたのだが。

付き人の人——フラッドさん曰く、普段は非常に聡明な人らしい。あからさまに駄々をこねるなど初めてで、一体何をしたのかと問い詰められた時は正直泣きそうになりました。

だって、無表情の執事さんが徐々に近づいて来るんですよ？ 無駄に圧力かけてくるんですよ？ アレで動揺しないでいられるのは双司さんくらいです。

「……でも、クリス君って友達少なかったんですね」

心当たりがないので、とりあえず友達になったと答えたのだがフラッドさんはいきなり泣き出してしまった。その時のセリフがコレである。

「——ありがとうございます！ ローゼンクロイツ様は……何と言いますか部下は沢大勢いらっしゃるのですが、御友人は殆どおりませんゆえ……」

本人に聞かれないうちにボソリと呟いたその言葉に、目がしらが熱くなってしまったのは仕方ない。

あんなに良い子なのに、何ででしょうかねえ。

「でも、このカードは一体何に使うんでしょうか？」

ポケットから、去り際にクリス君が渡してきたカードを取り出す。金色の金属の板に、十字架に巻き付いた薔薇のレリーフが刻まれているものだ。なんでも、同じマークがある店で出すと役に立つのだとか。

ちなみに、これは年が明けたところに聞いた話だが薔薇十字加盟会社のVIP用カードだったらしい。空港何かで出せば、タダでスイートクラスに乗れるだけの代物だと双司さんが言っていた。このカードを見た後、双司さんは直ぐにどこかに電話し始めたがどうしたのだろうか？

さておき、いつの間にやら事務所に到着である。

「双司さん、餡蜜貰ったので香織も呼び戻して一緒に食べましょ

——つて……あれ？」

勢いよくドアを開いてみたものの、事務所の中は静寂に包まれていた。

何と言つか、人の気配が一切感じられない。

「……鍵も閉めないでコンビニでも行っただのでしょうか？」

出鼻を挫かれた気がして、ボフツとソファーに倒れ込む。

香織がいらないのは当たり前だとしても、双司さんが外出するなんて珍しいです。流れてる『もろびとこぞりて』を聞いてあんなに苦々しい顔してたのに……。

「うーん、このまま自宅に戻るのも癪な気がします」

と言っても、誰も居ないのでは当初の予定が丸つぶれである。

本当にどうしようかと悩んでいると、視界の隅——テーブルの影に何か四角い物が映った。

「——あつ、ベリアルさん。起きてたんですか」

私の言葉に答えるように、ふわふわと四角い物体が浮き上がってくる。

それは、赤いハードカバーに覆われた分厚い本だった。

——魔王第四写本【ベリアル】

六月ごろに起こったとある不思議体験以来、私が一人でいるときにだけ姿を現すマスコットみたいな人？ である。

個人的に色々と大変な目に遭わされた気がするが、しっかり謝っ

てくれたので今となつては良き話し相手だ。

「ぼーっとあの時のことを思い返しながら見つめていると、ぱらぱらと本のページがめくれていく。」

【……もってるソレ、なに？】

そうして、白紙のページに赤いインクで文字が浮かび上がった。その光景は、どう見たって呪われていそうなダイイングメッセージなのだが、これがベリアルさんの会話方法なのだから仕方ない。

「これですか？ 友人にお土産で貰った飴蜜つていうデザートですよ。甘くて美味しいんです」

【……あまいって、なに？】

「甘いつていうのは……食べると幸せな気分になれる味ですね」

ベリアルさんの会話は、こういう一問一答形式が多い。

と言うか、本だからなのか私達が普段気にも留めないような疑問が多いのだ。それに答えている内に、自然とこんな会話形式になつてしまったのです。

【しあわせ……あまい……】

そう書かれたページを開いたまま、ベリアルさんは空中で身体をゆするような動作をする。こういう所が小動物っぽくてぷりていーです。

そして、新しいページがめくれる。

【……たべてみたい】

「——いやいや、間違いなくベリアルさん湿っちゃいますからね！
紙は湿ると乾かしても元に戻りませんからね！？」

この美味しさを食べさせてあげたいのは山々なのですが、流石に本に餡蜜を垂らす訳にもいきませんしねえ……。

【……だいじょうぶ。わたし、まおう】

どこか自信満々に身体を揺らすベリアルさん。

いや、魔王って名前の本だってことは知ってますけど無理があるでしょう。

すると、ベリアルさんは新しいページを開き不思議な模様を描き始める。どこか英語に似ているような文字だが違う。とりあえず、日本語でないことは確かなようだ。

まるで高速コピー機のような音を立てて文字と模様が描かれペー
ジがめくれていく。

そういえば、結構こうやって会話することがあったのに、本のペー
ジが減っていない気がするのはどうしてでしょう？

やはり、双司さんみたいに魔法のようなものを使っているのでは
ようか？

【……できた】

日本語で文字が浮かび上がり、動きが止まった。

【あんみつ……かけて……】

どうやら自殺願望に目覚めたらしい。

「——だから餡蜜なんてかけたら間違いなく燃えるゴミの日に出されてしまいますよ!？」

ベリアルさんがバグってしまったようです。

先ほどまでの動きは、もしかしたら何かしらの動作不良でも起こしていたのかもしれませんが。

【……ちがう。うつわのせいしつ……かきかえた】

浮かぶ文字を見る限り、言ってる事は分からないが何かしたのは間違いなようです。

【だいじょうぶだから……あんみつ……】

子供がすりつくように太ももの上に降りてくるベリアルさん。
ああ、こうなっては言う通りにしない限りテコでも動かないだろう。

「……本当にどうなっても知りませんよ？ 来週ゴミ捨て場に転がっていても責任とれませんからね?」

【ワクワク……】

はあ、と溜息を吐きつつスプーンで餡蜜を開かれたページに垂らしていく。

——べちゃり、べちゃり、べちゃり。

「——って普通に汚れていつてるんですけど!？」

真っ白な空白のページを染め上げていく餡蜜。

あつ、今頭の中にベリアルさんのエンディングロールが流れました。残念な事に、この不思議な本との付き合いもこれまでらしい。さらばベリアルさん。次に生まれてくる時は、せめて食べ物で消化できる身体になっていて下さい……。

「…………あれ？」

白を塗りつぶしていた筈の餡蜜が、ゆっくりとスポンジが水を吸い込む様に染み込んでいく。そして、瞬く間に元の綺麗な空白のページに戻ってしまった。

【あんみつ……すき……】

「…………まさか、今のが食事ですか？」

何と言いますか、もうちょっとファンタジー的な食べ方をすると思ったら普通に染み込んでいった。シミすら残って無い所は間違いないファンタジーなのでしょうけど。

【さよ……もつとちようだい】

雛鳥に餌を与えるような心境とはかけ離れた光景を前に、頬を引き攣らせながら再び餡蜜を垂らす私でありました。まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5916r/>

銀と青～The Story Edition～

2011年11月15日13時21分発行